入学者選抜研究に関する調査室報告書 4

大学入試センター・シンポジウム◉2017

大学入学者選抜の新展開

新共通テストの課題と個別選抜改革の方向性

平成 30 年（2018 年）3 月　独立行政法人大学入試センター

独立行政法人大学入試センターは，平成 29 年 9 月 24 日，一橋大学一橋講堂（東京都千代田区）において，大学入試センター・セミナー2017 を開催した。本報告書は，同セミナーにおける講演，討論等を当センターの文責で採録したものである。

〔入学者選抜研究に関する調査室報告書　4〕

大学入試センター・シンポジウム◉2017

大学入学者選抜の新展開

－新共通テストの課題と個別選抜改革の方向性－

目　　次

■開会挨拶 —— 4 頁
山本　廣基（大学入試センター理事長）

◉基調講演　入試改革の世界的状況と日本の課題 —— 6
川嶋 太津夫（大阪大学高等教育・入試研究開発センター長）

●報告 1　新共通テストの概要と課題—— 33
大杉 住子（大学入試センター審議役）

●報告 2　モニター調査の内容と結果—— 48
大津 起夫（大学入試センター研究開発部長）

●報告 3　共通試験の役割と個別選抜改革—— 59
沖　清豪（早稲田大学入学センター副センター長）

■指定討論 ①—— 76
宮本 久也（東京都立西高等学校長）

■指定討論 ②—— 79
木村 拓也（九州大学大学院人間環境学研究院准教授）

◎全体討論—— 83
川嶋 太津夫/大杉 住子/大津 起夫/沖 清豪/宮本 久也/木村 拓也/大塚 雄作（司会/大学入試センター試験・研究統括官）

〔総合司会〕　山地 弘起　（大学入試センター試験・研究副統括官）

〔参考〕プログラム 102/ 参加者集計結果 103/ アンケート集計結果 104

一橋講堂
HITOTSUBASHI HALL
入館時
身分証明書を
ご提示下さい。
大学入学者選抜の新展開
新共通テストの課題と個別選抜改革の方向性

受付

■開会挨拶

山本 廣基（大学入学センター理事長）

大学入試センター理事長の山本でございます。本日は，全国各地から多くの方々にお集まりいただき，本当にありがとうございます。大学入試センター・シンポジウム 2017 の開催に当たりまして，一言御挨拶を申し上げたいと思います。

このシンポジウムは，当センターの大学入試研究成果について社会に発信するため，これまで大学入学者選抜に係るその時々の時宜にかなったテーマで開催してまいりました。今回は，昨今の大学入学者選抜に関する社会的関心の高まりや，「大学入学共通テスト」の実施方針が公表されたことを踏まえ，個別大学の入学者選抜の改革にも焦点を当てて，「大学入学者選抜の新展開」というテーマを設定いたしました。

高大接続改革については，御承知のとおり，平成 26 年 12 月の中央教育審議会答申，平成 28 年 3 月の高大接続システム改革会議「最終報告」を受け，文部科学省の検討・準備グループにおいて検討されておりました「大学入学共通テスト」の実施方針が，今年 7 月に文部科学省から公表されたところでございます。また，センターからは今年 5 月に国語と数学で行われる記述式の問題例を公表し，7 月には思考力・判断力・表現力を一層重視したマークシート式の問題例を公表いたしました。

この「大学入学共通テスト」の具体的な実施方針につきましては，国語，数学の記述式問題の実施方法，従来のマークシート式問題の改善，民間の資格・検定試験を活用した英語の 4 技能評価についての基本的な方向性が示されております。特に，記述式問題の出題につきましては，「国語」「数学 I」「数学 I・A」の 3 科目となり

ますが，思考力・判断力・表現力を評価しうる作問の在り方，限られた日数の中での採点の在り方等，また，英語の 4 技能評価について民間試験の導入など，問題作成や試験実施・運営全般にわたりまして検討すべき課題は多くございます。

私ども大学入試センターは，この「大学入学共通テスト」の具体的な実施運営に向け，本年 4 月より組織体制を整備し，精力的に検討を進めているところでございます。その検討の一環として，本年 11 月には高校生を対象に全国 5 万人規模の試行調査（プレテスト）を，高等学校を会場として実施する予定であり，記述式問題における採点基準，採点体制，採点にかかる期間の検証等，マーク式問題では，思考力・判断力・表現力を重視した作問の改善の在り方等，新テスト実施に向けた検証を行ってまいりたいと考えております。さらに，来年 11 月には，実際の運営を想定した全国 10 万人規模の試行調査を，大学を会場として実施する予定としております。今後，さらに専門的知見を得ながら，文部科学省と一体となって，様々な課題を乗り越え，新テストの円滑な実施に向けての準備を整えてまいりたいと考えています。

本日御参加の皆さま方におかれましては，本シンポジウムをとおして，「大学入学共通テスト」の全体の動向について情報を共有し議論を深める機会にしていただくとともに，共通試験と不可分である個別選抜の改革の方向性についても検討する機会にしていただきたいと考えております。

本日はまず，基調講演として大阪大学の川嶋太津夫先生に，「入試改革の世界的状況と日本の課題」と題して，世界的な潮流となっている高大接続改革の国外の事例を御紹介いただきながら，日本が直面している課題について御講演いただきます。続いて，当センター審議役の大杉より，「新共通テストの概要と課題」として，高等学校学習指導要領を踏まえた作問のねらいや「大学入学共通テスト」実施に向けた課題について，研究開発部長の大津からは，平成 28 年 11 月と平成 29 年 2 月～3 月の 2 回にわたり実施したモニター調査の内容と結果について御報告いたします。最後に，早稲田大学の沖清豪先生より，今後ますます関心が高まっていくと思われる大学入学者選抜改革における共通試験と各大学の個別選抜との関連について「共通試験の役割と個別選抜改革」と題して御報告いただきます。指定討論といたしましては，東京都立西高等学校長の宮本久也先生に高等学校教育の現場から，九州大学の木村拓也先生に大学教員の立場から，本日の基調講演や各報告への御意見・御感想を頂戴しつつ，全体討論への橋渡しをお願いしたいと思います。

午後いっぱいの長丁場となりますが，実りあるシンポジウムになりますよう，皆さまの御協力をお願いいたします。最後になりますが，御登壇いただく先生方，そして全国からこうして遠路多数参加していただきました皆さま方に心より感謝申し上げまして冒頭の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

◎基調講演

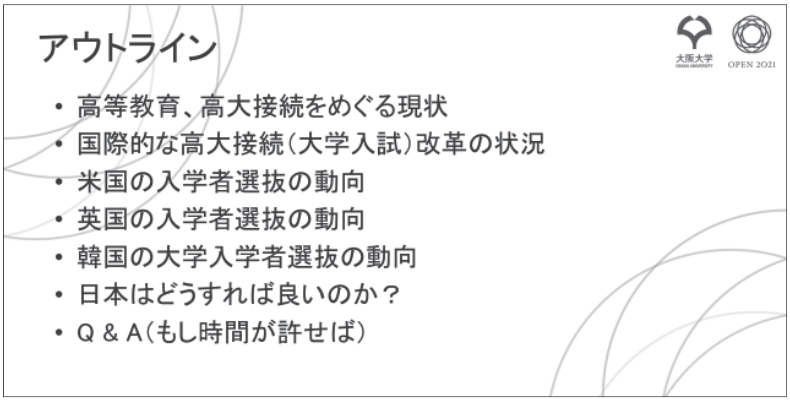
入試改革の世界的状況と日本の課題

川嶋　太津夫（大阪大学高等教育・入試研究開発センター長）

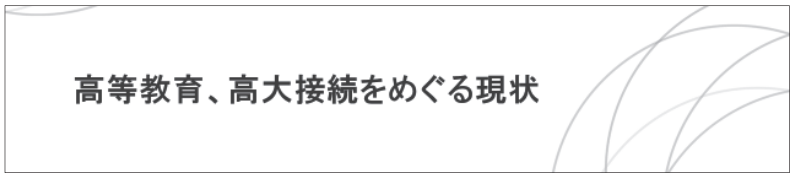
名古屋大学大学院で教育社会学を専攻。名古屋大学教育学部助手を経て，1993 年に神戸大学大学教育研究センターに助教授として赴任。その後，1999 年に教授に昇任。大学教育推進機構及び大学院国際協力研究科教授。2013 年 10 月より大阪大学未来戦略機構教授，2016 年 6 月より大阪大学高等教育・入試研究開発センター教授・センター長。他に，第 9 期中央教育審議会大学分科会臨時委員（大学院部会，専門職大学院ＷＧ，制度・教育改革ＷＧ，認証評価機関の認証に関する審査委員会），大学改革支援・学位授与機構運営委員，研究開発部客員教授，大学機関別認証評価委員会委員，国立大学協会入試委員会専門委員，大学入試センター全国大学入学者選抜研究連絡協議会企画委員会委員長等。現在の専攻分野は比較高等教育論。主な研究成果としては，『初年次教育：歴史・理論・実践と世界的動向』，『大学改革の現在』，『大学のカリキュラム改革』（いずれも共著）などがある。

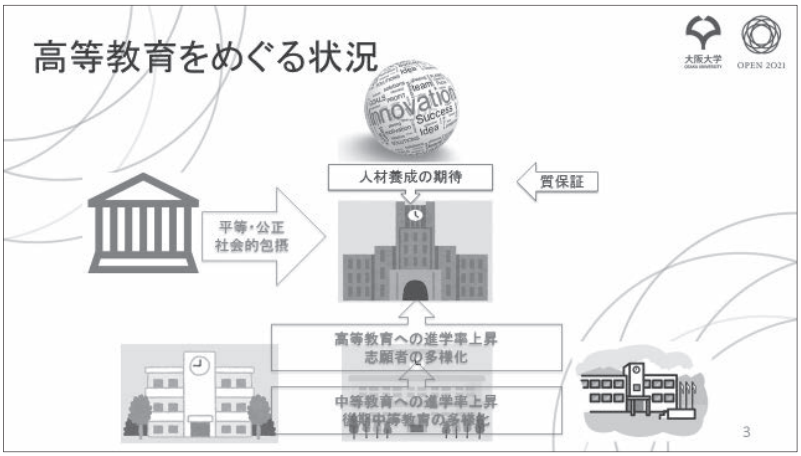
皆さん，こんにちは。大阪大学の川嶋でございます。私に課せられた今日のタスクは，現在我国で進行中の高大接続改革，あるいは今般の入試改革が，国際的な視点から見てどういう位置付けになるのかを御説明することだと思っております。

ただ，世界的状況と言っても，世界には 200 余りの国と地域がございます。それら全ての入試や入試改革がどうなっているかについては，当然私の力量を超えますので，今日は皆さんがたになじみの多い国・地域についてのお話であるということをあらかじめお断り申し上げたいと思います。



本日は，このような流れでお話ししたいと思います。



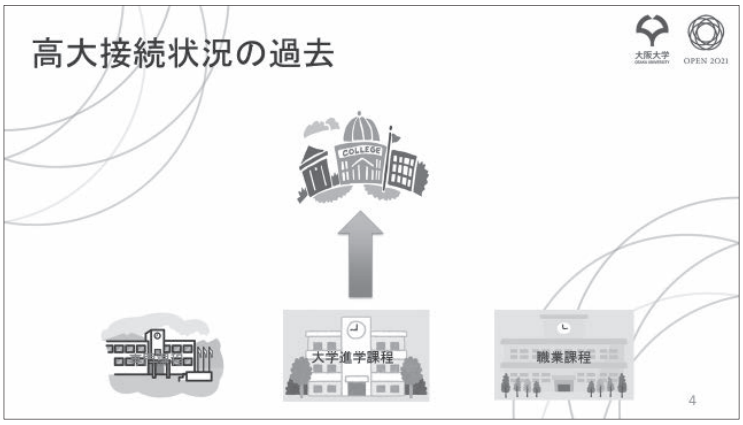


まず，「高等教育，高大接続をめぐる現状」です。我国だけではなくて，開発途上国も含めて多くの国で中等教育への進学率は上昇しています。その結果，志願者も様々なバックグラウンドを持った人たちになっており，後期中等教育は非常に多様化しています。日本では，３年ほど前に中教審の高等学校教育部会が，全ての高校生が共通に身に付ける資質・能力を「コア」と位置付けた「審議まとめ」を出したりもしています。

現在，大学には初等・中等教育関係者をはじめ社会一般から様々な期待や批判が寄せられています。産業界は，イノベーションが起こせるような人材を育成してほしいと要請しております。そういう初等・中等教育と社会，産業界との両方からのプレッシャーに，今の日本や多くの国々の大学は，応えなければいけない状況になっております。一方，政府の政策として，多くの国々で教育機会の平等や公正な選

抜が要請されています。

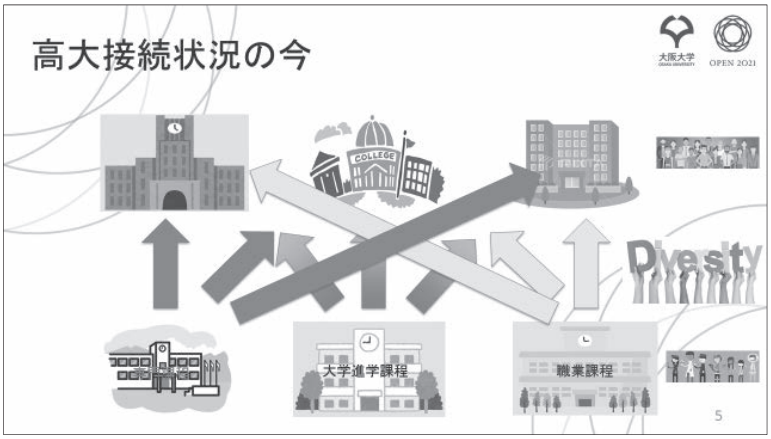
さらに，このような状況の中で大学は出口のところでは，きちんと人材の質保証をしなければいけないとも言われております。



■中等教育への進学者がどの国でも急増しており，後期中等教育と高等教育の接続が，非常に多様化し複雑になってきているのです。

少し長いスパンで，これまでの高大接続を見てみますと，日本では，戦前は大学進学者の準備教育は，いわゆる旧制高校で行われており，それ以外の教育機関からの大学進学は非常に限られていました。それと同様に，例えばイギリスでは，高大接続はグラマー・スクールからの進学にほぼ限られていましたし，ドイツ，フランスもしかりでございます。ある意味，高大接続の構造は非常にシンプルだったということになります。

ところが現在は，先ほどお話ししたように，中等教育への進学者がどの国でも急増しており，後期中等教育と高等教育の接続が，非常に多様化し複雑になってきているのです。



日本でも，随分前から職業高校や専門高校からの進学者が増えてきておりますし，

諸外国でも，例えばヨーロッパでは，グラマー・スクールや，リセ，コレージュ，ギムナジウムといった伝統的な進学課程以外の，いわゆる職業中等教育課程の修了者にも大学進学の資格が認められるようになってきています。

国際的な高大接続（大学入試）改革の状況

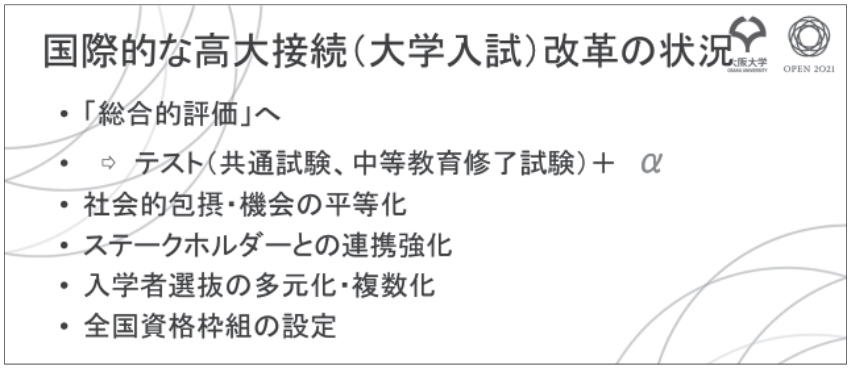
そこで，「国際的な高大接続（大学入試）改革の状況」ですが，具体的な取組について，ユネスコのバンコク事務所が 2 年ほど前に出した「The Transition from Secondary Education to Higher Education－Case Studies from Asia and the Pacific」という報告書に基に，主にアジア太平洋地域についてお話し，それに加えて米英の状況をお話ししたいと思います。

アジア太平洋地域では，これまでの大学入学者選抜は，国によって，完全に政府の画一的な規制の下で行われている選抜と，大学が自律的に行っている選抜の，大きく二つのパターンに分かれていましたが，最近は，両者が手を組んでと言いますか，一定の共通の枠組みの中で，しかし実際の実施については大学が自主的，自律

的に入学者選抜を行うという，言わば共通のルールに基づく自主的な入試という方向に変わってきております。

日本でも，毎年文部科学省で開かれている「大学入学者選抜方法の改善に関する協議」の場で，大学入学者選抜実施要項という共通のルールが決められ，それに基づいて各大学が自主的に入学者選抜を行っていますし，さらに国立大学の場合は国立大学協会の共通ルールに基づいた入学者選抜を実施しています。

今回の改革でも，一般選抜，総合型選抜，学校推薦型選抜という三つの選抜方式の募集開始時期や合格発表時期について統一的なルールが決められ，それに基づいて各大学は選抜を行っていくということになっております。



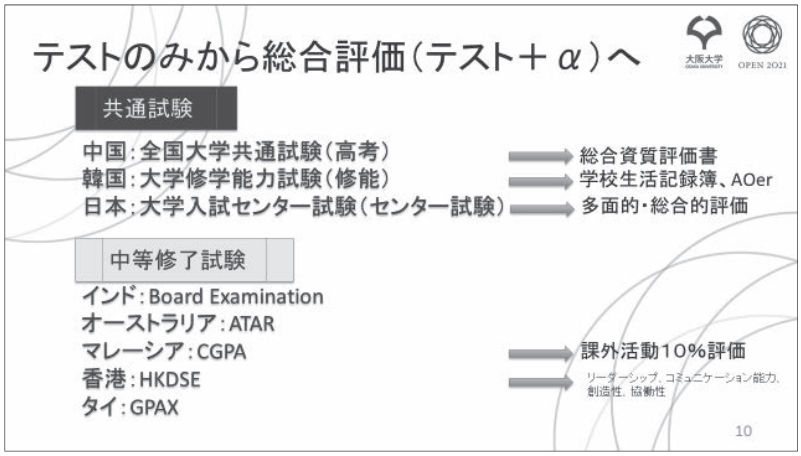
アジア太平洋地域においては，入学者選抜はやはり総合的な評価へ変わろうとしています。これまでヨーロッパ諸国の植民地であった国々においては，中等教育修了試験が大学進学資格を兼ねていましたが，この中等教育終了試験に加えてプラスアルファの評価を加えていくというのが，アジア太平洋地域で行われている入試改革の共通の傾向であります。

また，これまで高等教育への参画の機会が剝奪されていた地域やグループに，できるだけその機会を与えるような仕組みを作ることが行われています。

そして，ステーク・ホルダーとの連携強化。例えば，日本でも行われておりますけれども，高等学校との情報交換や協力，あるいは産業界との協力を強化しようとしています。

入学者選抜の多元化・複数化ということで，大学進学のルートの複線化の動きもあります。先ほどお話ししたようにフランスで，職業バカロレアも大学進学の資格として認められるというようなことです。

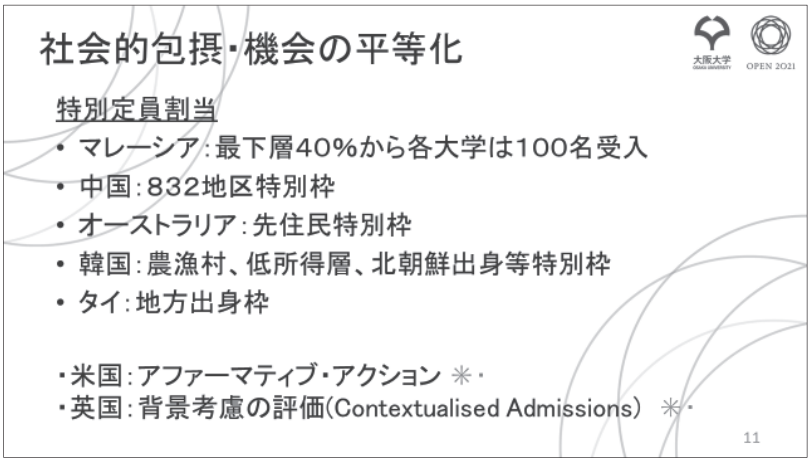
初等・中等教育，高等教育も多様化しておりますので，それぞれの達成目標を定めた，いわゆる全国資格枠組（National Qualifications Framework）というものを設定している国も増えています。それによって，各学校段階の接続関係が明確になるということであります。



「テストのみから総合評価へ」という動きを御説明いたします。

まず，大規模な共通試験を実施している国の場合です。中国では全国大学共通試験（高考），韓国では大学修学能力試験（修能試験），我国では大学入試センター試験（センター試験）というような共通試験だけで大学入学者選抜が行われたり，ヨーロッパの旧植民地の国々では宗主国の影響を受けた中等教育の修了試験が大学進学の資格になっていたわけですが，現在では，例えば中国ですと，高等学校の先生が作成する生徒一人一人の評価書を入学者選抜に活用する。また，韓国では，多くの大学で修能試験だけの入学者選抜ではなく，学校生活記録簿をアドミッション・オフィサーが評価するというような形での多面的・総合的評価に向けた改革が行われています。

中等修了資格試験を採用している国でも，インドやオーストラリアでは，後期中等職業教育機関からの進学資格を認めるとか，あるいはマレーシアですと，選抜の際，課外活動を 10%評価に組み入れるとか，香港は教科科目ベースの中等修了試験に加えていわゆる高次思考能力，あるいは汎用的な能力の評価も加えるというような形での改革が行われているということであります。

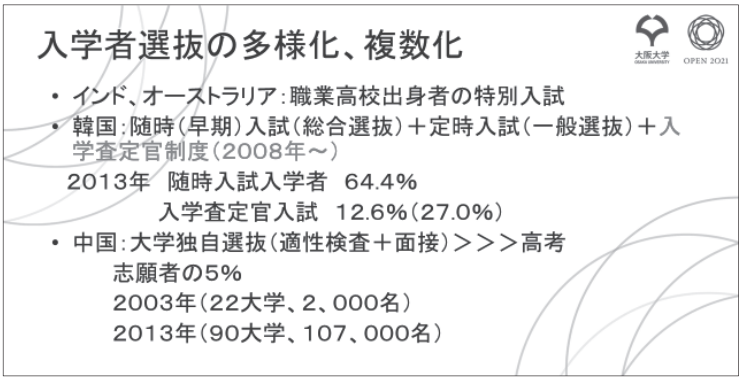


できるだけ多くの若者に大学進学，高等教育進学の機会を与えるために，クオータ制度（定員の割当て制度）を採用している国々もあります。マレーシアでは最下

層 40%の家庭からの志願者を各大学は 100 名受け入れなければいけません。中国では 832 の特別な地域が指定されていて，そこからは別枠で合格者を採ります。オーストラリアでは先住民特別枠があります。韓国は後でもお話ししますけれども，特別な背景を持った志願者に対して定員を割り振るということが行われています。タイでは，東北部のようなかなり貧しい地域からの出身者を別枠で入学させています。

あとでお話いたしますが，マイノリティー等の優遇措置が行われている国もあります。御承知のように，米国にもアファーマ・ティブアクション（affirmative action）という優遇措置がありますが，近年はこれを逆差別として禁止する州も出てきています。英国では，背景考慮の評価（Contextualized Admission）という動きも出ております。

こういう形で，できるだけ多くの若者に高等教育進学の機会を与えるという政策転換が各国で行われているということです。



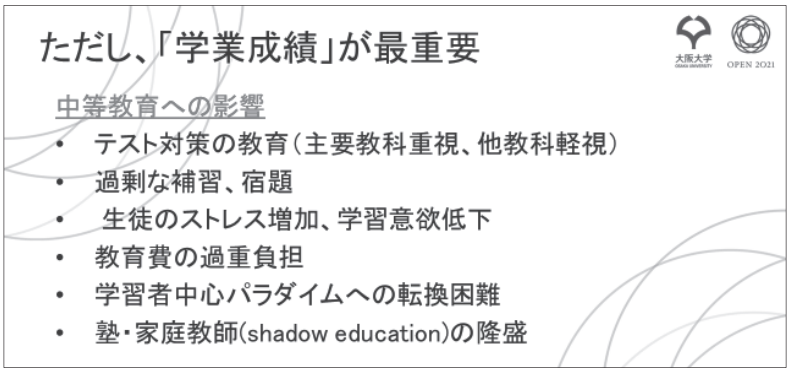
入学者選抜の多様化，複数化ということにつきましては，先ほどお話ししたとおりで，インドやオーストラリアでは職業高校出身者のための特別入試が実施されています。

■総合的な評価に変わっているのがアジア太平洋地域のトレンドだと言いつつも，やはり一番重視される要素は学業成績です。

韓国では，「随時入試」と「定時入試」というように選抜時期が複数化されており，政府のイニシアチブで入学査定官（アドミッション・オフィサー）制度による総合的な評価が導入されています。この随時入試というのは，日本で言うところの AO 入試とか推薦入試ですが，2013 年には大学入学者の 3 分の 2 は随時入試で入学しており，修能試験だけという入試はどんどん減少しているということです。入学査定官制度による入学者の比率は，既に 3 割近くまで増えていると言われています。

中国も，御承知のように毎年数百万人が高考を受験しますが，特定の大学では，

この共通試験に先立って大学独自に適性検査や面接を行って，その後高考の成績を考慮して総合的に合否を決めるという方法が行われており，だいたい高考志願者の5%程度がこの方法で選抜されると言われております。この方法が導入された2003年は国家重点大学の清華大学等 22 大学のみにこの制度が適用されて入学者は2,000人ほどでしたけれども，2013年には90大学までに拡張され10万人余りが，この大学独自評価を踏まえた選抜で大学に入学していると言われております。



テストの成績にプラス・アルファの要素を加えた総合的な評価に変わっているのがアジア太平洋地域のトレンドだと言いつつも，やはり一番重視される要素は学業成績です。したがって，先ほど紹介した韓国の修能試験や中国の高考，また，オーストラリアのような中等教育修了試験，こういう教科科目を中心としたテストの結果が依然として重視されていることには変わりはないということです。

その結果，中等教育には幾つかのネガティブな影響が出ています。例えばテスト対策のための教育になっている，入試で課される主要教科は重視するけど，課されない教科はあまり顧みられない。そして過剰な補習や宿題が高校から課されたりもします。結局，生徒はストレスが増加してモチベーションが下がるとか，また，shadow education とも言われたりするようですが，塾や家庭教師のための出費が膨らみ，家計に大きな負担となってきているわけです。そして，学習者中心のパラダイムへの転換，つまり教えることよりも学生が何を学んだかを重視する教育への転換が，このテスト対策の教育のためになかなか進まないということであります。

日本の高等学校でもアクティブ・ラーニングの導入で教育の在り方を学習者中心に変えることが期待されていますけれども，やはり大学入学者選抜で何を問うのかが，そのような動きに大きな影響を与えるという点には，我々大学関係者も留意すべきだろうと思います。（➡）

米国の入学者選抜の動向

ここからは皆様方がおなじみの国の入学者選抜を，もう少し詳しく見ていきたいと思います。

これからお話しするアメリカ，イギリス，韓国の改革の動向については，大阪大学で開催したセミナーやシンポジウム等にお招きした先生方が御紹介くださった資料を使わさせていただいております。

まずアメリカです。アメリカの入学者選抜の方法には「フォーミュラ方式」と「総合評価（Holistic Review）」というものがあります。これらがどういうものかについては後でまたお話しします。

それから，入試の日程で分類しますと，まず，早期決定（Early Decision）。言わば専願です。この大学だけに出願して，合格の場合は他の大学には出願できないという，いちばんバインディング（縛り）がきつい入試です。これは 11 月初旬に出願しても年内に合否が通知されます。次に早期出願（Early Action）。出願と合否発表のスケジュールは早期決定（Early Decision）と同じですが，併願が可能です。ただし，HYPS と略されたりするハーバード大学，イェール大学，プリンストン大学，スタンフォード大学はこの Early Action は実施していません。その次が一般選抜（Regular Admission）です。11 月末まで出願して合否発表は 3 月末です。さらに随時選抜（Rolling Admission）というものもあります。定員が埋まるまで最終的には 3 月末まで願書を評価して合否を決めて通知します。いずれの入試日程でも最終的には5月1日までに志願者はどの大学に入学するかを決めなければいけません。

日本でも「大学入学者選抜方法の改善に関する協議」の場で，大学入試の出願時期や合格発表の時期などを関係者が協議し，文部科学省が「大学入学者選抜実施要項」で定めておりますが，アメリカでは NACAC（The National Association for College Admission Counseling）というアドミッション・オフィサーと高等学校の進路カウンセラーの職能団体が決めています。日本のように政府が決めているわけではなくて，大学入学選抜に係る関係者の団体の自主的な取決めを各大学が守って

いるという仕組みです。NACAC は，入試日程ガイドラインのほか倫理規定を定めたり，あるいは職員研修を実施しております。

早期決定、早期活動、待機リストを使っている大学の割合

	早期決定	早期出願	待機リスト
すべての調査回答者	**20.8%**	**33.8%**	**38.5%**
設置者			
公立	7.2	28.2	30.5
私立	28.6	37.2	43.1
学生数			
3,000 人未満	27.3	29.9	37.1
3,000 人から 9,999 人	22.1	36.6	40.9
10,000 人以上	4.4	37.4	49.5
選抜性			
出願者の 50% 未満を受入	49.0	29.0	77.0
50% から 70%	20.3	35.6	37.9
71% から 85%	15.1	37.2	33.7
85% 以上	3.0	24.2	9.1
歩留まり			
入学許可者の30%未満が登録した	25.1	40.8	44.4
30% から 45%	18.0	22.9	33.5
46% から 60%	17.9	17.9	32.1
60% よりも多い	--	20.0	50.0

Note: -- No institutions in category. Source: NACAC Admission Trends Survey, 2015

これが入試日程の全国的な比率でございます。NACAC のホームページに毎年掲載されている「ステート・オブ・カレッジ・アドミッション」という報告書から引用したものです。大体が Early Decision と Early Action です。それから Regular（待機リスト）というのは，早期出願で合否が決まった後，まだちょっと他の合格者が入学するかしないかで最終的な判断を保留にしますという，そういうような取組で最終的な入学者を決める方法です。各日程が大体等分に分かれていますが，やはり早期決定や早期出願というのは，どちらかというと私立大学に多いようです。

また，学生数で言いますと，小規模な大学は合格者を早めに決めてしまうという傾向がこの表からもうかがえると思います。

特徴（続）

共通ウェブ出願システム
- Common Application
- Universal College Application
- Coalition for Access, Affordability, and Success

NACAC（アドミッションオフィサー＆高校の進路カウンセラーの専門職団体）
- 入試日程ガイドラインの策定、専門職研修等

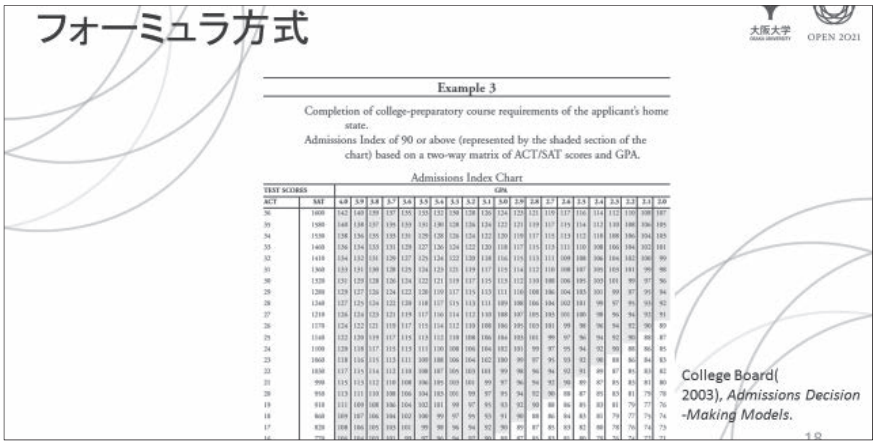
共通テスト(SAT/ACT)非利用大学の増加
- 950+ “Test Optional”

日本がアメリカから学ぶべきことの一つは，やはり共通のウェブ出願システムが随分前から整っていることです。一番規模が大きいのは Common Application という出願システムです。それよりはかなり参加大学が少ないものですけれども，Universal College Application というシステムもあります。

■最近の傾向としては，SAT や ACT という共通テストの受験を出願の要件として求めないかオプションにしている大学が徐々に増えて 1,000 校近くあると言われています。

また，これはつい最近作られたのですが，Coalition for Access, Affordability, and Success という，90 近くの大学がコンソーシアムを組んで作ったシステムがあります。名前に Access, Affordability, and Success とあるように，従来なかなか大学進学機会がなかった層に対して，大学や関係者，あるいはコミュニティー全体でサポートしようという取組として始まったものです。また，聞くところによると 2〜3 年前の出願の時期に，Common Application がダウンして大変なトラブルになり，やはり出願システムは複数あった方がいいということで設立されたとも言われております。例えば卒業率が 85%以上というような，かなりクオリティーの高い大学が参加しています。このシステムにはロッカー（Locker）と呼ばれる，e ポートフォリオの仕組みも附属しています。私立のハイスクールですと複数の進路カウンセラーがいますけれども，大都市の大規模な公立高校ですと，例えば一人か二人の進路カウンセラーが 2,000 人ぐらいの高校生の進路指導をしなければなりません。それではとても十分な進路指導ができないということで，確か中学 2 年生ぐらいから使えると思いましたけれども，生徒がこのロッカーに様々な自分の活動報告をアップ・ロードできます。大学関係者，高校関係者，地域の人たちがそれを見て，生徒一人一人にいろいろなアドバイスができるという仕組みです。

なお，最近の傾向としては，SAT や ACT という共通テストの受験を出願の要件として求めないかオプションにしている大学が徐々に増えて 1,000 校近くあると言われています。共通テストの受験を任意とする方式はテスト・オプショナルと呼ばれています。そういう方式をとるのにはいろいろな理由がありますが，一つはこれらの共通テストには文化的なバイアスがかかっていて，特定の地域や人種の受験者には不利だというような批判があったり，あるいは，高校の GPA の方がテストスコアよりも入学後 1〜2 年のリテンション（retention）率（学生が大学にとどまっている率）に関連するという分析があるからです。



先ほどお話ししたように，選抜方式には，大きくフォーミュラ方式とホリスティック・レビューの二つがあります。

フォーミュラ方式というのは，高校の GPA と，それから SAT や ACT のスコアの合計で機械的に合否を決める方式です。この表の例ですと，両方の換算点を合わせて 90 点以上あれば機械的に合格となります。

分かりやすい例はカリフォルニア州です。同州には御存じのように高等教育のマスター・プランというものがありまして，それに基づいて UC（University of California）と CSU（California State University and Colleges），CCC（California Community College）という，三つの層の大学が高等教育を担っていて，それぞれの役割も明確に定められています。

UC は現在 10 校，ここは研究型大学でドクターまで出せます。こういう大学は全てホリスティック・レビューを採用しています。と言いますのも，御承知のように高校の成績の上位 12.5%の高校生のみがこの UC には出願できる資格を持っているわけですが，ほぼ全ての志願者はストレート A と言いますか，GPA4.0 ですから，試験の点数と高校の成績では合否が決められません。そこで，ホリスティック・レビューということでプラス・アルファの要素として自主的な活動とかリーダーシップとかコミュニケーション・スキルなどを評価するということになっているんだろうと思います。これはハーバード，スタンフォード，イェール等の有力な私立大学でも同様です。

■「伝統的/完全ホリスティック（全体的）方式」は文字どおりのホリスティックです。ある大学の例では，とにかくアドミッション・オフィサーが一人の志願者の出願書類を全部読んで，最後にこれはうちの大学にふさわしい学生かどうかを，合格，不合格，保留という形でエイヤー！と決めるそうです。

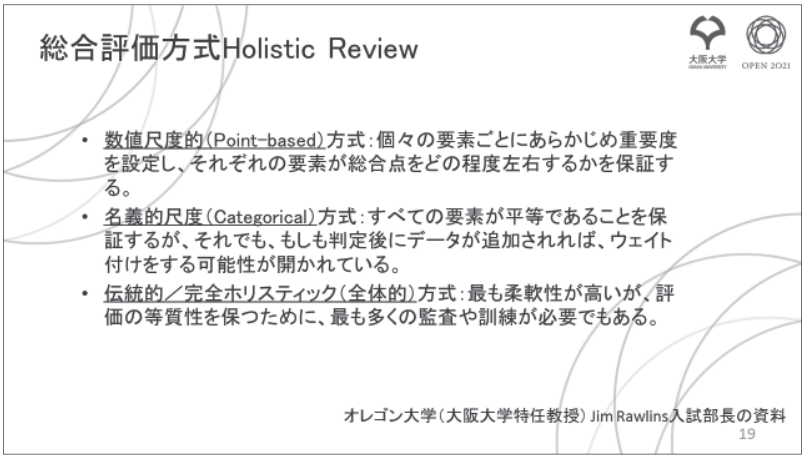
最近よく話題になりますが，アジア系，特に中国系の学生が SAT や ACT で満点取っているのになぜ合格できないのかと，ハーバードとかスタンフォード，UC バークレーを相手に訴訟を起こしたりしています。しかし大学側にしてみれば，アカデミックな面では全ての志願者がほぼ同レベルなので，プラス・アルファーとして学力テスト以外の幾つかの要素を考慮して，総合的に評価しているということでございます。

CSU は 20 以上キャンパスがありますが，出願資格は，高校での成績が上位 33.3%です。とにかく出願者の層が非常に多様ですので，大学教育についていけるだけの一定の学力水準を確保するために，このようなフォーミュラ方式を取っているわけです。

CCC は無選抜ですから，高校卒業生であれば誰でも入学できます。

ちなみにホリスティック・レビューを行っているUCでは，教員たちが評価の観点を定めて，それに基づいて専門職であるアドミッション・オフィサーが評価を行っています。CSUはフォーミュラ方式のみでする選抜です。

UCでもCSUでも各大学のアドミッション・オフィスのウェブ・サイトには，どういう観点で評価するのかが，ときには計算式まで示されており，どういう人が合格できるのかが明確です。私の大学のスタッフがサンディエゴ州立大学（San Diego State University）に入試についての調査に行こうと連絡を入れたところ，全て公表しているとおりにやっているので来校されても何も話すことはありませんと言われたというエピソードもあるくらいです。



これはオレゴン大学のジム・ローリンズ（Jim Rawlins）入試部長が大阪大学のセミナー等でお使いになった資料ですが，総合評価方式（Holistic Review）は，大きく，「数値尺度的（Point-based）方式」，「多義的尺度（Categorical）方式」と「伝統的／完全ホリスティック（全体的）方式」という3方式に分かれるそうです。

「数値尺度的（Point-based）方式」というのは，個々の評価要素ごとに重要度を設定し，それぞれの要素にポイントを割り当てて，最終的に足して合否を決めます。例えばGPAについて3.9から4のレンジだったら10ポイントというような設定をします。なお，よくアメリカで聞かれますが，単にGPAが高ければいいのではなくて，どれくらい高度で難しい上級のコースを取ったかという，コース・ディフィカルティにも注目しているようです。 APやIBを取っていれば非常に高いポイントが与えられるそうです。

「名義的尺度（Categorical）方式」というのは，幾つかの観点ごとに，平均，平均以下，平均より上という3段階ぐらいで評価して，トータルで最終的な判断をする方法です。

「伝統的/完全ホリスティック（全体的）方式」は文字どおりのホリスティックです。ある大学の例では，とにかくアドミッション・オフィサーが一人の志願者の出願書類を全部読んで，最後にこれはうちの大学にふさわしい学生かどうかを，合格，不合格，保留という形でエイヤー！と決めるそうです。それが完全なホリステ

ィック・レビューというものです。いちいち評価項目に点数を付けたりチェックはしません。

ところで，これまでのホリスティック・レビューでは，二人のアドミッション・オフィサーが個々に一人の志願者の書類を読んで，評価が一致していればもうそれで終わり。一致しない場合はさらに上級のアドミッション・オフィサーが最終判断するという形でやっていましたが，ペンシルベニア大学（University of Pennsylvania）が導入した新しい方式では，二人のアドミッション・オフィサーのうちの一人はアカデミックな面を評価する。他の一人はノン・アカデミックな面を評価して，最終的に二人が意見交換して決めるというやり方をしています。これは非常にイノベーティブな審査方法だと言われていまして，もちろん書類は全てウェブと言いますか電子化されており，コンピューターのモニターの前で各アドミッション・オフィサーが評価に従事しているということであります。もちろんデメリットもあって，従来の一人が全部を見るやり方は，家に持ち帰って自宅で仕事もできたんだけど，この二人がペアでするやり方では大学に出てこなければいけないというデメリットがあるとも言われていますし，逆に，家に仕事を持ち帰らなくていいよねという評価もあると聞いております。

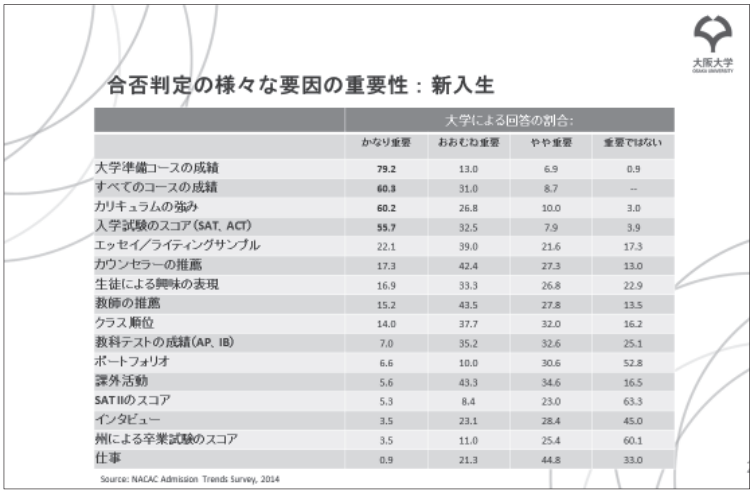
■総合的評価には，ある意味それを隠れみのにして採りたくない学生は入れない。逆に採りたい学生は採れるという，そういう機能もあるということであります。

ところで，このホリスティック・レビュー，もとはと言えば，20 世紀初頭にイェール，プリンストン，ハーバードというアイビー・リーグの大学がユダヤ人学生の入学比率を一定の規模に抑制するために取り入れたとも言われています。それまでは，学力テストの成績で合否を決めていたのですが，そうしますと，ユダヤ人学生は非常に優秀ですから，どんどん入学者の中に占める比率が高くなってしまいます。

アイビー・リーグの大学は，植民地時代からの長い伝統を持ち，同窓生も非常に多い。そして彼らの多くは子弟を自分の母校に入学させたいと思っているわけです。そういう同窓生からの圧力によって，言い換えれば，それぞれの大学が培ってきた大学のカルチャーを守るという目的のためにもホリスティック・レビューが導入されたのです。そういった経緯は，アイビー・リーグの入試の歴史を調べたジェローム・カラベル（Jerome Karabel）という社会学者の『The Chosen』という分厚い本に書かれています。つまり，総合的評価には，ある意味それを隠れみのにして採りたくない学生は入れない。逆に採りたい学生は採れるという，そういう機能もあるということであります。

なお，面接ですが，一般的に州立大学では行っておりません。私立大学は，各地

にいる同窓生を動員して行いますが，その結果は，合否判定ではほぼ参考程度と言われております。

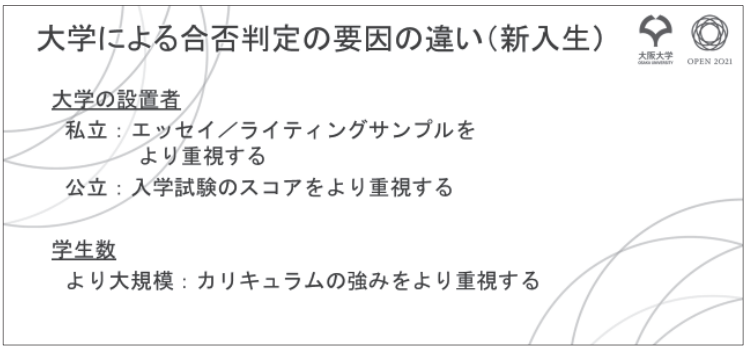


合否判定の様々な要因の重要性：新入生

	大学による回答の割合:			
	かなり重要	おおむね重要	やや重要	重要ではない
大学準備コースの成績	79.2	13.0	6.9	0.9
すべてのコースの成績	60.3	31.0	8.7	--
カリキュラムの強み	60.2	26.8	10.0	3.0
入学試験のスコア（SAT、ACT）	55.7	32.5	7.9	3.9
エッセイ/ライティングサンプル	22.1	39.0	21.6	17.3
カウンセラーの推薦	17.3	42.4	27.3	13.0
生徒による興味の表現	16.9	33.3	26.8	22.9
教師の推薦	15.2	43.5	27.8	13.5
クラス順位	14.0	37.7	32.0	16.2
教科テストの成績（AP、IB）	7.0	35.2	32.6	25.1
ポートフォリオ	6.6	10.0	30.6	52.8
課外活動	5.6	43.3	34.6	16.5
SAT IIのスコア	5.3	8.4	23.0	63.3
インタビュー	3.5	23.1	28.4	45.0
州による卒業試験のスコア	3.5	11.0	25.4	60.1
仕事	0.9	21.3	44.8	33.0

Source: NACAC Admission Trends Survey, 2014

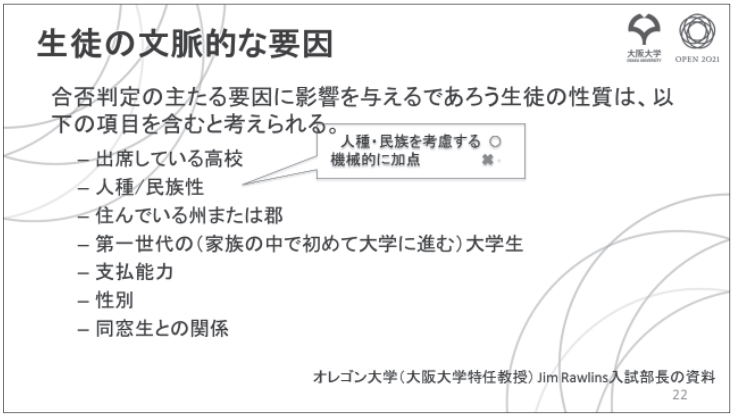
合否判定の際に考慮される要因です。この表も NACAC の「ステート・オブ・カレッジ・アドミッション」のデータですけれども，やはり「大学準備コースの GPA」や「全てのコースの GPA」であったり，どれくらい難しい科目を学んできたかとか，あるいはテストのスコアが重視されているようです。つまり，アジア太平洋地域でもそうでしたが，やはり大学は知的トレーニングの場ですから，基礎学力というのは一番重要な評価の観点になっているということでございます。



全体の傾向としては，私立大学はどちらかというとエッセイ，志望理由書といったものを重視しており，公立大学では，フォーミュラ方式が典型的ですけれども，入学試験，共通テストのスコアを重視しているようです。

■出身高校，人種/民族性，住んでいる地域，ファースト・ジェネレーション（家族の中で初めて大学に進む）かどうかとか，支払い能力，性別，あるいはレガシーと呼ばれる同窓生の子弟といったものがホリスティック・レビューの際の評価の観点になると言われております。

また，学生数が大規模になりますと，高校でどんな科目を履修してきたかを重視するようです。いずれにしてもアカデミックな側面を重視しているということには変わりありません。

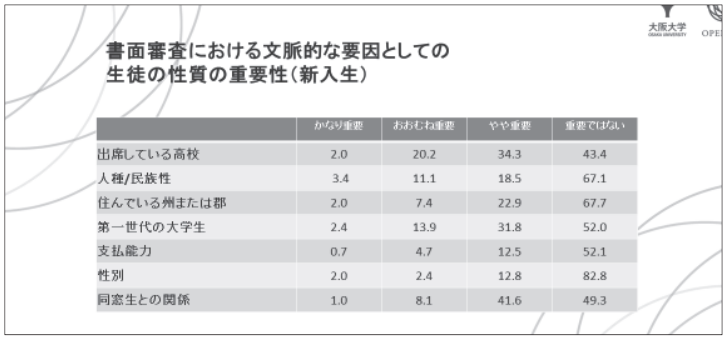


次に，多様な背景を持っている学生，特にこれまでは進学の機会が剥奪されていたような学生の評価についてですが，出身高校，人種/民族性，住んでいる地域，ファースト・ジェネレーション（家族の中で初めて大学に進む）かどうかとか，支払い能力，性別，あるいはレガシーと呼ばれる同窓生の子弟といったものがホリスティック・レビューの際の評価の観点になると言われております。

なお，この人種/民族性については，1960 年代以降，アファーマティブ・アクションという人種的なマイノリティーや女性の優遇策が行われておりました。しかし，当時から，白人の自分より GPA が低い黒人の方が入学が許可されたとかということで裁判沙汰になったりもしていました。1978 年に判決が出たバッキ裁判（Regents of the. Universityof California v.Bakke）というのが有名です。現在は多くの州で，そのアファーマティブ・アクションは廃止されております。

ただ，ここ数年の間に，ミシガン大学やテキサス大学で，このアファーマティブ・アクションに関する訴訟が起きまして，連邦最高裁は，例えばアフリカ系アメリカ人だからといって機械的に 5 ポイントとか 10 ポイントを加点するのは憲法違反だが，入学者選抜において人種/民族性を考慮することは別に憲法違反ではないという最終的な判決を出しております。

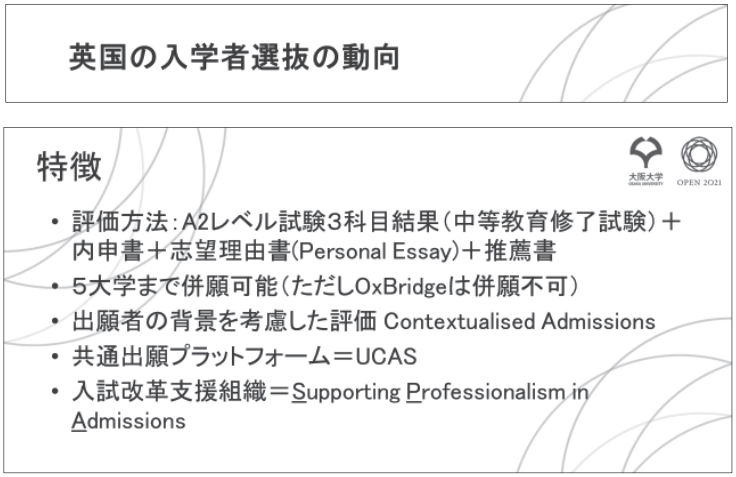
そのようなわけで，現在でもホリスティック・レビューにおいて人種/民族性はいい意味でも悪い意味でも考慮の要素の一つになっているということであります。



書面審査における文脈的な要因としての生徒の性質の重要性（新入生）

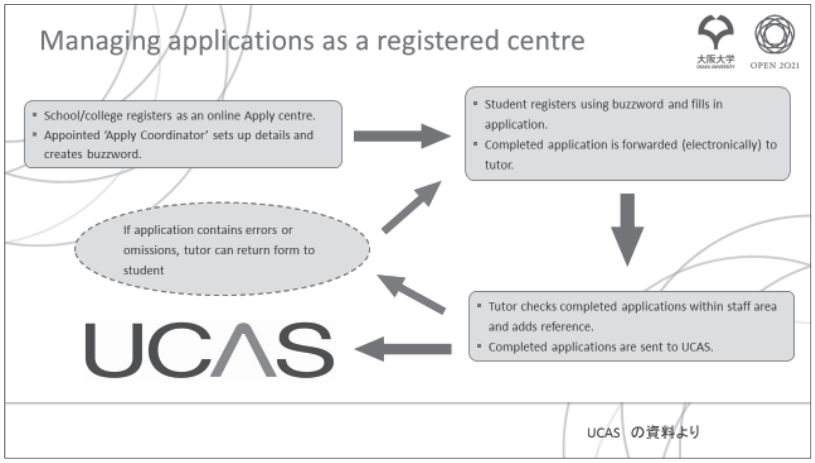
	かなり重要	おおむね重要	やや重要	重要ではない
出席している高校	2.0	20.2	34.3	43.4
人種/民族性	3.4	11.1	18.5	67.1
住んでいる州または郡	2.0	7.4	22.9	67.7
第一世代の大学生	2.4	13.9	31.8	52.0
支払能力	0.7	4.7	12.5	52.1
性別	2.0	2.4	12.8	82.8
同窓生との関係	1.0	8.1	41.6	49.3

これが，書面審査における文脈的判定要素の重要度です。出身高校や性別はほとんど重要な要素にはなっていないようです。ただ，よく言われるレガシー，同窓生の子弟かどうかと，第 1 世代であるかというのもかなり重視されています。人種/民族性も同様でございます。



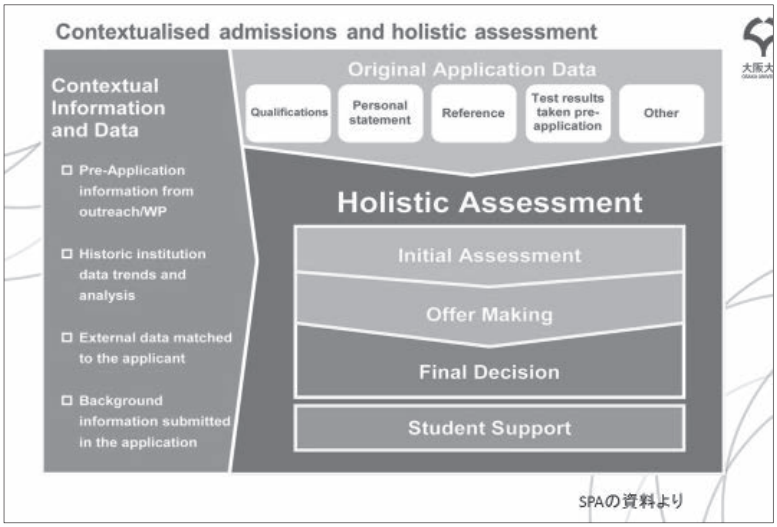
次に，イギリスでございます。イギリスの大学入試での評価の方法というのは，シックスフォームの 2 年目に受験する GCE（General Certificate of Statement）Advanced level（A 2 レベル）の 3 科目の結果と内申書と志望理由書（Personal Essay）と推薦書で行われます。例えばある大学の社会学科は，A2 レベルで，社会学，政治学及び英語の全てが A でなければいけないとか，A-B-B でいいとか，そんなふうに出願要件を指定をするわけです。

全ての受験生は共通出願プラットフォーム UCAS（Universities and Colleges Admissions Service）を通じて出願します。5 大学までは併願可能です。ただし，オックスフォード大学とケンブリッジ大学を併願することはできません。なお，各大学の入試改善を支援する組織として，SPA（Supporting Professionalism in Admissions）がこの UCAS の中に置かれています。

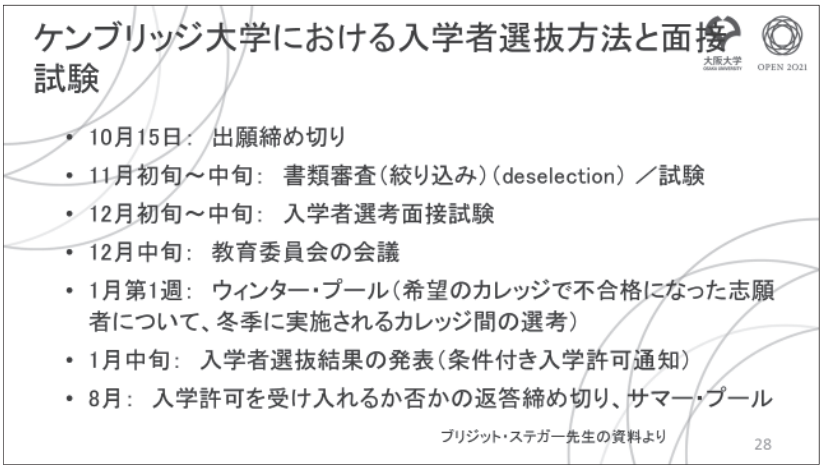


大学入学志願者はシックス・フォームを経由して，UCAS のウェブ・システムを通じて志願大学に出願します。

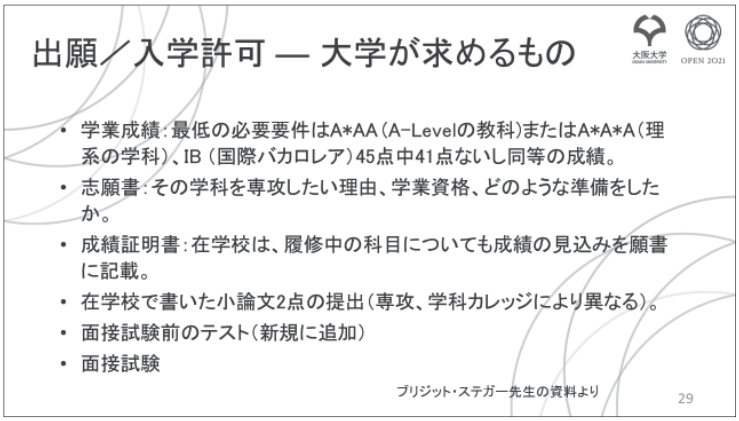
UCAS は大学出願の支援をしているだけではなくて，進学相談もしています。私が訪問したときには，広い部屋に何名かのスタッフがいまして，自分はこういう職業に就きたいがどうすればよいかというような電話相談に応ずるというサービスも行っておりました。



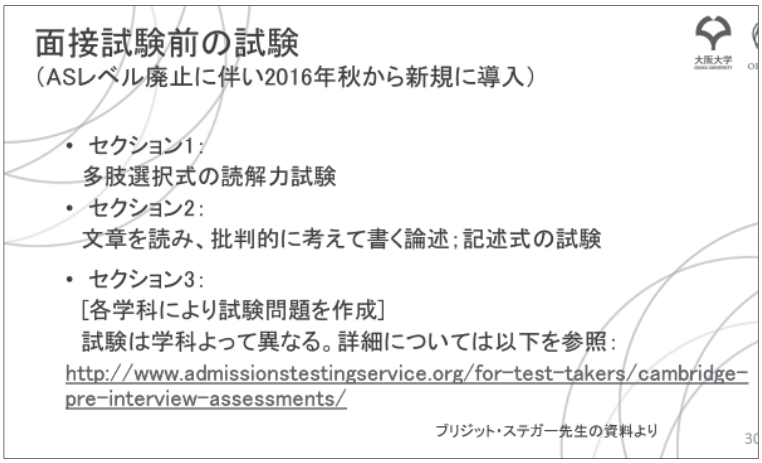
イギリスでも文脈的要因を考慮した選抜 Contextualised admissions が行われています。アメリカでもイギリスでも郵便番号を見れば志願者の住んでいる地域が，裕福な地域なのか貧困地域なのかは分かりますし，高校の状況も分かりますので，志願者本人の情報だけでなくて，学校，家庭，地域といった情報を考慮した上で最終的に合否を決めるということが今行われつつあるということです。



多くの大学は今御説明したような手続きで合格者を決めているわけですが，ケンブリッジ大学とオックスフォード大学は独自の入試を行っています。これはケンブリッジ大学のスケジューリングです。



やはり出願の要件は，A2 レベルの成績がトリプル A 以上のもの，つまり A スターも一つないし二つ必要だとか。IB ですと 41 点以上ないといけないというようなかなり高い水準になっています。

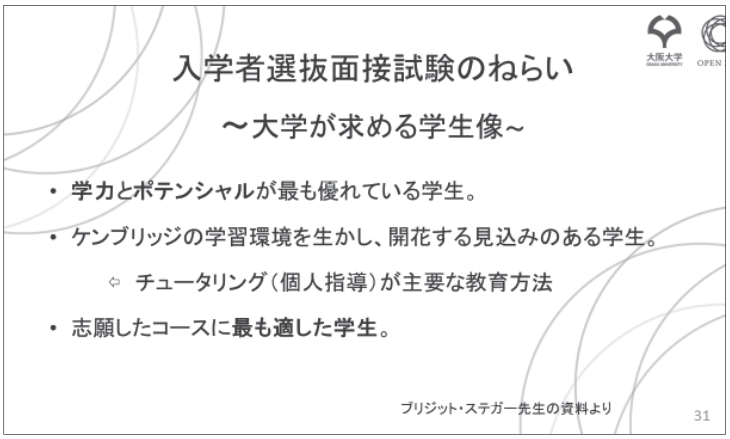


最近の変化と言いますと，シックス・フォームの 1 年修了時で受けていた AS レベルの試験というのが，A2 から独立したものと位置付けられることになりました。これまでは最終的な合否が決まる A2 レベルの成績を予測するものとして使われたり，入試にも部分的に使われていた試験だったのですが。

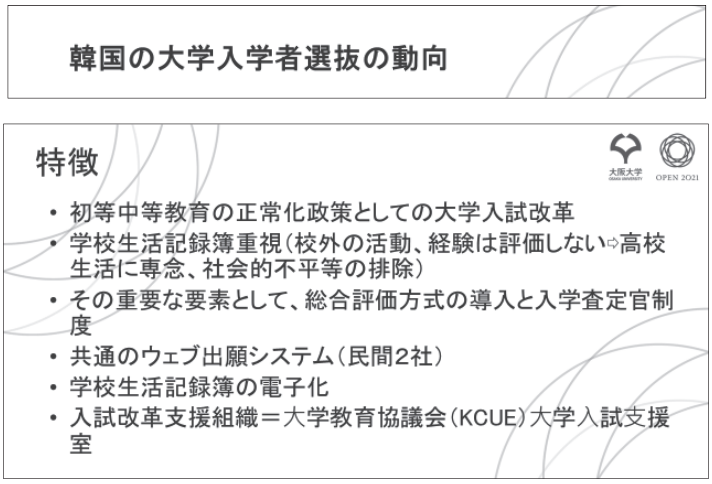
■オクスフォードやケンブリッジが求める学生はもちろん学力とポテンシャルが最も優れている学生です。重要なのは，2 万人もの志願者全員に面接をしていることです。

AS レベルの位置づけが変わり，入試には使われなくなりましたので，2016 年からオックスフォード大学とケンブリッジ大学は志願者に独自の試験を課すようになりました。多肢選択式の試験，記述式の試験，各学科が独自に出題する試験という三つのセクションからなっている試験です。こういう試験をアドミッション・テ

スティング・サービスという組織が，オックスフォード大学，ケンブリッジ大学，ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンあるいは他大学の医学部のために開発しているという現状でございます。



オクスフォードやケンブリッジが求める学生はもちろん学力とポテンシャルが最も優れている学生です。重要なのは，2 万人もの志願者全員に面接をしていることです。なぜかというと，御承知のように両大学の教育は主にチュータリング（個人指導）という方法で行われます。指導学生が多くても，せいぜい 2～3 人の指導が中心ですので，やはり面接をして，きちんとコミュニケーション能力があることを確認しないと，入ってからの教育に困るわけです。それで，結局全志願者に面接を行っているのです。つまり，カリキュラム・ポリシーとアドミッション・ポリシーの整合を取っているということになります。



次は，お隣の韓国の入学者選抜です。初等中等教育を正常化をする政策として入試改革が行われており，学校生活記録簿が非常に重視されています。つまり，家庭の裕福さによって大学入学が影響を受けないように，全て学校内の様々な活動だけで合否を決めようということです。その方法として総合評価方式（ホリスティック・レビュー）と入学査定官制度（アドミッション・オフィサー）による評価が行

われています。

■お隣の韓国の入学者選抜です。初等中等教育を正常化をする政策として入試改革が行われており，学校生活記録簿が非常に重視されています。つまり，家庭の裕福さによって大学入学が影響を受けないように，全て学校内の様々な活動だけで合否を決めようということです。

それから共通のウェブ出願システム，これは民間会社によるものが二つあります。調査書についても既に電子化されております。

また，韓国大学教育協議会というところが大学入試の支援を行っております。

これは，ソウル大学の入試ですけれども，先ほどお話ししたように随時（早期）入試と定時入試がございます。定員外のところは，様々なディスアドバンテージのある出願者のための入試です。随時（早期）入試の欄にある「地域均等選抜」，これはいわゆる日本で言う学校推薦型選抜で，合否の判定は学校生活記録簿と面接，それから修能試験で一定の点数が求められます。「普通選抜（特別）」というのは，日本で言う AO 入試です。ここでは書類と面接だけで，修能試験のスコアは不要です。

定時入試の「普通選抜（一般）」というのは，修能試験だけです。日本と同じように，推薦，AO，一般という形の順で入試が行われています。

2017年度 募集人員

▶ 定員内募集

	随時（早期）入試		定時入試	合計
	地域均等（学校推薦）選抜	普通選抜（特別）	普通選抜（一般）	
2017 年度	735名(23.4%)	1,672名(53.3%)	729名(23.3%)	3,136名
2016 年度	681名(21.7%)	1,688名(53.8%)	766名(24.4%)	3,135名
2015 年度	692名(22.1%)	1,675名(53.4%)	771名(24.6%)	3,138名

＊ 歯学部の学士・修士統合課程の別枠45人含む

▶ 定員外募集

特別入試	一般入試	合計
機会均等選抜特別枠 Ⅰ	機会均等選抜特別枠 Ⅱ	
164名	18名 以内	182名 以内

ソウル国立大学パク入試部副部長の資料より

ソウル大学の募集人員です。同大学では修能試験だけの「普通選抜（一般）」は4分の1になっておりまして，ほぼ4分の3は総合評価で入試が行われています。

アドミッション・オフィサーを導入していて，第1段階の選抜は26名いる専任のアドミッション・オフィサーが書類評価をします。その結果で2倍まで足切りをして，その後学部教員を兼任しているアドミッション・オフィサー100余名が第1段階の書類審査の結果と，独自の面接口頭試験で最終的に合否を決めています。ここでは，一切修能試験は使わないということであります。

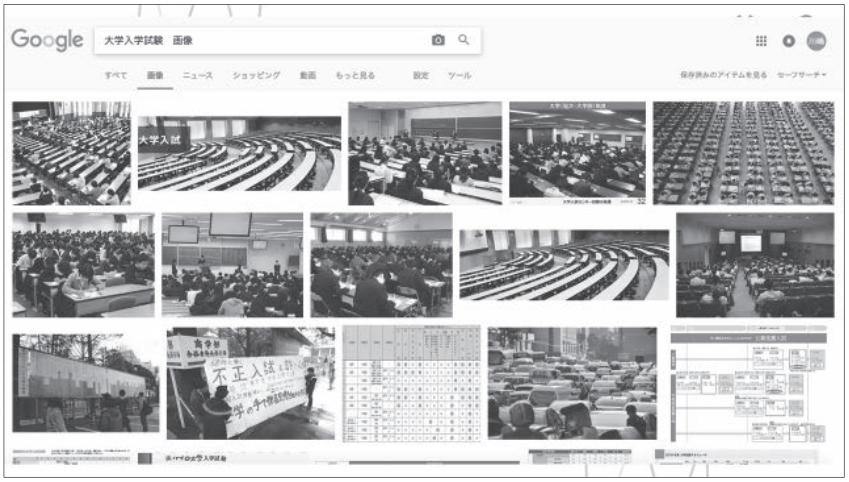
この総合評価は，領域が三つに大きく分けられて，アカデミックな面では学校生活記録簿や推薦書などの資料を評価し，自主的な活動については学校生活記録簿や自己紹介書を評価し，個人的属性や学校の特徴についてはまた別の書類を使うというような形で行っているということでございます。

日本はどうすれば良いのか？

時間も迫ってきましたので，最後に，日本はどうすればいいのかということについてお話しします。

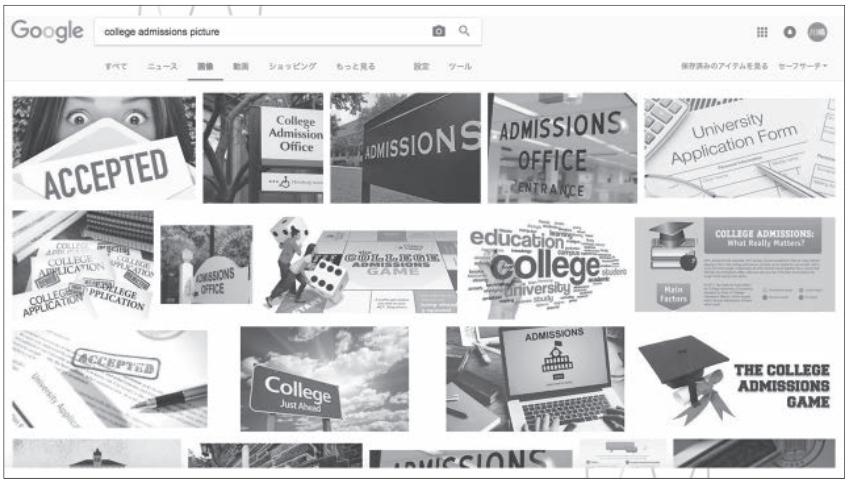
Google 先生に「大学入学試験　写真」と入力すると，一部に中国や韓国の写真もありますが，大教室で受験生が集まって試験を受けているという日本の写真がたくさん出てきます。（➡）

「大学入学試験　写真」で検索すると・・・・・・・・・・・・

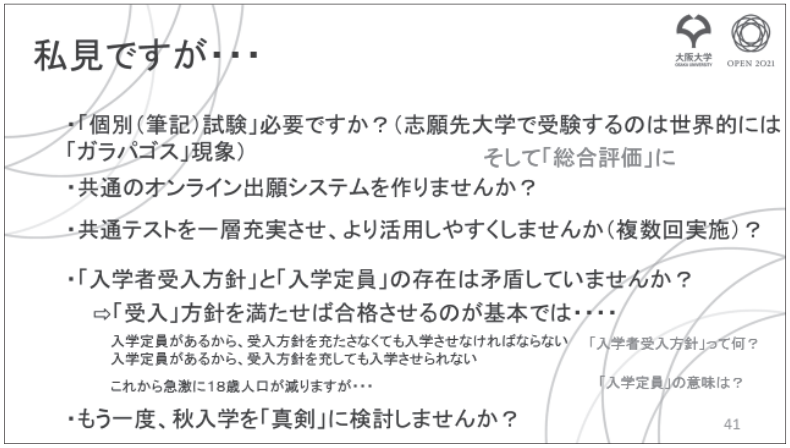


「college admissions　picture」で検索すると・・・・・・・・・・・・

ところが，英語の「college admission picture」で検索するとこうなります。



受験風景は一切出てきません。アドミッション・オフィスに関するような写真がたくさん出てきます。入試のコンセプト・レベルで非常に大きな違いがあるということです。



ここで，入試改革についての，私のあくまでも私見ですが述べたいと思います。

まず，一つ目に，志願者を大学に集めて個別にする筆記試験は，まだ必要ですかということです。志願先大学で受験するというのは世界的に非常に例外的で言わばガラパゴス現象の入試制度です。それを総合評価に変えるべきだと思います。

二つ目は，共通のオンライン出願システムが必要だということです。アメリカにも韓国にもイギリスにも，共通のプラットフォームはあるわけです。日本では，独自にウェブ出願システムを作っている大学もありますが，1大学で何百万円もかかるとすると全体で数十億円もかかっているわけです。受験生にも負担がかかっているのかもしれません。国が一括して作ればもっといいものが安くできるんじゃないかと思います。

■入学定員を厳格に守らなきゃいけないので，受入れ方針を満たさなくても入学させなければならない。受入れ方針を満たしても入学させられないというような，非常に矛盾した現象が起きているわけです。

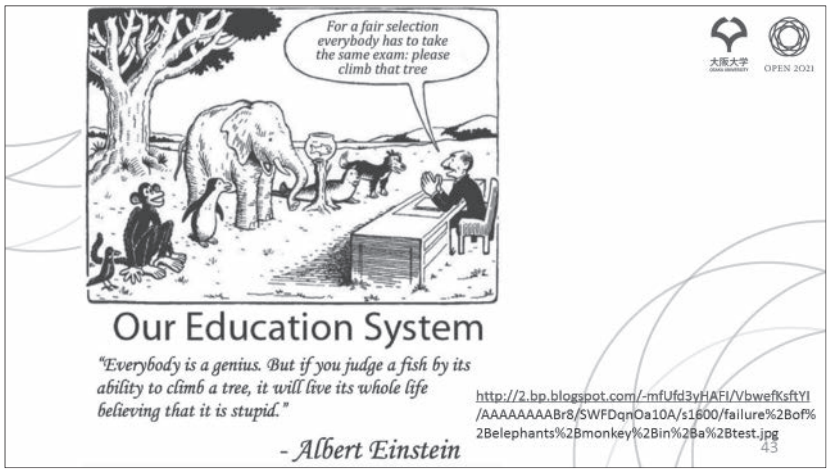
三つ目は，共通テストを一層充実させ，より活用しませんかということです。共通テストを充実させれば個別の試験をする必要はないじゃないですか。書類審査だけでいいんじゃないでしょうか。入試を受けるために全国に受験生が出掛けてかかる交通費もトータルで膨大な金額でしょう。そんなことは無駄じゃないですか。

四つ目は，入学者受入れ方針と入学定員の存在は矛盾していませんかということです。受け入れ方針に定められた条件を満たせば合格させるのが基本です。アドミッション・ポリシーなんですから。しかしながら，入学定員を厳格に守らなきゃいけないので，受入れ方針を満たさなくても入学させなければならない。受入れ方針

を満たしても入学させられないというような，非常に矛盾した現象が起きているわけです。これから急に 18 歳人口が減りますけれどもどうなんでしょう。入学定員の再考ということは，大学関係者が常に文部科学省にお願いしていることでもあります。

五つ目は，数年前に起きた秋入学についての議論を皆さんもう一度真剣に考えませんかということです。現行の学年暦を前提に高大接続改革を議論しても限度があるのではないでしょうか。こういうことについては大学入試センターにも大いにイニシアチブを執っていただきたいと思っています

私がいつも言っているのは「入学試験の国」から「卒業試験の国」へということです。志望先大学に出掛けていって入学試験を受けて，合格したら盛大な入学式というセレモニーをする，最近はおじいちゃん，おばあちゃんまで来て，大学は会場確保に苦心する。そんなふうに入学すること自体に価値を置く入学者選抜から，やっぱり，4 年間，5 年間かけて卒業できたそのことを，本人，家族も含めて社会全体で祝福できるような，そういう入学者選抜に変えていくべきではないでしょうか。



これも，よく見るイラストだと思います。下にアインシュタインのコメントが付

いております。誰でも天才なんだ。それなのに，例えば魚を木に上る能力があるかどうかで判断したりすれば，魚は一生涯自分のことを愚かな存在だと思ってしまう。こういうのが今の我々の教育システムなんだと言っております。ですから，やはり一つの尺度ではなく，複数の尺度で志願者を評価するというふうに変えなきゃいけないし，テストであれ出願であれ共通化できるところは共通化するべきだと思います。アカデミック・カレンダーについても，国際化の論点から云々ではなく，高校教育にも大学教育にもしわ寄せが来ているわけですから，再検討しませんかということを私は申し上げたいわけです。

最後に，手前味噌ですが，大阪大学では，8 月の終わりに，これからの多面的・総合的評価を担う人材育成ということで，アドミッション・オフィサー育成プログラムの第 1 回目を開催いたしました。

上の写真が先ほど紹介したオレゴン大学の入試部長のジム・ローリンズ（Jim Rawlins）さんです。全部の課程を終えた人には修了証書を差し上げました。大阪大学のスクール・マスコットである「ワニ博士*」もお祝いに駆け付けました。第 2 回目を，今年 11 月 30 日～12 月 1 日に予定しております。

以上，御清聴ありがとうございました。

＊1964 年，大阪大学豊中キャンパス理学部の新校舎工事現場で発見されたワニの化石（マチカネワニ）ちなんだマスコット。

【山地/大学入試センター試験・研究副統括官/司会】川嶋先生，ありがとうございました。ただいまのお話についてフロアの方から御質問をお願いしたいと思いますが，いかがでしょうか。

【フロア１】大変すばらしいお話をありがとうございました。総合評価は国際的な潮流でもあるし，それぞれの国の歴史と文化の中でどう取り入れていくのかが課題だと受け止めましたが，日本の場合，私立大学の学生が非常に大きなボリ

ューム・ゾーンを占めています。私立大学における総合評価の採用の今後の可能性等について，御示唆いただければありがたいと思います。

【川嶋】国立私立を問わず，AO・推薦入試は総合評価が導入しやすいと思いますが，志願者が多い一般入試をどう総合的な評価に変えていくのかが今後の課題だと思います。

また，総合的評価と言っても，本当に一人一人を総合的に評価するのか，全体の志願者についていろいろな観点から評価して最終的に学生集団が多様化できるようにするのかで，実現可能性はかなり違ってくると思います。

ソウル大学やオックスフォード大学，ケンブリッジ大学がやっているように一人一人を総合的・多面的に評価するというのであれば，お金も人手も時間も非常にかかります。たぶん，学年歴を変えるというようなことまで考えなければなかなか難しいと思っております。

ですから，現実として，できるところからやっていくしかないですねというのが私の個人的な考えです。私立大学さんがどう考えるかは後ほど沖先生の方に御質問していただければと思います。

●報告 1

新共通テストの概要と課題

大杉 住子（大学入学センター審議役）

大学入試センター審議役。文科省において幼保連携改革，教育課程行政，大学改革，キャリア教育，国際教育協力など教育制度を中心に担当。ユネスコ教育局アソシエイトエキスパート，愛媛県教育委員会保健スポーツ課長，在イタリア日本国大使館文化科学アタッシェなども経て，平成 26 年から文科省初等中等教育局教育課程企画室長として学習指導要領改訂を担当，平成 29 年 4 月から現職で新テスト作問に関する業務を担当。

大学入試センターの大杉と申します。今日は「新共通テストの概要と課題」という題でお話しします。先ほど川嶋先生からはセンターへの期待も込めて，共通テストを一層充実させてより活用しやすくというようなお話も頂いたところです。こうした御期待に応えるためにも，これから始まる「大学入学共通テスト」は未来への可能性を開くような創造的なものであるとともに，現実的に，たくさんの方に影響を及ぼすテストですので，毎年毎年の作問が持続可能なものでなければいけないと思っております。

今日は創造性と持続可能性ということ考えながら，新テストに向けた作問がどのように進められているか，取組の一端をお話ししたいと思います。（➡）

学校間接続の課題

皆さんの中には，新しいテストがどうなるのかだけに御興味をお持ちの方，あるいは，高大接続改革ということが何だか最近急に出てきたねというような御感想をお持ちの方もいらっしゃると思います。しかし，高大接続改革は新テストばかりではなくて，個別試験の改善や大学・高校の教育も含んだものですし，また，今急に言い出されたわけでもありません。

そもそも学校間接続の課題は，高校と大学の間にだけあるわけではありません。幼・小，小・中，中・高それぞれの間に課題があります。本日お集まりの皆さんはあまり幼児教育には関わりがないかもしれませんが，幼・小接続なども非常に大きな課題です。いわゆる「小 1 プロブレム」をどうしていくのか。小学校の先生からすると，幼稚園の遊びを通じた学びの成果が何につながるのか見えにくいというようなことと，幼児教育側からすると，あまり教科の縦割りを幼児教育の総合的な学びに押し付けないでほしいというような，ある種考え方が対立するような時期がなかった訳でもありませんが，そこを幼児教育関係者と小学校関係者のお互いの理解と工夫で乗り越えてきたわけです。幼児教育側は「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」というものを小学校に提示し，小学校の方は，それであればそれを各教科でしっかり受け止めこんなふうに伸ばしていこうというような，そういった相互の理解と工夫が積み重ねられて改善が図られてきているところです。

高大接続の課題というものもそういった様々な接続の課題の中の一つであろうと思います。ただ，この接続はやはり学習指導要領に基づく教科等教育の高校から学問の世界に入っていく大学への接続であり，互いの教育の特色についてより相互の理解と工夫が求められるであろうと思います。

高大接続に関する議論の経緯（一部）

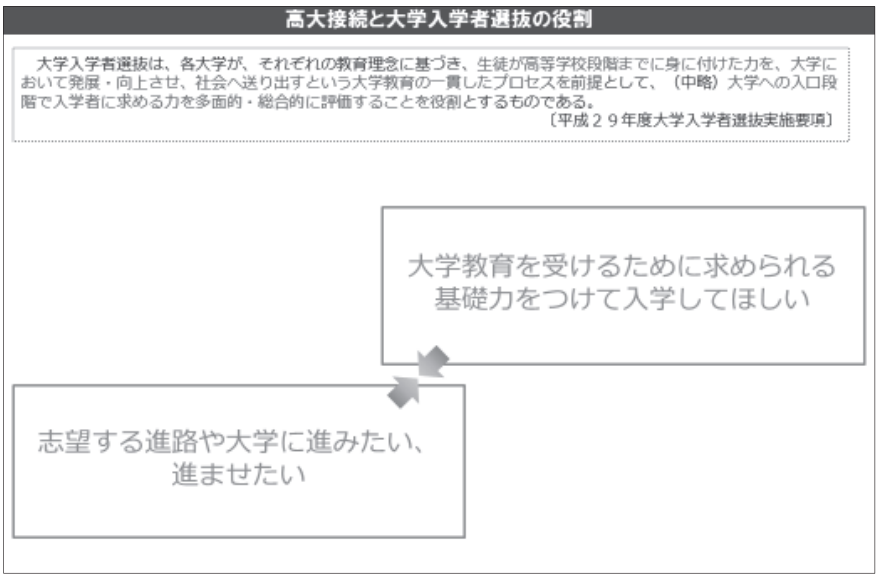
- １９７１年　中教審答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」（いわゆる四六答申）
- １９８５年　臨教審第一次答申
- １９９９年　中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」
- ２０００年　大学審議会答申「大学入試の改善について」
- ２００８年　中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」

高大接続の議論は，最近になって起きているわけではありません。この年表は，高大接続に関する歴史的な議論の本当に一部ですけれども，遡れば過去の様々な答申におきましても，過度な入試依存を打破していこう，共通テストを作ろう，総合的な判定を行おうというような，昨今の議論においてもよく聞かれるようなフレーズが既に出てきているわけです。こうした流れの中で，共通１次試験がセンター試験へと変わり，またセンター試験においても様々な作問の改善が積み重ねられてきています。

■今回の高大接続改革というのは，こうした長年の議論の積み重ねの上にあり，今まで重ねられてきた改善を更に一歩進めるという改革でもあるということです。

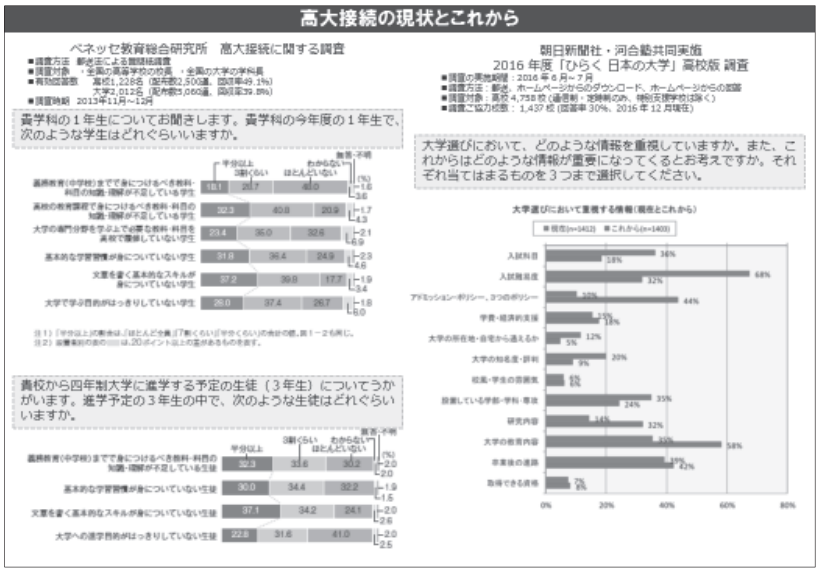
直近では 2008 年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」の中でも，多面的・総合的な評価ということで高校と大学の学習の成果をどうつないでいくかというようなことは，個別にワーキングも設置されて議論が重ねられてきたところであります。

今回の高大接続改革というのは，こうした長年の議論の積み重ねの上にあり，今まで重ねられてきた改善を更に一歩進めるという改革でもあるということです。そして，その一番の特徴は，やはり様々な具体的な改革をしっかりと一体的にスケジュールも合わせてやっていこうということです。後ほど御覧いただく学習指導要領の改訂ということと，今回の入試改革，それから大学教育改革が一体的に進められており，これまでよりも強く意識されているということです。



そもそも大学入試は何のために行われるのでしょう。高校生には志望する進路や

大学に進みたいという思いがあり，大学には大学教育を受けるための基礎力をしっかり身に付けた上で入学してほしいという思いがあります。こういった願いや期待の狭間で行われるのが入試ですが，この中で高校教育，大学教育がお互いに関する理解を深めながら，その接続の在り方を改善していくことが求められるわけですけれども，接続の現状がどうなっているのかということで，今日は少しデータを持ってまいりました。



左側は高大接続に関する調査ですが，大学側，高校側両方に聞いています。大学に対して，大学１年生で，例えばこういう力が身に付いていない学生はどのぐらいいますかというような質問をしていますが，文章を書く基本的なスキルが身に付いていない。あるいは高校の教科・科目の知識・理解が不足しているというような課題が指摘されています。

■文学作品の主人公の心情を読み解くようなこともちろん大事ですけれども，――

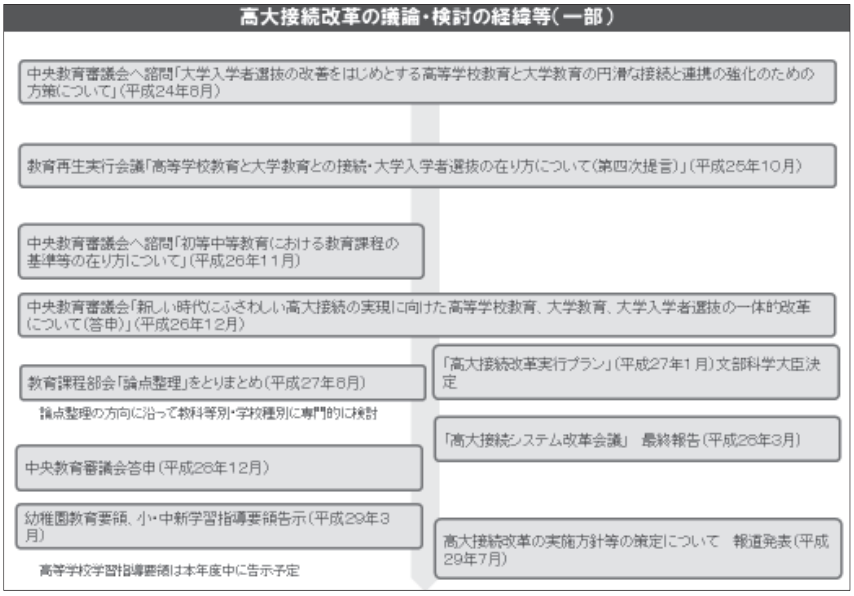
高校に対しても 3 年生の中で文章を書く基礎的な能力が身に付いていない生徒はどのぐらいいますかと聞いていますが，半分以上いると答えた高校が 37.1%ということで，その認識はあるようですが，その認識と大学教育の基礎力作りを，どうつないでいくかということです。特に文章を書くスキルに関連した話題ですが，昨日のニュースでも，国立情報学研究所の荒井紀子先生の研究では，中学生の 25%が教科書の文章を読めていないということが判明したと報じられていました。文学作品の主人公の心情を読み解くようなこともちろん大事ですけれども，大学教育につながる様々な分野の文章の構造をしっかりと理解して，自分の考えを展開していくというようなことが，果たして初等中等教育の国語教育でしっかりと育まれて

いるのかどうかも課題であろうと思います。

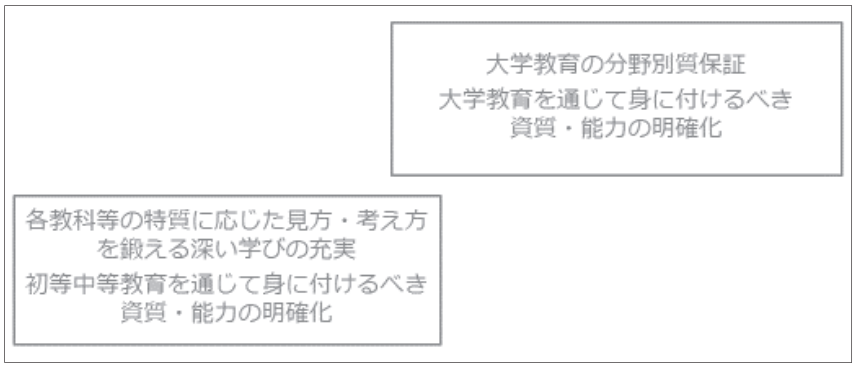
右側には朝日新聞社と河合塾の合同調査の結果をお借りしていますけれども，大学選びにおいてどんな情報を重視していますかという問いに，現在は難易度を重視している。しかし将来に向けては，例えば大学の教育内容やアドミッション・ポリシー等をしっかり見ていきたいというような回答もかなり多くなっています。

多様な高等学校の教育課程と
多様な大学のカリキュラムを
どのようにつなぎ、
発達の段階に応じた質の高い学びを
どのように保証していくのか？

こういった中で，先ほどの川嶋先生のお話にもありましたように，それぞれ特色のある高校教育と大学教育をどうつないで，それぞれの発達段階でその高い学びを保証していくのか。高大接続改革は，それを具体化していく道筋だということであります。

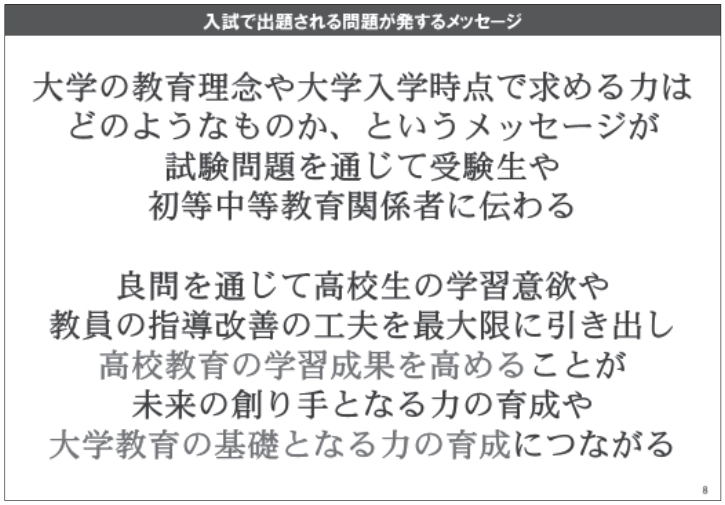


そして，その具体化は一体的に進められてきています。高大接続答申（平成 26 年 12 月）や学習指導要領改訂の諮問（平成 26 年 11 月）を軸に，下の半分は右左に分かれておりますけれども，左の学習指導要領の改訂と右の大学教育改革あるいは入試改革が，こういった形でお互いに呼応しながら進んでいるということであります。



■つまり，入試というものは，高校側あるいは受験生に対して，大学側はこういう力を求めているんだよという大きなメッセージを伝えるものだということです。

こうした中で初等中等教育においてはアクティブ・ラーニング，つまり主体的で対話的で深い学びを実現して資質・能力を育んでいこうということと，大学の方でもしっかりと三つのポリシーで力を育んでいこう。そして入試では，高校教育の成果として大学教育の基礎力がどのぐらい身についているかを見ていこうということが，つながりを持ちながら進められているということです。



つまり，入試というものは，高校側あるいは受験生に対して，大学側はこういう力を求めているんだよという大きなメッセージを伝えるものだということです。そういうメッセージを持った入試をよりよくしていくことで，子供たちの学習意欲や先生方の指導改善の工夫を引き出していく，そして高校教育の学習成果が高まっていくということは，それはすなわち大学教育の基礎作り，そして大学教育の活性化にもつながることになるでしょう。

こうしたことを新テストの文脈で申し上げれば，良問の作成を通じて大学教育の基礎力となる力をしっかりと問うていこうということです。そして，その中で導入されるのが記述式問題であったり，知識の理解や思考力を問う問題であったりするわけですけれども，これも今ゼロからスタートしているわけではありません。

センター試験の試験問題評価

○　大学入試センターでは、センター試験の問題評価を行うために、試験問題評価委員会を設置。出題された試験問題の内容、程度、出題方法等について意見・評価。

○　現行センター試験の問題は、高校における日常の教育活動を踏まえつつ、大学教育の基礎力を適切に問う問題として評価されている。

○　さらなる良問作成に向け工夫・改善が必要な点として、例えば、高大接続システム改革会議最終報告において「単なる知識の量や細かな知識の有無のみにより評価を行うことがないよう、作問の改善を図ることが重要である」と指摘された歴史系科目や生物などについて、より歴史的思考力を問う設問や、科学的な探究活動を取り入れた設問の重要性などのご意見をいただいているところ。

9

大学入試センターでは，センター試験の問題評価を行うために，試験問題評価委員会などを設置して，毎年毎年，作問の改善を積み重ねてきましたし，その問題はおおむね大学教育の基礎力を問うものとして高い評価を頂いております。しかしながら一方で，更なる改善が必要な点として，例えばもう少し国語の言語活動，あるいは理科の探究活動，歴史的な見方・考え方，数学的な見方・考え方，こういったものをもう少し取り入れて問う工夫をしてほしいという声を，長年にわたって頂いてもいます。今般新テストへ移行する機会にこうした点を抜本的に改善しようというのが大学入学共通テストの作問のねらいということになってまいります。

学習指導のねらいと作問のねらい

何を

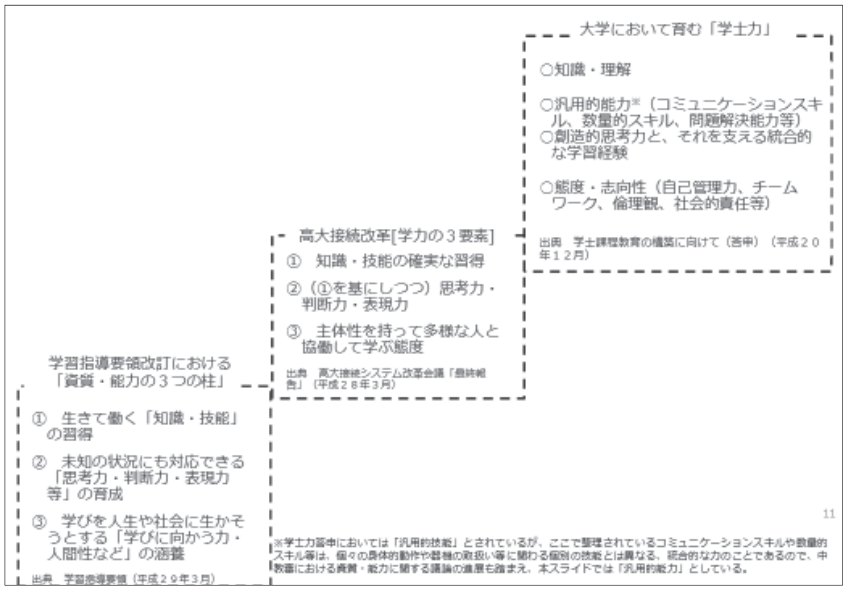
どのように学び、

何ができるようになるか

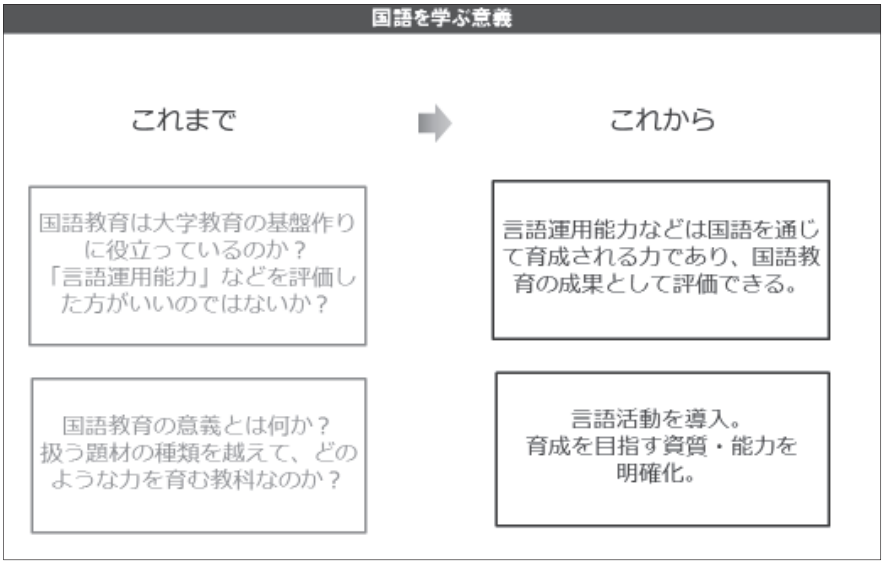
その成果をどう評価するか

そうしますと，何をどのように学び，何ができるようになるかという高校側の指

導のねらいや，大学側が共通力として何を問いたいのかを踏まえつつ，その成果をどう評価するかという作問のねらいをより明確にしていく。高校教育の指導のねらいと大学教育の基礎力として共通に求められる力，作問のねらいをなるべく一致させていこうという工夫がなされております。



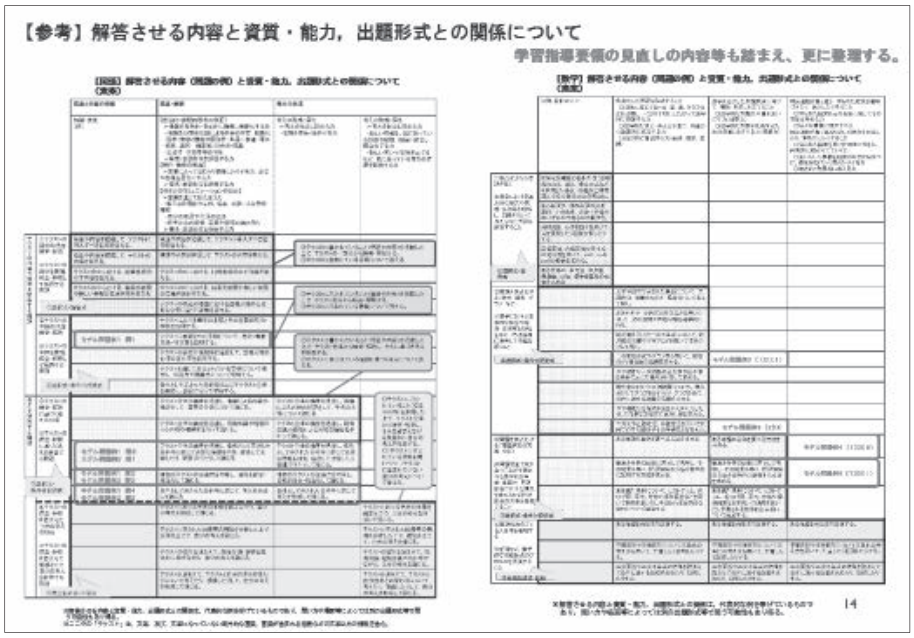
初等中等教育では資質能力の三つの柱を明確化して育むことが重視されていますけれども，大学教育で育む「学士力」も，その要素を見てみると知識・技能，思考力，そしてここにあるような様々な態度と志向性という三つの要素におおむね収斂されています。こうした高校・大学それぞれで育もうとする力の要素を重視しながら，新テストでは特に知識の理解と思考力という部分をしっかり見ていこうとしております。



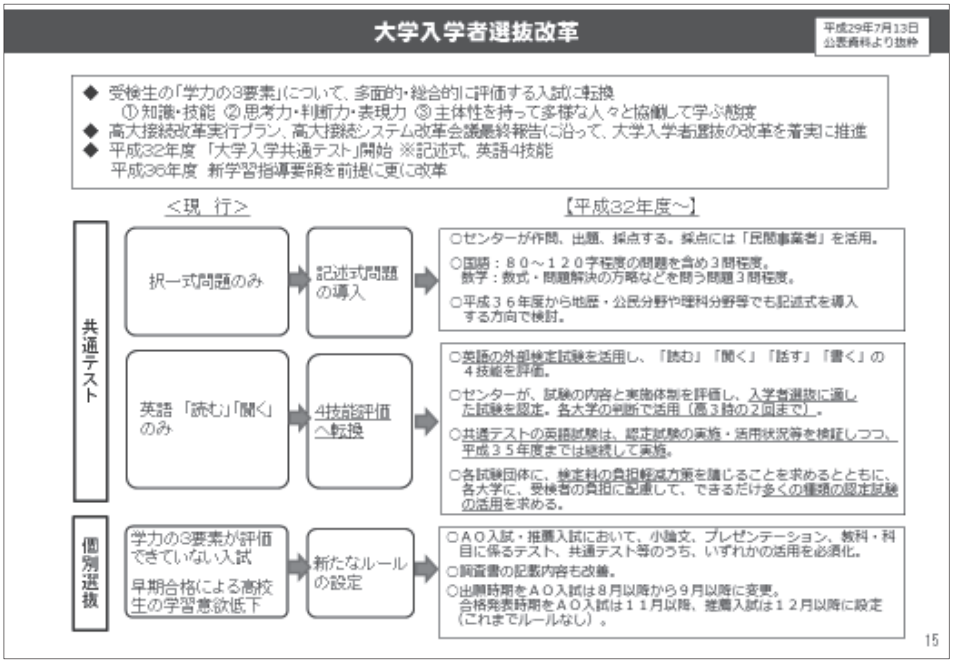
そうしてみますと，高校での様々なカリキュラムの意義が，大学の先生方にとっても明確になるのではないでしょうか。例えば国語教育の中ではどんな力が育まれてきたのかということです。大学側からは，例えば自然科学系や社会科学系の先生方からは，文学作品の読解なども大事だけれど，大学教育の基礎力としては情報をとらえてまとめる力や，自分の考えを論理的に伝える力を求めたい，そのためには国語という教科を課さずに言語運用能力というようなものを問う科目でもいいのではないかというような声も，実はあったわけです。

そうした中で，国語教育の意義が問われるわけですが，右側に「これから」とありますけれども，高校教育で各教科を学ぶ意義と卒業後の学習や生活の在り方をつなげて考えていったときに，国語教育って一体どういう力を育んでいるんだろうということがかなり最近明確になってきているわけです。前回改訂の言語活動ということも非常に大きなポイントでありましたけれども，言語運用能力というのは実は国語の中で育まれている力であると。文章を構造的に捉えて自分の考えを論理的に展開してくという力が，国語の中で育まれている。これはある意味当たり前のことではありますけれども，それをより可視化して共有化していこうということ。それを指導のねらいと作問のねらいということで共有しながら持っていこうというようなことであります。

そのようなことで，学習指導要領については今文部科学省の方でチームを作って作成中ですけれども，私ども大学入試センターの方でもこのスライドのような体制で，大学と高校の教員が一体となりながら，これからの出題の在り方を議論しているところです。国語，数学の記述試験の導入はもちろんですけれども，他科目においてもどんな改善ができるのか検討しているわけです。



そしてその中では，このスライドは見づらいので是非ホームページの方を御覧いただきたいのですが，作問のねらいとしてどのような力を問うべきかということを学習指導要領の見直しの内容等も踏まえて，あるいは言語能力とは何か，数学的思考力とは何かということを整理しながら，このような表を作成して，この中からバランスよく作問のねらいを作っていこうとしているわけであります。この表は更にブラッシュアップしていく必要がありますけれども，今回のモデル問題もこれとセットでお示しいたしましたし，11 月の試行調査につきましても作問の中身を発表させていただく際は，恐らく各科目についてこういう考え方が背景にあるということをセットで発表させていただくことになると思います。



今回の改革は，このスライドのような全体の視野，あるいは歴史的なつながりの中で進められている改革です。これは文科省の方で作っている実施方針の概要ですけれども，共通テスト，記述式の導入，あるいはマークシートの改善ということ，そして英語の４技能評価ということへの移行も，こうした文脈の中で実施していくものだということであります。

■検討課題はいくつかあります。記述式問題の導入，作問を持続的に行っていくのに必要な体制，短期間で採点を終えるために必要な体制，予算は，あるいは段階別表示は何段階が適当か，

また個別選抜につきましても，どのような力を測るのかというようなことを念頭に，新たなルールを設定しトータルで進めていく改革が今回の改革であるということであります。

新テスト実施に向けた検討課題（例）

問題作成等	記述式問題の導入	作問を持続的に行うために必要な体制とは？ 期限内に採点を終えるために必要な人員や体制、予算は？ 段階別表示は何段階が適当か？ 段階別評価を選抜に活用するために有効な方法は？ 自己採点に当たってどのような点に留意すべきか？
	マーク式問題の改善	作問を持続的に行うために必要な体制とは？ 大学が求める力や高校生の学力の現状を踏まえた適切な問題の構成や内容とは？ 作問のねらいと選抜試験への要請の双方を満たすためにはどのような点に留意すべきか？ 素点以外の方法による成績提供が考えられるか？
英語の４技能評価		活用される民間試験の範囲は？ どのようなシステムで民間試験の成績提供を行うか？ CEFRに基づく段階別評価を選抜に活用するために有効な方法は？ センターが実施する英語試験との関係は？
個別選抜の支援		記述式問題や採点基準の作成をはじめ、各大学の個別選抜における作問の改善や、各大学の入試体制の基盤強化をどのように支援していくか？

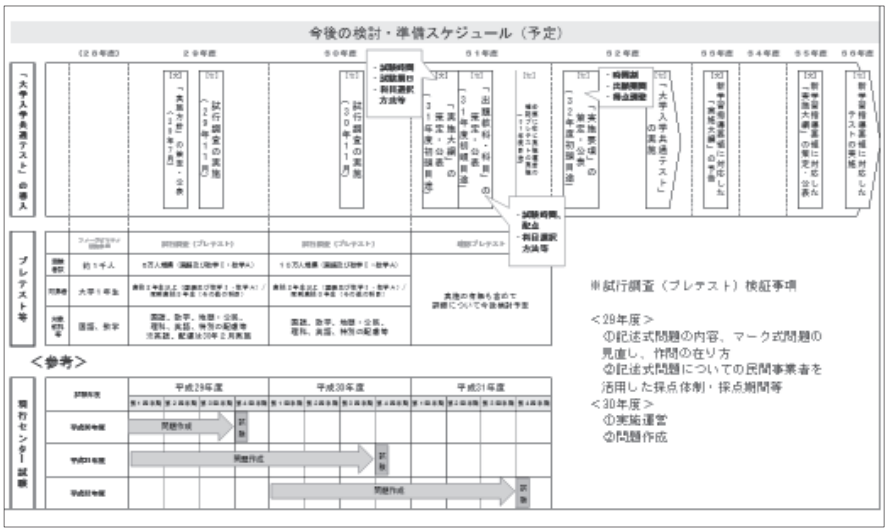
新テスト実施に向けての検討課題はいくつかあります。記述式問題の導入，作問を持続的に行っていくのに必要な体制，短期間で採点を終えるために必要な体制，予算は，あるいは段階別表示は何段階が適当か，３段階なのか５段階なのか，段階表示は選抜にどう活用していくのか，自己採点に当たっての留意点。

また，マーク式につきましても，持続的な作問を行うための体制，あるいは適切な問題の構成，作問のねらいだけを重視しましても，全員が解けたり，全員が解けなかったりでは，選抜試験としての要請は満たされませんので，その両方を満たしていくための在り方。素点以外の成績提供が考えられないかというような論点。

英語の４技能評価につきましても，民間試験のどれが活用されるのか。どのようなシステムで成績提供を行っていくのか。あるいは CEFR に基づく段階別評価をど

う活用するのか。センターが実施する英語試験との関係性。個別選抜への支援をどう行っていくのか等々。

こうしたことについて，これから実施する試行調査（プレテスト）の結果を活用しながら，具体的なイメージを提供していきたいと思います。それを基に様々な大学, 高校の判断の材料にしていただくという, そういう段階にあるということです。



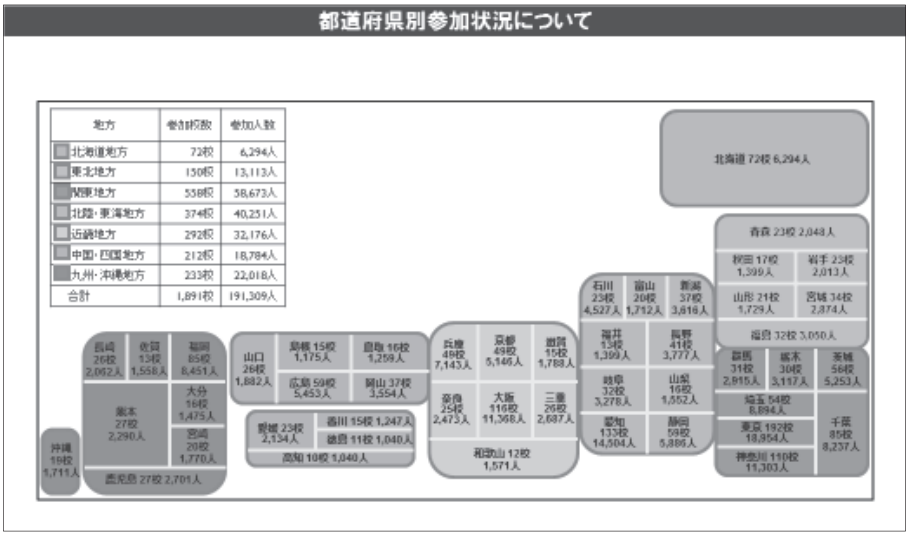
これは大学入学共通テストについての今後のスケジュールですが，まず，今年の 11 月，来年の 2 月に試行調査を行います。この試行調査は，必ずしも本番と全く同じ問題構成になるわけではありません。今回はかなり意欲的に，探究的な活動や言語活動等を重視した作問をさせていただきます。そして，その解答状況などを見ながら，総合的に本番の試験の設問の数，内容，構成などを更に検討し，来年の 11 月に，もう一度試行調査を実施するという段取りを考えているところです。

平成29年11月に実施する
大学入学共通テストの導入に向けた試行調査（プレテスト）概要（平成29年7月末日現在）

①趣旨	平成29年7月に公表された「大学入学共通テスト実施方針」において、プレテストを通じた更なる検証が求められている。そのため、大学入試センターでは、マークシート式問題を含む知識の深い理解と思考力・判断力・表現力を重視した作問の改善とともに、記述式問題における条件設定や採点基準、採点体制、採点期間等について検証を行うため、試行調査（プレテスト）を実施する。	
②実施期日	平成29年11月13～24日内で参加高校が任意の日時で実施 ※	
③実施科目、試験　時間	a　記述式＋マーク式 →国語、数学Ⅰ・数学A 国語は100分、数学Ⅰ・数学Aは70分を予定。 ただし、今後の検討状況により試験時間の変更があり得る。 その他アンケート、自己採点を実施予定	b　マーク式 →世界史B、日本史B、地理B、現代社会、数学Ⅱ・数学B、物理、化学、生物、地学　以上の科目の試験時間は60分を予定。ただし、今後の検討状況により試験時間の変更があり得る。 その他アンケートを実施予定
④実施規模	参加校　：約1,800校／全高校数4,963校 参加人数：国語　　約68,000人 数学Ⅰ・数学A　約57,000人	参加校　：約1,800校／全高校数4,963校 参加人数：1科目当り約1,000人～約17,000人
⑤受験対象者	高校2年生以上	原則高校3年生
⑥調査結果の公表	実施状況について統計処理をした上で全体の調査結果を公表予定	
⑦実施会場	参加する各高校	
⑧試験監督等	参加する各高校の教職員	

※　平成29年、30年は、高校2年生を対象に平成30年2月頃実施予定

平成 29 年 11 月の試行調査は，国語，数学は記述式とマーク式，それからその他科目につきましても御覧のような科目につきましてマーク式の試験を実施させていただきます。



全国の高校で御協力をいただきまして，漏れなく全ての都道府県で実施をさせていただけることになりました。

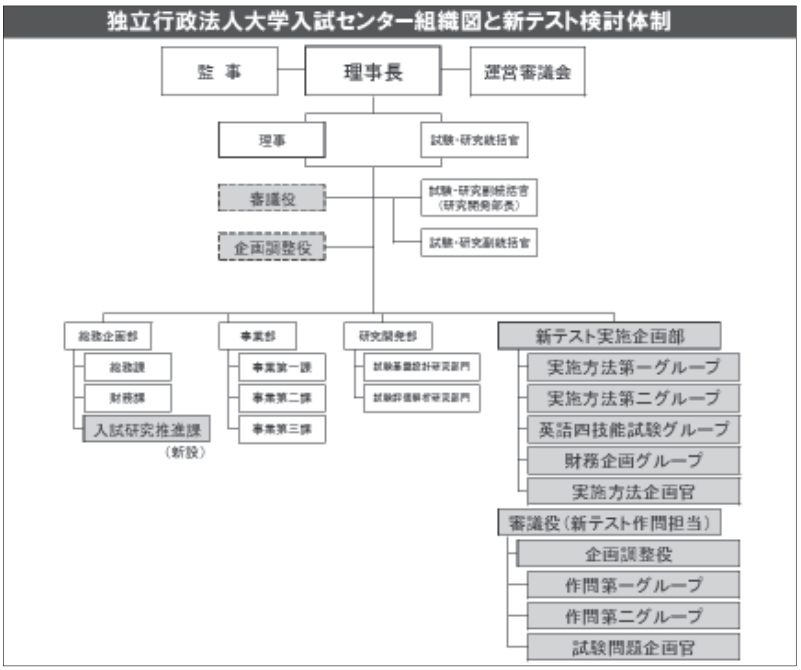
この結果を速やかに整理をいたしまして，年度内には先ほど御提示したような課題に対する一定の考え方ということをセンターとして示させていただくということです。

平成30年度試行調査（プレテスト）実施概要（予定）

区分	A日程（B日程と合わせて10万人規模）	B日程（1科目数千人、総数2万人規模産業《検討中》）
①趣旨	平成29年度試行調査（プレテスト）で行う記述式やマークシート式の問題等の検証に加え、新たに試験の実施運営等も含めた総合的な検証を行う。	
②実施日程	平成30年11月10日（土）13:00～18:00 《時間割については検討中》	平成30年11月10日（土）、11日（日）の2日間 （現行の大学入試センター試験とほぼ同様のタイムスケジュール）
③実施教科、試験時間等	国語（100分）、数学①（70分）、自己採点、アンケート	国語（100分）、数学①（70分）、数学②（60分）、地理歴史（60分）、公民（60分）、理科①（60分）、理科②（60分）、英語（80分）、リスニング（45分）、自己採点、アンケート、実施大学からの聞き取り等
④受検対象者	高校2年生以上	原則高校3年生
⑤実施会場	原則として現行の大学入試センター試験の全大学会場を対象に実施予定。《検討中》	
⑥試験監督等	大学教職員	

（注１）本表は、現時点（平成29年９月１日現在）での考え方を示したものであり、関係機関との調整や今後の検討を踏まえ変更する可能性がある。
（注２）国語、数学①については記述式試験を含む。

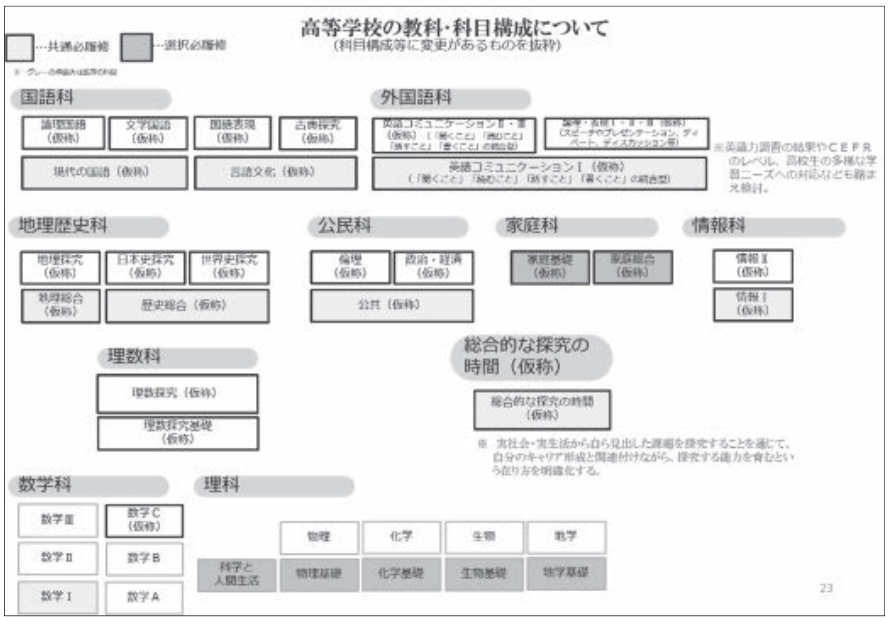
そして平成 30 年 11 月の試行調査につなげていくということです。



こういったかなりタイトなスケジュールをこなすために，センターではこのような体制で，検討を進めております。

英語についても専門のグループがございまして，今民間試験の参加要件等を詰めていますので，秋口にはその要件をお示しできるのではないかなと思っております。

そして，平成 33 年 1 月からの大学入学共通テストの先には，平成 36 年度からの新しい学習指導要領の実施が待ち受けております。例えば地歴の「歴史総合」，あるいは「数学 C」などという科目ができてくる中で，新テストの実施科目の在り方や，例えば情報科をどう扱っていくのかということも同時並行で議論を進めているということです。



以上，大学入試センターにおける大学入学共通テストの検討状況についてかなり駆け足ではございましたけれども御紹介をさせていただきました。御清聴ありがとうございました。

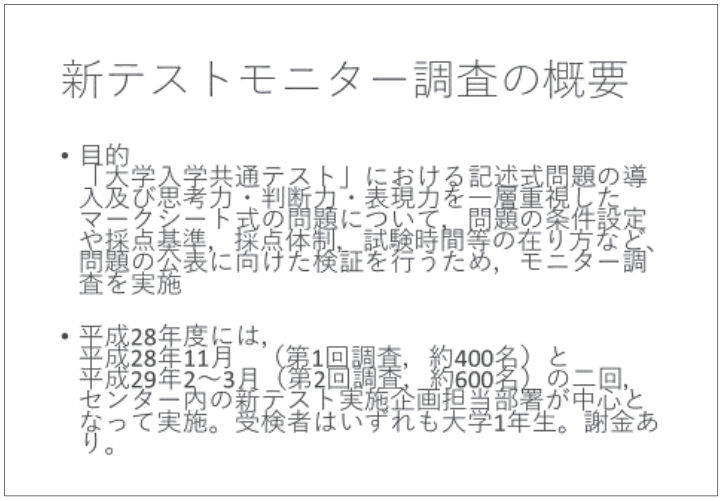
●報告 2

モニター調査の内容と結果

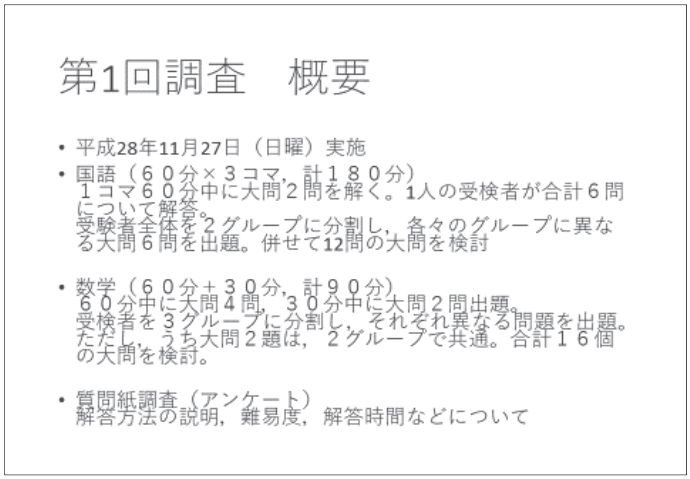
大津 起夫（大学入学センター研究開発部長）

大学入試センター研究開発部長。1983 年北海道大学文学研究科修士課程（心理学専攻）修了。民間企業勤務，北海度大学文学研究科教授を経て 2003 年度より大学入試センター研究開発部教授。2014 年度より現職。専門は心理統計学。

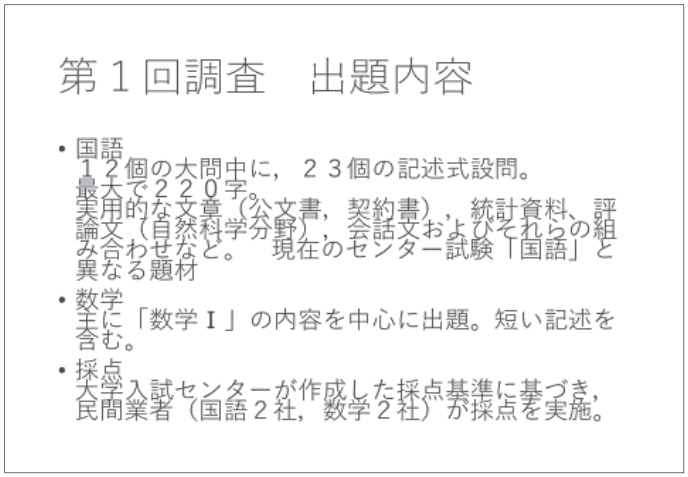
大学入試センターの大津です。今日は，先般大学入試センターが行った大学入学共通テストのモニター調査の結果についての具体的なお話をします。



このモニター調査は，昨年の 11 月と今年の 2 月，3 月に大学 1 年生を対象に行いました。実施科目は，「国語総合」，「数学Ⅰ・数学 A」です。具体的な試験問題や正答率等については既にセンターのホームページで公開しています。先ほどから話題になってるように，「大学入学共通テスト」に記述式問題を導入する，また，択一式の問題について，思考力，判断力，表現力を一層重視した問題とするために，このような調査をしたということです。



これが，平成 28 年 11 月に行った第 1 回調査の概要です。受験者は約 400 名です。国語は 60 分で 2 大問を 3 コマ，1 人の受験者が合計 6 大問について解答しました。全員が同じ問題を解くのではなく，2 グループに違う問題を解いてもらいました。数学も 60 分で 4 大問と 30 分で 3 大問を解いてもらいました。これも，受験者を 3 グループに分けて，合計 16 の大問を試しました。そのあとに，アンケート調査を行い，解答時間の長さや難易度についてどう感じたかを聞きました。



国語は 12 個の大問中に 23 個の記述式問題を出題しました。最大で 220 字です。公文書や契約書等の実用的な文章, 統計資料, 評論, 会話文などを題材にしました。数学は主に「数学Ⅰ」の内容を出題しました。こちらは，短い記述を含む問題を出題しました。採点は民間の会社が担当しました。

第１回調査　わかったこと

- 国語：解答に要した概算時間（質問紙回答）
  ８０～１２０字　８分程度
  ～４０字　　５分程度
- 国語で，類似の設問を数問記述式と多枝選択式の両方で（別の受検者に）出題。
  記述式のほうが２０％～５０％程度正答率が低い（問題によりかなり異なる）。
- 解答時間：国語：１７％ほどが「足りない」「やや足りない」　数学：４０％ほどが「足りない」「やや足りない」→
  記述式は３問程度に限定（実施方針）

第 1 回調査で分かったことは，まず，記述式問題の解答に要する時間です。もちろん字数だけでは決まるものでもないのですが, 国語の 80～120 字の記述問題では 8 分程度。それから 40 字以下ですと 5 分程度かかっていることが分かりました。また，類似の内容について記述式と選択式で問うた場合を比較しますと，問題にもよりますが，記述式では 2～5 割ぐらい正答率が下がりました。解答時間についての感想では，国語では 17%，数学では 40%の受験者が足りないと感じたようでした。

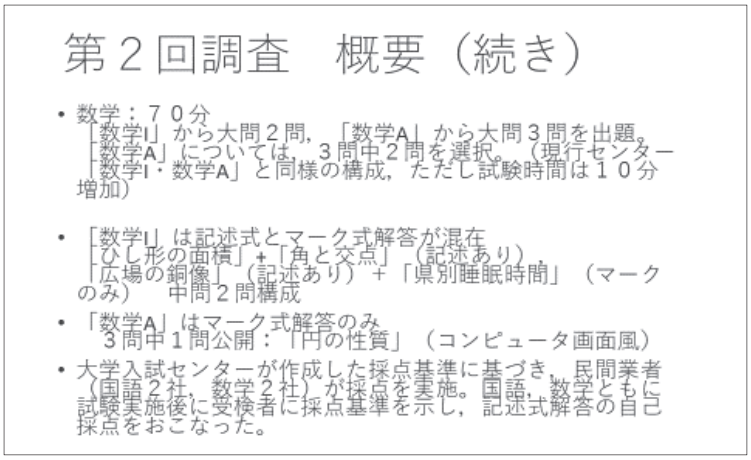
これらを検討すると, 記述式問題はあまり多くは出題できないだろうと考えられましたので,「大学入学共通テスト実施方針策定の考え方」でも出題数については,「例えば，文字数 80～120 字程度の問題も含め 3 問程度とする」となったわけです。

第２回調査　概要

- 平成２９年２月２６日（日），３月４日（土）に実施
- 国語：１００分＋３０分
  １００分で大問５問を出題。うち，大問１問が記述式解答（「景観保護ガイドライン」）。
  ４０字，３５字，２０字，１２０字各１問
  残りの大問４問がマーク式。うち２問は非公開。公開した２問は，「短歌と論評」，および「平家物語　忠度都落」
  ３０分で大問１問を出題（「駐車場契約」）。

■類似の内容について記述式と選択式で問うた場合を比較しますと，問題にもよりますが，記述式では２～５割ぐらい正答率が下がりました。

これから主に第２回調査について御説明します。第２回調査は，２月 26 日と３月４日の２回に分けて実施しました。国語は 100 分で５大問，センター試験よりも多い分量です。また，30 分の記述式だけの試験も行いました。100 分の方は，第１問という大問が記述式です。残りの４大問はマーク式の問題でした。



数学の解答時間はセンター試験より 10 分長い 70 分でした。「数学Ⅰ」も「数学A」もだいたい高校１年生で履修し，「数学Ⅰ」は必修科目です。「数学 A」は選択科目で，内容についても特定の分野を選択して履修できることになっています。「数学Ⅰ」から２大問を必須の問題とし，「数学 A」から３大問出題し，このうち２大問を選択させました。これはセンター試験と同じ方法です。「数学Ⅰ」では，記述式とマーク式が混在しています。この記述式は国立大学の個別試験のように解答過程の式を全部書かせるような問題ではなく，かなり短い式や数値の記述を求めるような問題です。

また，マーク式の解答とは，単にいくつかの選択肢の中から正答肢を選ばせるというタイプのものではなく，センター試験の数学で行われているように，マークの塗りつぶしで数値を記述させるものです。

採点は，大学入試センターが作成した採点基準に基づき民間業者が行いましたが，その採点結果と受験生の自己採点とがどれぐらい一致したかも調査しました。(➡)

第２回　調査結果　概要

- 解答方式別の正答率 (%)（全体）
- 同一内容の比較ではないので，内容の難易度と解答形式の両方の効果が混在

平均正答率（%）

	マーク式	記述式
国語	56	33
数学	50	24

解答方式別の正答率です。問うている中身が違うので，これだけで解答方式による難しさの違いだと言えませんが，国語ではマーク式が 56%，記述式が 33%の正答率でした。数学は，マーク式が 50%，記述式が 24%でした。

第２回調査　国語　問題構成

- 国語①　１００分
  第１問　「景観ガイドライン」（記述式）
  第２問　　センター過去問（追試）評論（非公開）
  第３問　「短歌と論評」
  第４問　「平家物語　忠度都落」
  第５問　　センター過去問漢文（非公開）
- 国語②　３０分
  駐車場契約

このスライドは国語の問題構成です。先ほども言いましたように，100 分の問題と 30 分の問題を出題しました。

100 分の方の第 1 問が「景観のガイドライン」を題材とした記述式問題です。第２問はセンター試験の評論の過去問で非公開です。第 3 問が「短歌とその論評」に関する問題。第 4 問が平家物語『忠度の都落ち』を題材とした問題です。第 5 問は，センター試験の漢文の過去問で，これも非公開です。

なお，第 4 問は，センター試験の古文の問題とは少し傾向が違います。センター試験の場合は，題材文の解釈を問う形式が多いんですが，この第 4 問では，題材文『忠度の都落ち』とともに，それを読んだ二人の人物による対談の文章を併せて提示し，その対談についても問うというスタイルを取っています。

第２回調査　国語 設問別分析

- 「景観保護ガイドライン」記述式問題例１

	字数	正答率%	条件の一部を満たす　%	自己採点一致率%
問１「一石二鳥」	40	44	51	72
問２「提案書の修正」	35	73	23	74
問３「父姉の対立点」	20	3	85	74
問４「かおるさんの意見」	120	15	32	61

これは，第１問の記述式問題の正答率です。あらかじめ定められた条件を全部満たした「正答」と「条件の一部を満たす」答えの割合です。両方足すと結構な数になります。

問１は，題材文中で使用された「一石二鳥」という慣用句の「一石」と「二鳥」が文脈上，具体的に何を指しているかを問うもので，正答率は 44%でした。問 2 は，ある会社の提案書がガイドラインにそぐわない点を問うものです。少し易しかったようで 73%の人が正答，条件の一部を満たす答えは 23%です。両方合わせると皆さんほとんどは書けているということです。

問３は，景観ガイドラインの方針についての父と姉の意見の対立点を書かせるのですが，これは正答率は低く 3%。ただし，条件の一部を満たす答えは 85%です。

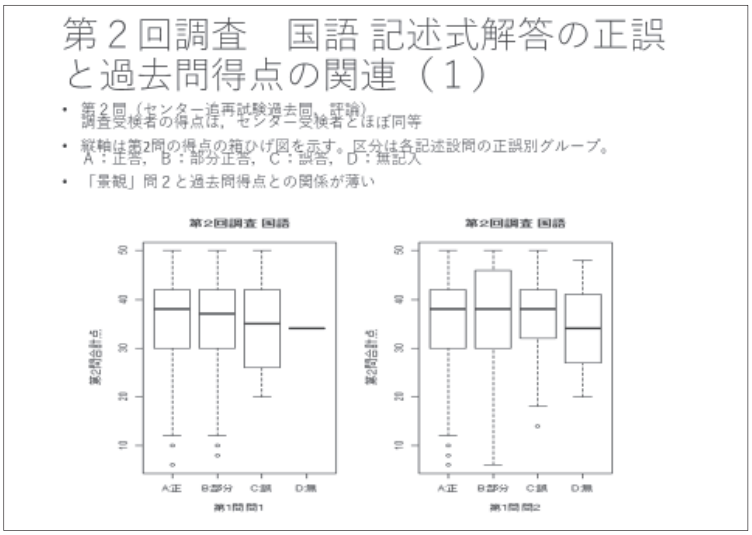
問４は，この大問の設定の主人公的な立場の人の意見を 120 字以内で書かせる問題です。これは正答率が低く 15%，条件の一部を満たすものでも 32%でした。難しかったようです。本人の自己採点と民間業者の採点が一致した率は，61～74%，でした。

第２回調査　国語 設問別分析

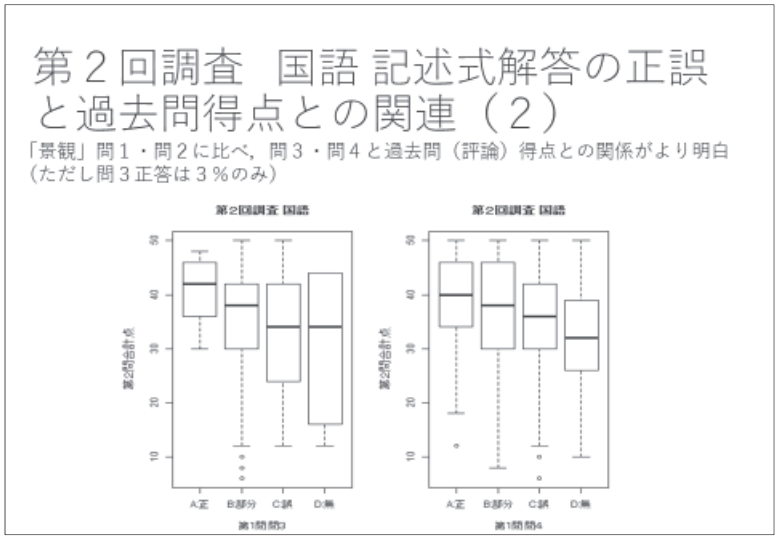
- 「駐車場契約」　記述式 問題例２

	字 数	正答率%	条件の一部を満たす　%	自己採点一致率%
問１「値上げに関する質問」	40	42	47	56
問２「解約時のアドバイス」	120	34	48	61
問３「契約書の不明な点」	50	22	0	85

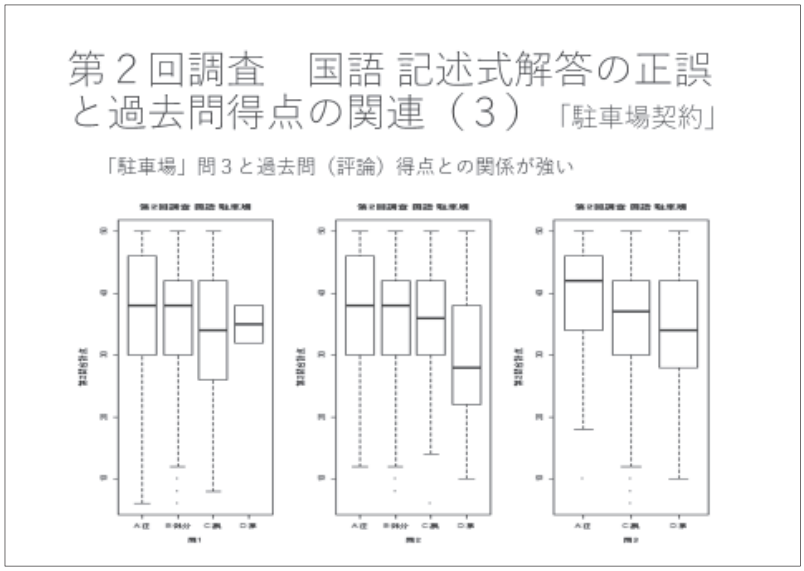
こちらは，30 分の方の記述式問題です。駐車場の契約を題材にしていて，値上げの妥当性や，契約書の内容について問うています。問 1 の正答率が 42%。問 2 は，120 字の問題で，正答率は 34%でちょっと低めでした。問 3 は正答率が 22%でした。自己採点と業者採点の一致率は，問 1 が 56%，問 2 が 61%とちょっと低かったようです。



この箱ひげ図は，記述式の第 1 問（景観ガイドライン）とマーク式の第 2 問（評論・センターの過去問）の回答状況の関連性を表した箱ひげ図です。横軸で，A 正答した人，B 部分正答の人，C 間違った人，D 無解答と 4 種に区分していて，縦軸が第 2 問の点数です。4 区分は左から右に点数が低くなっていくわけですから，両大問の得点に関連性があれば，右の箱ほど縦の位置も下になるはずです。問 1 は，箱も中央値も微妙ですが少しずつ右下がりになっています。問 2 はそんな傾向はみられません。問 2 の点数は第 2 問の点数とはあまり関連性がないということです。



問 3，問 4 では，評論の点数と関連性がちょっと見えてきます。箱も中央値も右下がりです。第 1 問に関しては問 3，問 4 が評論の点数と関係性が深かったということになります。



これは 30 分で実施した駐車場の契約に関する大問です。この大問は，評論の点数と関係性が強いように見えます。

第２回調査　国語 記述設問の正誤の相互関連性

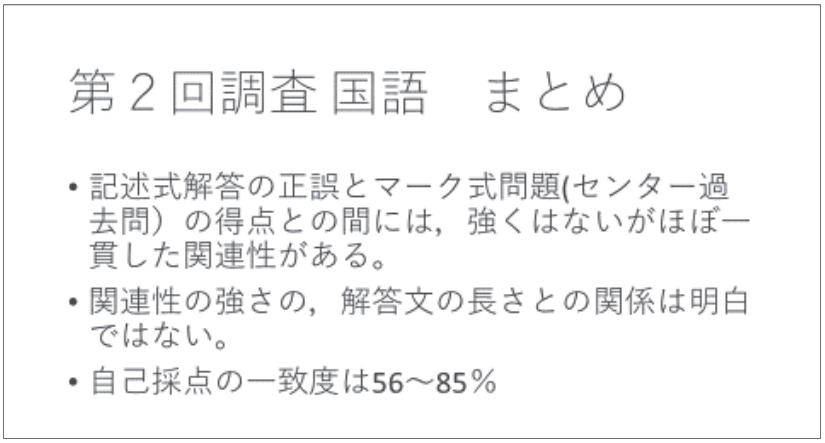
記述設問間　A:正答，B:部分正答，C:誤答無記入の３区分に基づく，
カイ２乗検定のp値。　値が小さいほど，関連のあることが確実。
* 0.05 以下の値
「景観」問４は，「景観」問２，問３と関連がある。
「景観」問４，「駐車場」問２，問３が，互いに関連がある。

	景観 問１	景観 問２	景観 問３	景観 問４	駐車場 問１	駐車場 問２	駐車場 問３
景観 問１		0.14	0.43	0.65	0.12	0.13	0.17
景観 問２	0.14		0.50	0.03*	0.15	0.64	0.12
景観 問３	0.43	0.50		0.02*	0.34	0.28	0.32
景観 問４	0.65	0.03*	0.02*		0.08	0.00*	0.01*
駐車場 問１	0.12	0.15	0.34	0.08		0.44	0.23
駐車場 問２	0.13	0.64	0.28	0.00*	0.44		0.04*
駐車場 問３	0.17	0.12	0.32	0.01*	0.23	0.04*	

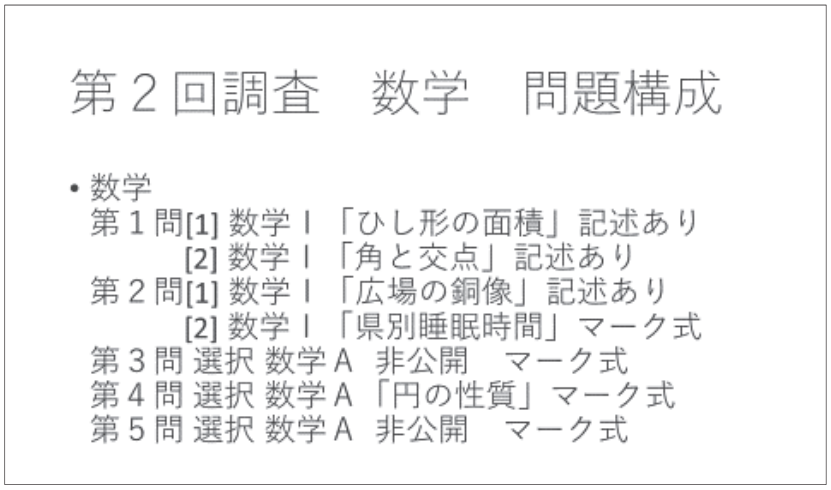
こちらの表は，記述問題同士の関連性を示しています。正答，部分正答，誤答プラス無記入という 3 区分に基づく，χ（カイ）２乗検定という方法で，p 値というものを出しました。これは，値が小さいほど関係性が強いのです。0.05 以下だと，明白に関係があると言えます。表の 0.05 以下の箇所には＊を付しました。

結局，全体的には記述式問題相互の関係性はあまりはっきりとはしていませんが，

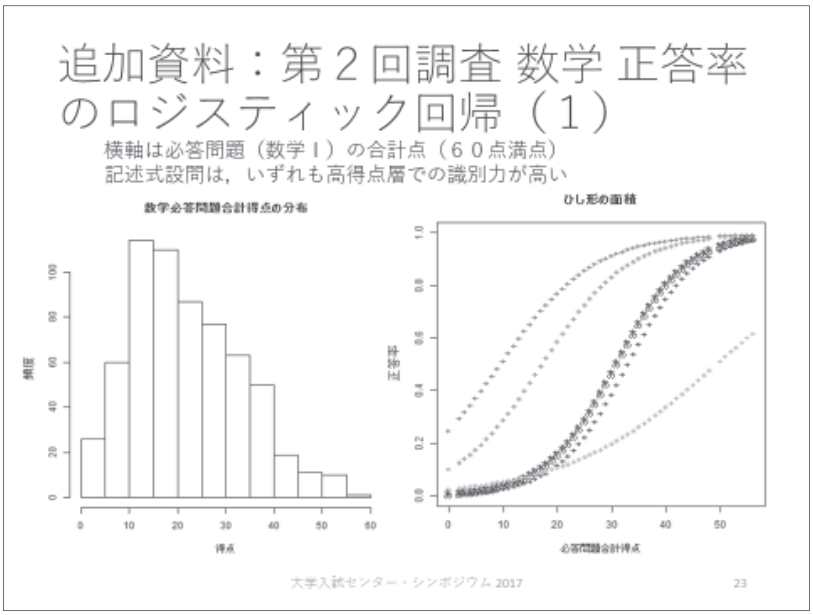
景観問 4 が他との関連性の強いことが分かります。とくに，駐車場の問 2 や問 3 と強く関係しています。

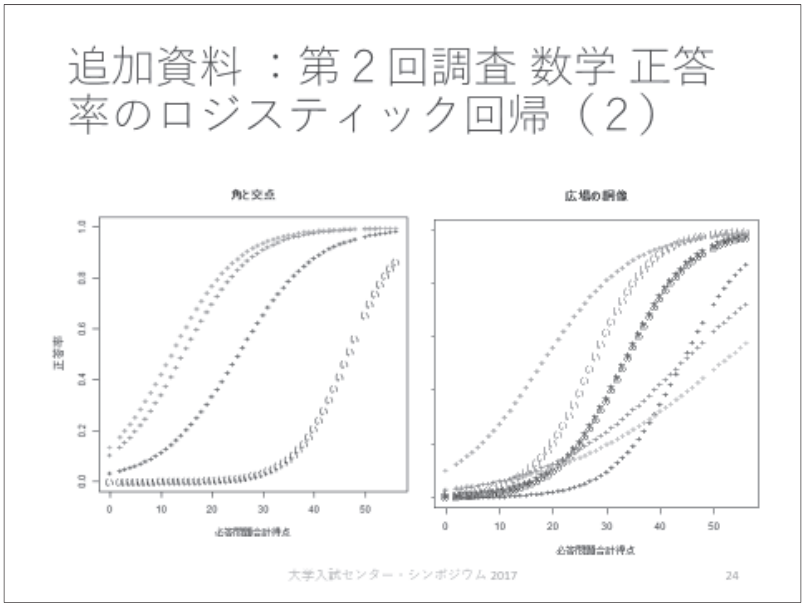


以上，第 2 回調査の国語についてのまとめです。



数学の方は，このスライドで示した問題構成でした。時間も少なくなったので，詳しい説明は省きますが，数学Ⅰの解答状況について少し御説明します。





この度数分布は，必解答の第１問，第２問の得点状況です。最初の２大問で 60 点満点ですが，得点を５点幅で横軸にとっています。これを見ると，結構難しかったことが分かります。平均点も，せいぜい２割ぐらいです。

そのあとのグラフは，各問ごとの正答率の曲線です。「あああ…」「いいい…」等平仮名の連続で描いている線が記述式の問題です。真ん中から右の方でぐんと立ち上がっていますから，数学の場合は記述式の問題はいずれもやや難しめで，成績の違いをかなりよく識別しているということは分かりました。以上です。

【山地/大学入試センター試験・研究副統括官/司会】ありがとうございました。時間の関係でかなり端折っていただきましたが，フロアの方で御質問ありました

らお願いします。

【フロア１】興味深い調査結果をありがとうございました。先生は記述式と選択式の関連性を割とポジティブに報告されているように感じましたが，記述式の導入は，マークシートでは測ることのできない力を測るためなのですから，むしろ両社の関連性がない方が望ましいのではないでしょうか。

【大津】従来測っていなかった能力を測りたいということは，おっしゃるとおりですが，やはり，国語ならば国語という教科の枠組みはあるわけで，全く関連性がないということはないだろうということですね。また，今回算出された関係性はかなり弱く，記述式の導入は不要だというほど強くはありません。

【フロア１】今後，プレテストされるときに，全く同じ内容を記述式とマークシート方式で問うてみて，それを比較するというようなことをしてもいいんじゃないでしょうか。

【大津】第１回の調査では，そのような検討もしています。

【フロア２】第２回調査の国語の自己採点の一致率というのを見ますと，61%，74%とバラつきがあるようです。受験者は自己採点の結果で個別大学に出願しますので，この自己採点一致率は重要です。このバラつきにどう対応されるのか，どのような基準を目指して問題作成するのか，決まっていれば教えてください。

【大津】なるべくクリアに自己採点できるような説明をすることが基本だと思いますが，なかなか難しいとは思いますが，内部で工夫重ねて，よい方法を考えるのが課題の一つだと思います。

【フロア３】国語の記述式問題の自己採点は段階別でやったんですか。

【大津】そうです。

【フロア３】採点を３段階にするか５段階にするかというようなことが議論になっていると思いますが。それとはどう関連しますか。

【大杉/大学入試センター審議役】今回発表したモデル問題の後ろの方に，正答の条件とその類型がいろいろ示されていますが，これをベースにしながら段階別評価をしていただきました。実際の試験で何段階になるのかというのは，まさに今回 11 月に実施する試行調査の結果などをもとに検討し，年度内をめどに結論を出していくようなスケジュールを考えています。

●報告 3

共通試験の役割と個別選抜改革

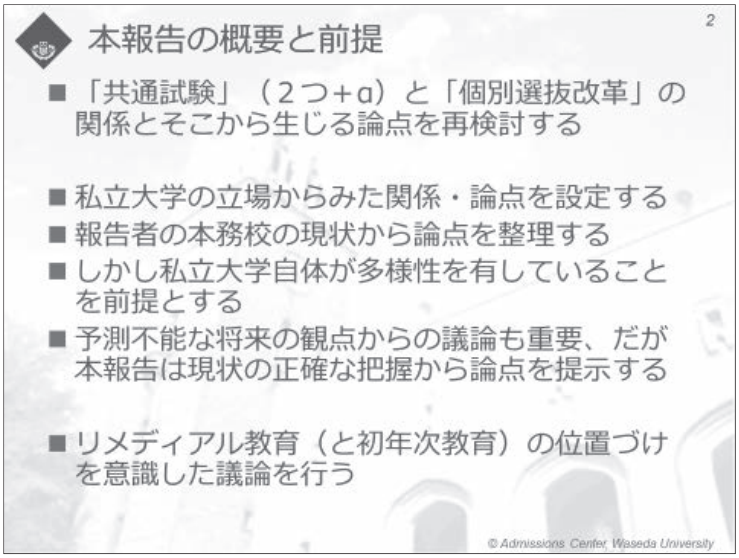
沖　清豪（早稲田大学入学センター 副センター長）

早稲田大学入学センター副センター長，文学学術院教授。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程教育学コース退学。早稲田大学文学部助手，国立教育研究所教育経営研究部高等教育研究室研究員を経て，1999 年より早稲田大学文学部（組織変更で現文学学術院）所属。2012 年より入学センター副センター長。専門は教育制度論，高等教育論で，初年次教育学会常任理事等。編著に『データによる大学教育の自己改善－インスティテューショナル・リサーチの過去・現在・展望』（2011 年，学文社）等。

皆さん，こんにちは。御紹介にあずかりました，早稲田大学の沖でございます。今日の題目は，「共通試験の役割と個別選抜改革」といたしましたが，恐らくこの題で想像される内容とは少しずれた話になるだろうと思いますので，その点は前もっておわびしておきます。

皆さんも，お気付きだと思いますし，当たり前だと思われているかもしれませんが，今回の大学入学者選抜改革では，私立大学はほとんど議論の対象になっていないような気がしております。そこで，私からは，あえて，私立大学の立場から見た論点を提示させていただこうと考えました。しかし，私立大学はばらばらです。共通テストや個別選抜についての考え方は，大学によって全く違います。私も全ての私立大学の入試を把握しているわけではありませんので，取りあえずは，私の所属している早稲田大学の現状から論点を引き出したいと思います。

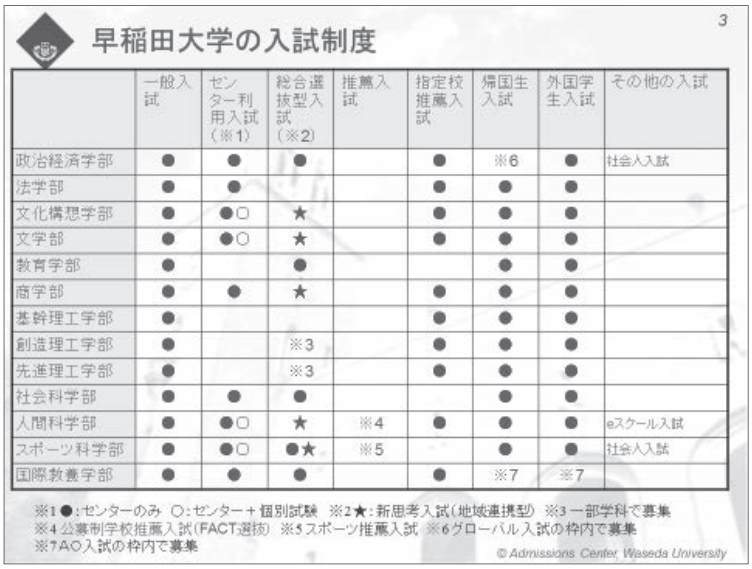
将来についての希望のある話もしたいのですが，今日は現実としては，これだけ課題があり，それをどう改善するのかという議論をしていただくための論点をお話したいと思っています。



本報告の概要と前提です。１行目の「共通試験」に「２つ+α」と注を付しました。最近，私たちはなんとなく，共通試験イコール，「大学入学共通テスト」という暗黙の前提で議論しておりますけれども，あえて，共通テストって本当に一つでしたか，二つだったような気がしますし，さらに検討すべきことがありませんか，という私の思いを，「二つ+α」と表してみました。まずこの点を踏まえてスタートし，個別選抜をどう考えるかということです。

■ガラパゴス型の入試をやり続けてきたという歴史があります。それを変えるのは容易ではありません。一方で，やはり変えなくちゃいけないと思っている人たちは決してゼロではありません。

そしてもう一つ，最近のほとんどの議論で取り上げられなくなったのがリメディアル教育です。初年次教育の議論は相変わらずいろいろな資料に出てきていますが。高校段階の基礎学力の不足を補う教育，入学前に IT を使ったりなど，いろいろな方法を取りながら，また，入学後にも「学習支援センター」などが，いろいろな対応をしていると思いますが，入学前教育の高大間での十分な連携を踏まえて，リメディアル教育が入試改革後はなくなるはずであるという希望の下にあまり議論されなくなりましたが，本当に大丈夫かということです。



3

早稲田大学の入試制度

	一般入試	センター利用入試（※1）	総合選抜型入試（※2）	推薦入試	指定校推薦入試	帰国生入試	外国学生入試	その他の入試
政治経済学部	●	●	●		●	※6	●	社会人入試
法学部	●	●			●	●	●	
文化構想学部	●	●○	★		●	●	●	
文学部	●	●○	★		●	●	●	
教育学部	●		●			●	●	
商学部	●	●	★		●	●	●	
基幹理工学部	●				●	●	●	
創造理工学部	●		※3		●	●	●	
先進理工学部	●		※3		●	●	●	
社会科学部	●	●	●			●	●	
人間科学部	●	●○	★	※4	●	●	●	eスクール入試
スポーツ科学部	●	●○	●★	※5		●	●	社会人入試
国際教養学部	●	●	●		●	※7	※7	

※1●：センターのみ　○：センター＋個別試験　※2★：新思考入試（地域連携型）　※3 一部学科で募集
※4 公募制学校推薦入試（FACT選抜）　※5 スポーツ推薦入試　※6 グローバル入試の枠内で募集
※7 AO入試の枠内で募集

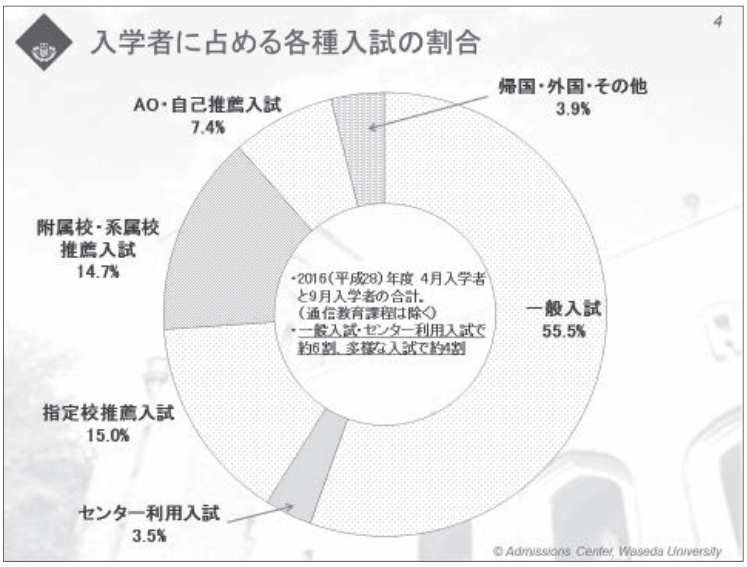
© Admissions Center, Waseda University

さて，早稲田大学の入試制度です。古い大学にありがちなのですが，13 学部が見てのとおりばらばらに勝手なことをやっております。（笑）今日の話は左から 2 列目のセンター利用入試です。

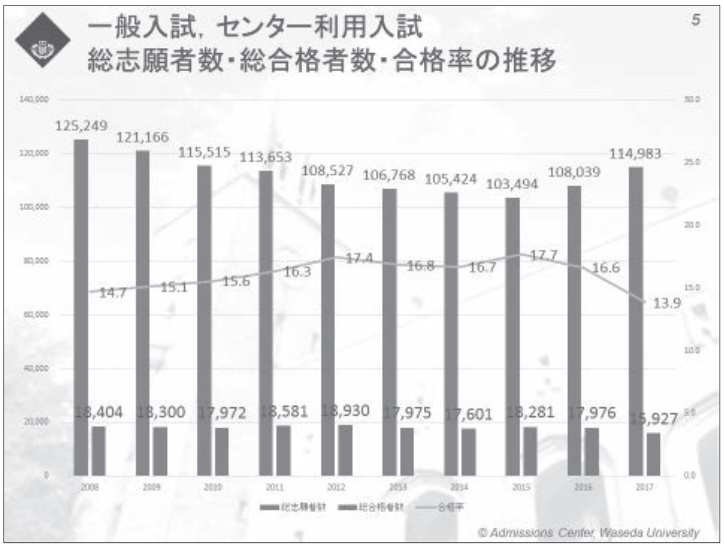
黒丸はセンター試験のみを課す類型で，課す科目数も 5 教科 6 科目だったり 4 教科 4 科目だったり学部によってばらばらです。

白丸は，センター試験と個別入試を組み合わせる方式です。文学部・文化構想学部は個別入試 2 教科 2 科目とセンター試験の 1 教科 1 科目を使います。人間科学部は，センター試験 5 教科 6 科目の点数を 140 点分の配点に圧縮し，個別試験の数学 560 点と組み合わせます。

また，スポーツ科学部の「競技歴方式」では，センター試験の 3 教科 3 科目とスポーツの競技歴と組み合わせています。

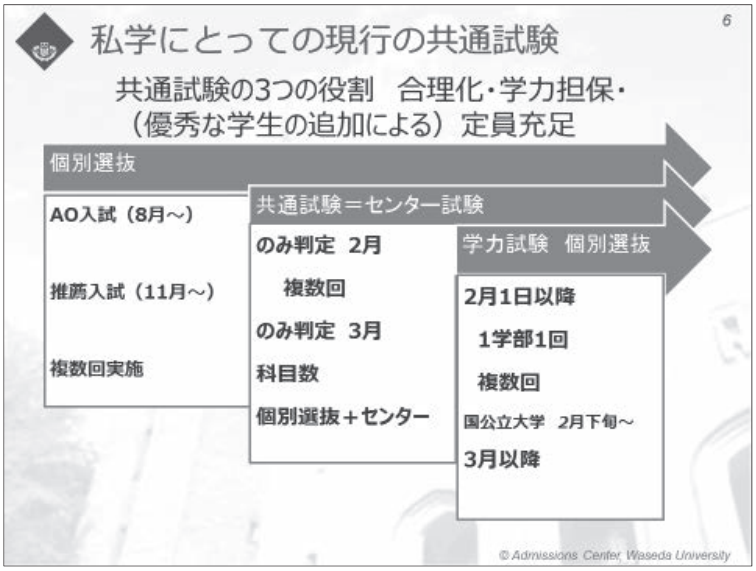


結果的にどのぐらいの割合でこのセンター利用入試を経て入学しているかと言いますと，全入学者の中の 3.5%にとどまっているというのが現状です。あまり大きい声で言えませんけれども，もともと想定している人数よりも少ないのが現実です。一部の学部の先生方が，たったこれだけしか採らないのに，センター試験にどれだけの労力を掛けるのだということで，利用しないぞという学部もいくつかあるという状況です。



これは一般入試とセンター利用入試の合計の志願者数と合格者数と合格率のグラフです。ニュース等で報道されているとおり，早稲田大学は，この 2 年ほどの間に 2,000 人強，合格者が減っていて，高校の先生方には非常に御心配をお掛けしています。ただ，早稲田大学はそもそも 5 年前に，Waseda Vision 150 という 20 年計画を立てていまして，入試の合格者数をその当時の 4 万 3,000 から，20 年間で 3 万 5,000 まで減らすということを宣言しております。とすると，1 年間当たり数百人程度ずつは減らしていかなければいけないわけでして，その点で言えばこの減少自体はおかしくはないということになります。実はそれと同時に大学院生を増やすというのがセットの計画だったのですが，なかなか院生が増えないので今課題になっています。

■共通テストは「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」しか見られないということが前提になっていますから，必ずどこかでプラスワンをやらなくちゃいけない。必然的に「共通試験+個別選抜」になるということなのです。原理的には，今までの「センターのみ」ができなくなるということです。



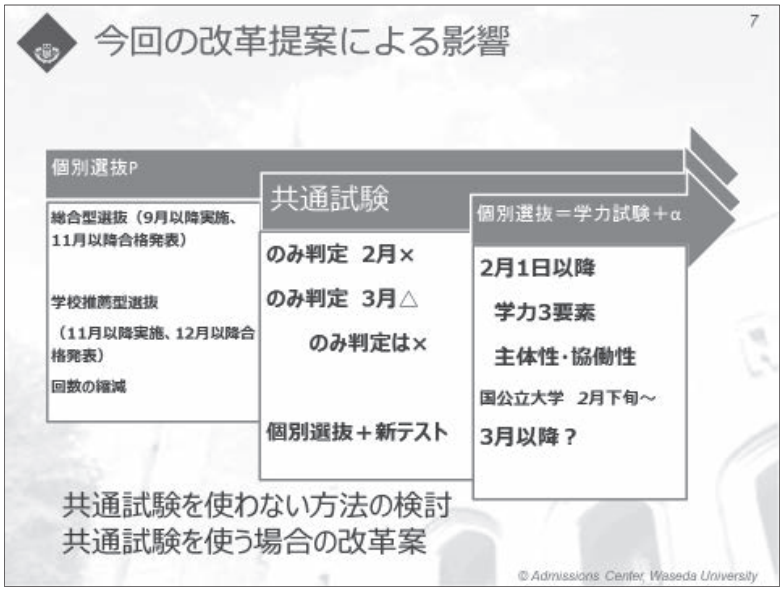
センター試験の使い方を２パターン御紹介しましたけれども，早稲田大学の場合はセンター試験の成績だけで判定する「センターのみ方式」が主流です。したがって，１月 13，14 日にセンター試験を受けた受験生は，１月 16 日までに出願し，２月の 10 日前後に合否発表が行われるという日程で行っている。これが一つになります。さらに，センターとその一般入試を組み合わせる場合には，事前に出願していると，それで成績を受け取って２月の下旬ぐらいに一般入試が行われた後に合わせて合否判定になるという形になります。私はずっと早稲田大学で働いていますから，これが当たり前だろうと思っておりましたが，他の私立大学を調べると全然違うわけです。大体，センター試験の使い方一つとっても，真ん中に出ておりますとおり，センターのみという点では一緒ですけれども，どのタイミングで判定をしているかについては，２月の中旬と２月の下旬と両方あります。さらに３月の中旬にもあるという形で行われていて，多くの私立大学で２回ないし３回，センターのみの判定をしているわけです。国立大学の先生方は，この状況を知ってどうお感じになりますか。当たり前でしょうか。「えっ？」ていう感じなんでしょうか。そこは是非伺いたいところかなと思います。

また，センター試験で課す科目数については，いろいろな報告書や中教審などでも批判されておりますが，私立大学では５教科を課すような入試は少なく，３教科型，２教科型，場合によっては１教科型というような多様な使い方になっています。

もちろん個別入試とセンターの成績を組み合わせるというパターンもあり，既に共通試験の使い方が，想定されていた以上に多様だということが現状だということを，まず御理解いただければと思います。

さらに AO 入試，推薦入試が８月，11 月からそれぞれ行われます。ちなみに AO 入試も，私が調べている範囲だと５回 AO 入試の合否判定を行っている大学があるようです。８月中に１回とか，毎月のようにやるとかということにもなりますし，推薦入試も２回合格発表を行う事例が見られます。どのように組み合わせるか。12

月，1 月までに 2 回やるのか，実は 3 月にもう一度行いますというようなパターンもあります。入試制度については，私立大学は本当に，工夫し過ぎなのか，混乱というか非常に多様になっています。



今回提案されたことがそのまま実施されるとどうなるでしょうか。AO 入試は，「総合型選抜」と呼ばれることになりますが，9 月以降の実施で 11 月以降に合格発表となります。ちょうど今日この会場の隣の共立女子大さんが AO 入試をしています。合格発表は，4 日後です。このスケジュールが認められないということです。いま目の前で行われている入試ができなくなるという提案なのです。

要するに合格発表を 11 月以降にしないといけないということですから，試験をずっと遅らせるか，発表まで 2 か月ぐらい待たせるかどちらか。それとも何か，違う方法があるのか。

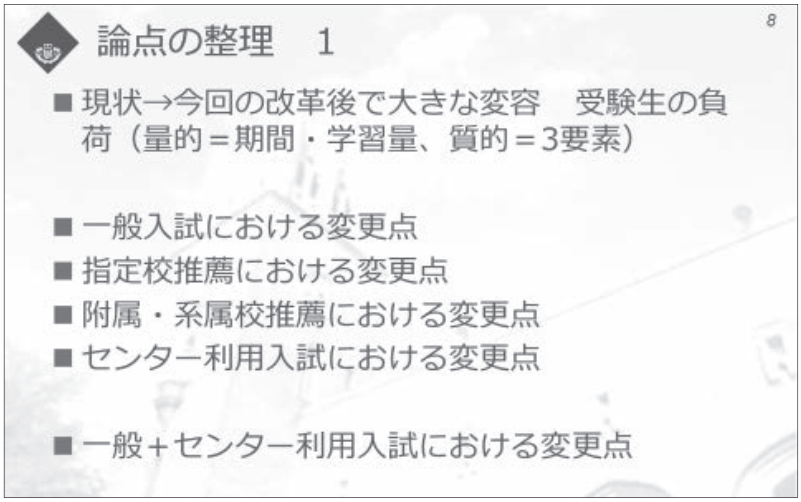
学校推薦はどうでしょうか。発表が 12 月ということで，見た目そんなに大きい変化ではないかもしれません。

いずれにしましても，先ほど言いました共通試験「のみ判定」というのは，なかなか難しいものになります。なぜかというと共通試験のみでは，学力の 3 要素のうちの「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」という 2 要素しか見ることができません。残りの 1 要素，「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」までは測れないわけです。「のみ判定」は原理的には不可ということになります。

こちら，「個別選抜+新テスト」で，共通試験をどう使うか，これ相当多様なやり方がありそうです。本学でも引き続き検討中です。

さらに 2 月 1 日以降に，各大学は 3 要素を見る学力試験を行う。その日程が 3 月いっぱいまでで，果たしてどんな入試になっていくのか。選抜のお尻は現行の 4 月以降ではなくて，3 月中に全部終えるということになりましたので，2 か月の間に全てを決めなくちゃいけないことになります。

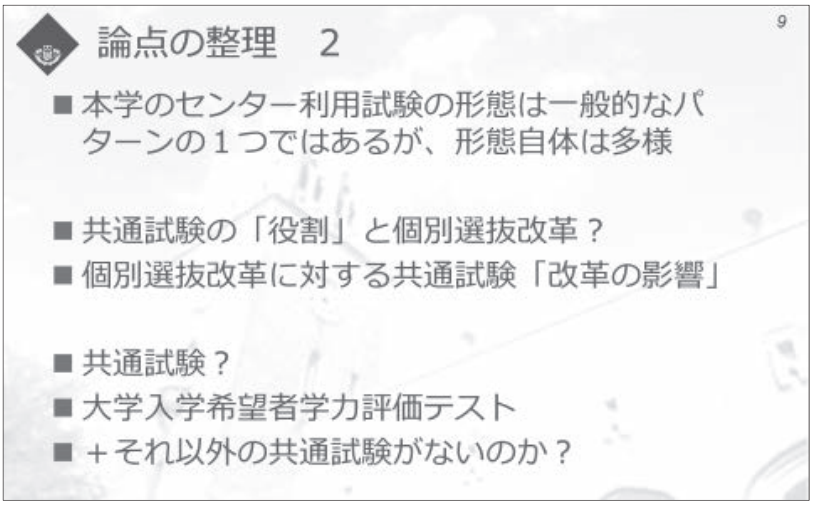
また，現在の実施要項でも学力試験は２月１日以降とされているのに，１月中に学力試験をやっている私立大学があるわけですけど，こういうことを是正するということも非常に問題になってくるわけです。要するに変更点が非常に多いわけです。



とりわけ，個別入試改革と共通試験の問題で考えますと，学力の３要素をどう見ていくのかが問われます。繰り返しになりますけれど，共通テストは「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」しか見られないということが前提になっていますから，必ずどこかでプラスワンをやらなくちゃいけない。必然的に「共通試験+個別選抜」になるということなのです。原理的には，今までの「センターのみ」ができなくなるということです。それが，私立大学が今直面している課題なのです。

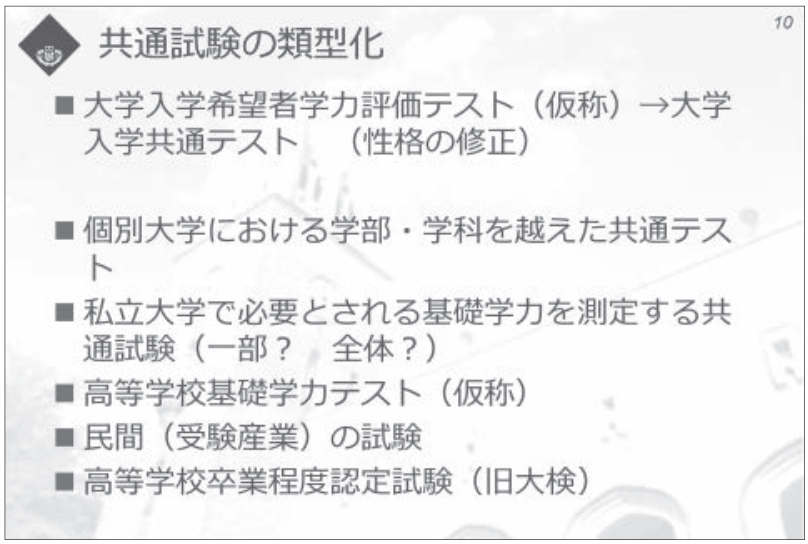
それは他のいろいろなところに影響を与える可能性があります。「一般+センター利用」も実は影響を受けるリスクがあります。要するに成績提供の時期がまだはっきりしていないということで，早稲田の場合ですと，一般入試の入試日程が２月の中旬以降になっていますので，他の私大よりもまだ影響が少ないと見込んではいますが，２月 12 日前後に一般入試が始まる学部に関しては，これまで「センターのみ」の合否発表の後に入試をやっていたはずなのが，今後はセンターの合格発表の前に実施するということになりますから，どんな試験や歩留まりになるのかがさっぱり分かりません。いずれにしても現行とは違う在り方をしていかざるを得ません。

私立大学，特に２月の上旬に一般入試を行っている大学にとっては，センターのみの扱い方というのは，特に２月における「センターのみ」が非常に大きな影響を受けることは間違いなくて，さあどうしましょうという状態です。まだ解決できていない論点です。（➡）



論点の二つ目は，共通試験にどういう役割を与えるかという問題です。個別選抜を今までの一般入試やAO･推薦などこれまでのバリエーションでやっていくのか，全然違うものとして考えていくのかということです。それは逆に言うと，実はアドミッション・ポリシーをどう変更して，それを前提として大学教育をどう変えるかという話です。そのあたりをきちっと検討することが私立大学にとっての非常に大きな課題だろうと思います。

ただし，その場合の共通試験が，「大学入学共通テスト」だけでいいのかという論点が，もともとの議論ではあったのではないかと思います。「共通試験？」と表記しているのはそういう思いからです。



さて、大学入学共通テスト以外の共通試験をどう考えるかです。私立大学連盟の

中でもいろいろな議論をしてきたように思います。過去の連盟の報告書類を見ると，あちこちに関連する主張が載っているのです。そもそも今回の改革の議論の下での大学入学共通テストの話というのは，ある意味これはセンター試験の性格の修正ということで，先ほどの大津先生の報告でも難易度は上がりますという話になるわけですけれども，測るものが変わるということですね。

あるいは議論の中で出てきたもので言えば，高等学校基礎学力テスト，今は「学びの基礎診断」ということで性格が変わってきているようですが，採用される民間の試験をどう考えるか。もう一つ，高等学校卒業程度認定試験をどう位置付けるか。この試験は易し過ぎるという批判がありますが，要するに大学受験資格が認められる認定試験では何が測られているのかという問題に行き当たります。今日のシンポジウムの話から逸脱しますからこれ以上申し上げませんが，そもそも論として「高卒を認定する学力とは何？」という議論となる余地があります。

こんなことを蒸し返す理由は，次の二つのスライドを比較していただきたいからです。

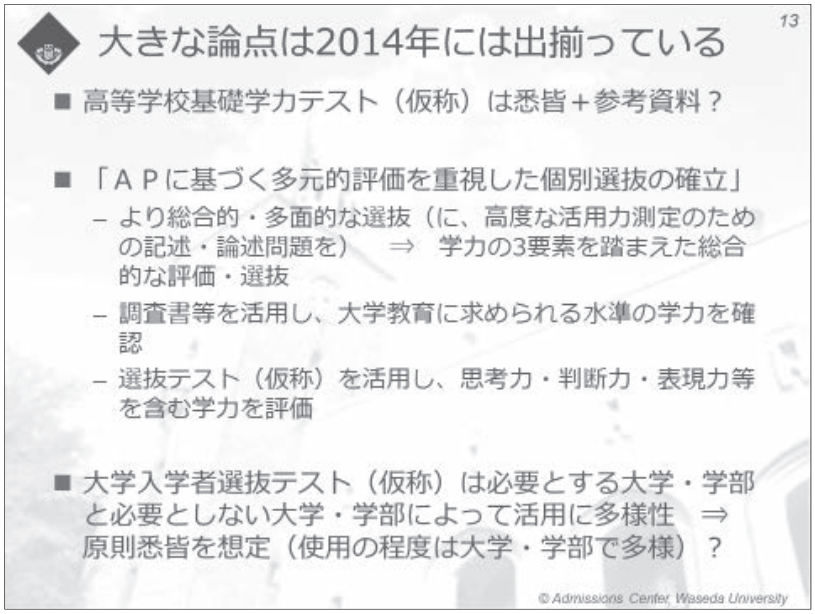
これは，2014 年 10 月 10 日の中教審の部会で出された資料です。このスライドを御覧になって，こういうものだよねっていうふうに皆さんお考えになるでしょうか。よく見ていただくと，高等学校基礎学力テストがあって，大学入学希望者学力評価テストがあって，初年次教育があって大学の教育になると。当たり前だとも思うんですが，現在使われている資料はこれではありません。（➡）

こうなったんです。2 週間後の 10 月 24 日の会議で出てきた資料はこう修正されていました。大学入学希望者学力評価テストが大学に続く矢印のすべてに掛かっています。これ，前の資料では，基礎学力テストを受けて，大学入学希望者学力評価テストは通らないで，そのまま「アドミッション・ポリシーに基づく多元的評価」につながるルートも考えられていたわけですが、それがなくなっているのです。

要するに，もともとの議論をたどれば，今のＡＯ・推薦入試が，基礎学力不問となっていることが問題だというので，その対策をまさにこの基礎学力テストによって担保しようということだったわけです。ここで最低限の質保証がなされていると確認できれば，その上でのＡＯや推薦は行ってもよいでしょうとういうことだったんです。

そして，さらに選抜性の高い大学で大学入学希望者学力評価テストを使い，場合によってはそれに多元的評価を重視した個別選抜を足している。これをどう組み合わせるかは，大学側がアドミッション・ポリシーに基づいて判断するべきではないかというのが，私ずっと思っていることであります。ここに議論を戻すべきではないかということでお話をさせていただいた次第です。

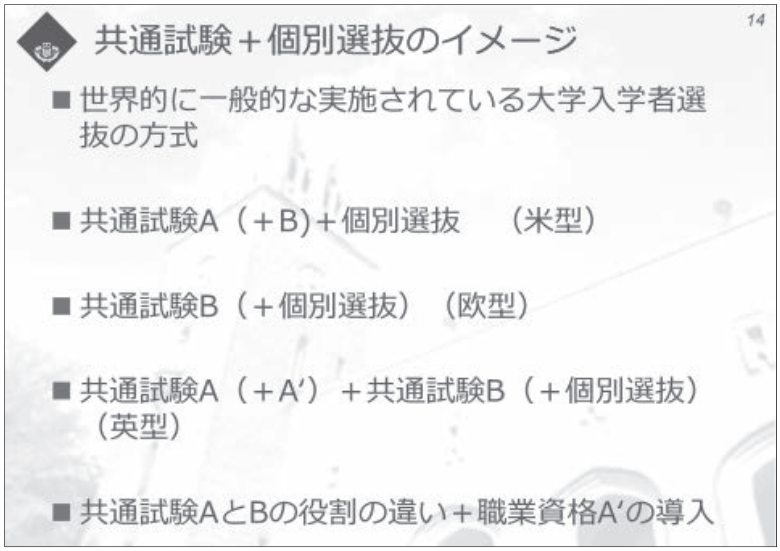
しかし現状では，基本的に丸々っと全員が，大学入学希望者学力評価テストを受けるように捉えられていて，部分的に使うのかどうかぐらいの違いしか分かりません。その使い方についてはまだ明確ではありませんし，大学によっても考え方が違うわけですが，論点になり得るだろうというふうに思います。



要するに，この手の議論というのは 3 年前にはもう議論の論点は出そろっています。その後技術的な話をずっとやってきていますけれどもあまり進んでいないし，考え方をどうするかということは 3 年前に戻るということもあり得るのかなというふうに思います。

ただ，その場合でも，アドミッション・ポリシーに基づいて選抜をするということが大変重要なポイントです。こういう教育をやってこんな人材を輩出したいから，こういう人材を採りたい，そのためにこんな入試をする。どんな人材であるかというのは大学ごとに考えればいい，というのがもともと自律的な大学の考え方であったと思いますし，それがある意味徹底されていたはずなんです。

それが，調査書を使ったり、新テストを使ったりということになったわけです。

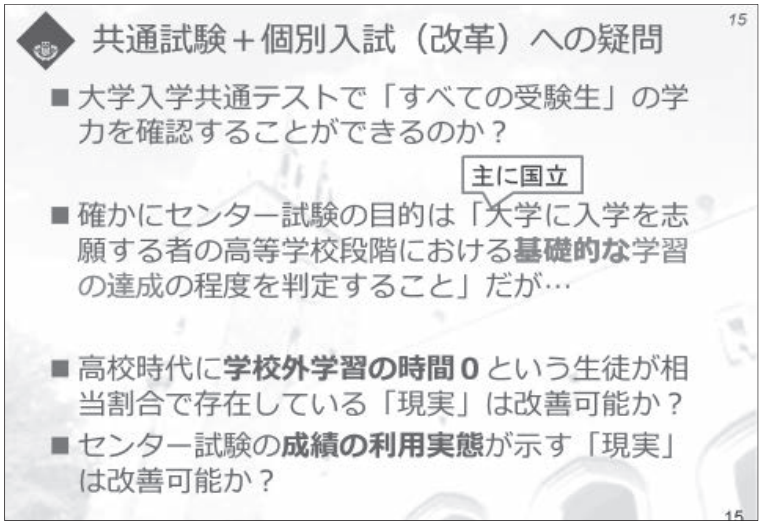


この話をなんで私が蒸し返しているかというと，先ほど川嶋先生に整理していた

だいたので，私とても話しやすくなったのですが，「共通テスト+個別選抜のイメージ」っていうのは，世界的に果たしてどうなっているかということです。アメリカ型というのは汎用的な共通テスト A，それに個別で何かやるかもしれないというパターンです。欧型は専門性の高い共通テスト B だけです。イギリスは A と B をやって，さらに職業資格を使うという A ダッシュみたいなのもあるという形になっています。さらに，オックスブリッジのように個別選抜を行うようなところもあるということになっています。A というのは中等教育の基礎的な修了レベルを確認するテストです。その点で言えば基礎学力テストのようなニュアンスに近いものになるわけです。B はまさに選抜性の高いと言いますか，到達度を見るのですけれども，試験自体の難易度が高い，もともとエリート型のイメージのある大学の入試で使われるようなテストです。

では，日本はどこを目指しているのだということです。そもそもの議論は恐らくイギリス型の A プラス B だったんじゃないかというふうに思うのですけれども，今議論しているのは，B についての議論だけになっています。だからレベルの高い試験の議論になっているということです。

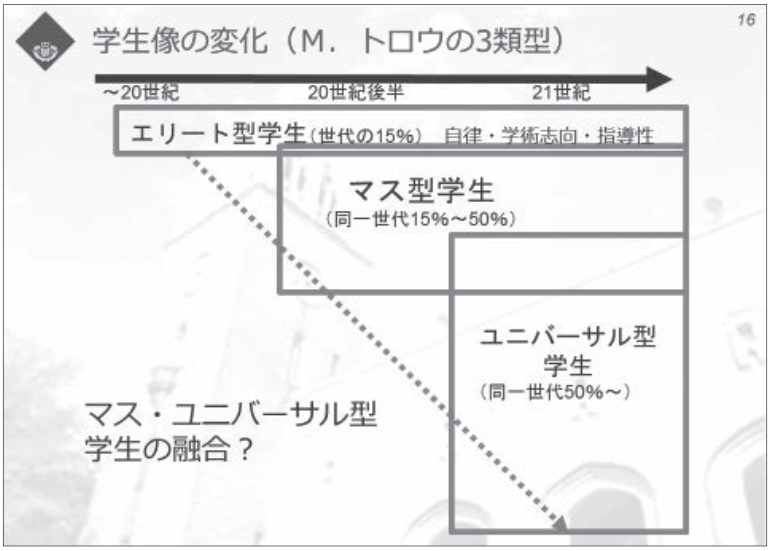
それはそれで重要なんですけれども，これだけやっているとまずいのではないかということをあえて申し上げたいということです。

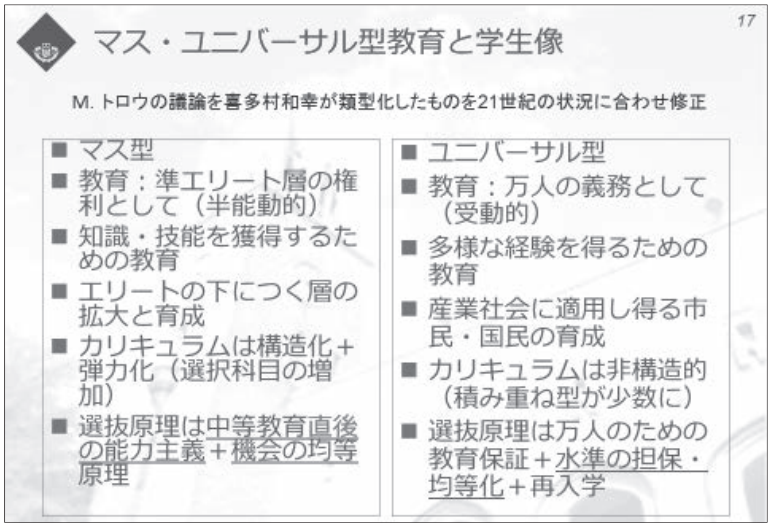


現在のセンター試験は目的として「大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する」ことになっています。確かに言葉では「基礎的な学習」なんですが，実際に受けている層でもそんなにみんなが高い点数をとっているのかという話と，水準が相当高いために，やはり主に国立大学をイメージしていないかというのが問題です。

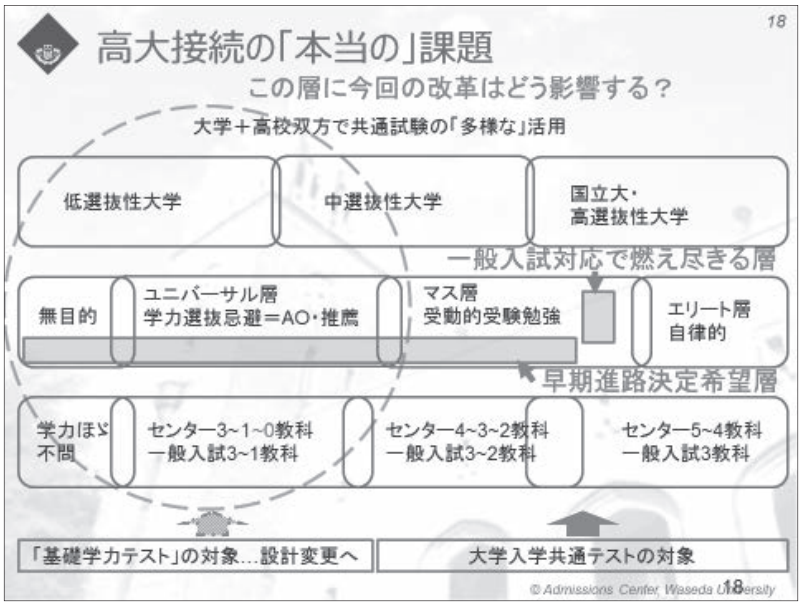
■進路多様校ですと，家庭学習大体は 30 分以下という生徒が半分超えちゃうわけです。そんな子たちが，平成 33 年度から入試制度を変えたから，いきなりみんな勉強するかといえば，そんなに簡単には変わらないだろうと思うのです。

これは何よりも，実際問題として，学校外の学習の時間がゼロという層が 4 割であるといった課題が指摘されています。私は現在も高校を幾つも回っていますけれども，やはり進路多様校ですと，家庭学習大体は 30 分以下という生徒が半分超えちゃうわけです。そんな子たちが，平成 33 年度から入試制度を変えたから，いきなりみんな勉強するかといえば，そんなに簡単には変わらないだろうと思うのです。7 年ぐらいかけてようやくちょっとは変わるかもしれないというふうに考えれば，3 年後にどうするかという話と 7 年後にどうするかという話は，もう少しきちんと区別して議論をした方がいいと思うのです。





これはもう釈迦に説法で細かく言いません。今大学で迎え入れている学生の中にだって，従来的なエリート型で放っといたって自律的にちゃんと勉強できるタイプは少数ながらいるわけです。しかし圧倒的なマス層や，さらにどんどん増えているユニバーサル型のタイプの学生にどう対応するかが今の大学のミッション，特に私立大学のミッションになっているわけです。その点ではまさに選抜の話ではなくて水準担保の話に変わってきているということです。

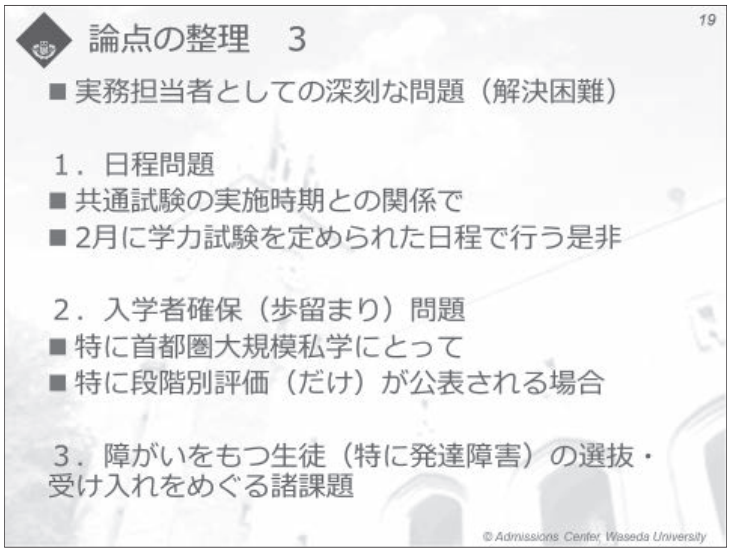


結局この図で言いますと，今我々は一番右側についての議論ばかりしています。国立大学や，比較的選抜性の高い私立大学で，入学者は高校段階でもいろいろと工夫された教育を受けている場合が増えていて，大学でも工夫の効果が上がる可能性が高い層です。もちろん，一般入試のためだけに勉強してきて燃え尽きてしまい，入学後に何をしていいか分からないという層もいます。それをどうやってケアしていくか。入試の段階でケアするのか，入学後にケアするのかは大学によっても多様ですが，そういう課題もあります。

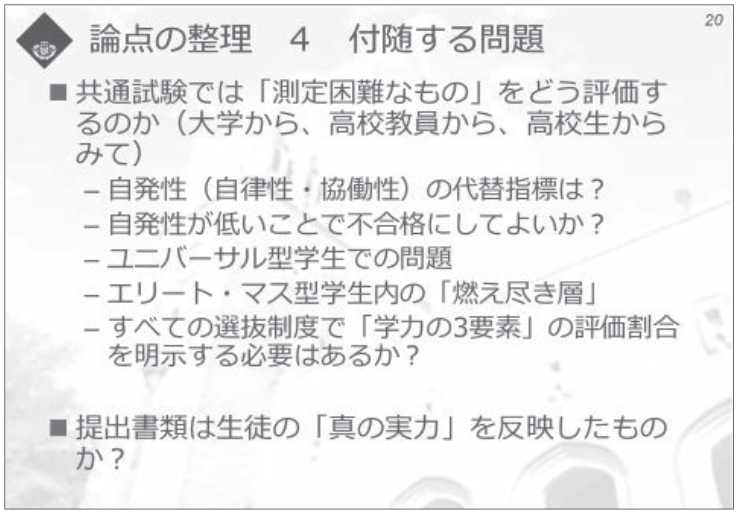
また，高校生の中には早めに進路を決めたいという層も相当います。そういう層がAO・推薦入試を利用しているわけです。今回の改革で日程がどんどん後ろに倒ますから，この層は改革の影響を大きく受けます。大学進学を諦めるのかどうするのか分かりませんけれども，そういう影響があることも考えなければなりません。

そして，何よりも，共通試験の使い方です。専門性の高いところはセンター5教科，4教科使って選抜しているわけです。しかし左の方を見ていけば，センターはせいぜい多くても3教科とか，何種類かやる中で3科目から1科目だけみるとか，実は正直言えば0科目とでもいいますか，受けたらOKみたいなところがないとは言えないのが現状です。ただ受けたという証拠の受験票だけで通っているんじゃないのかなという層が，試験会場で試験監督をやっていると目につきます。そういう層こそまさに基礎学力テストの対象だったはずなんですが，これをどうするのかと

いうのが課題かなということであります。



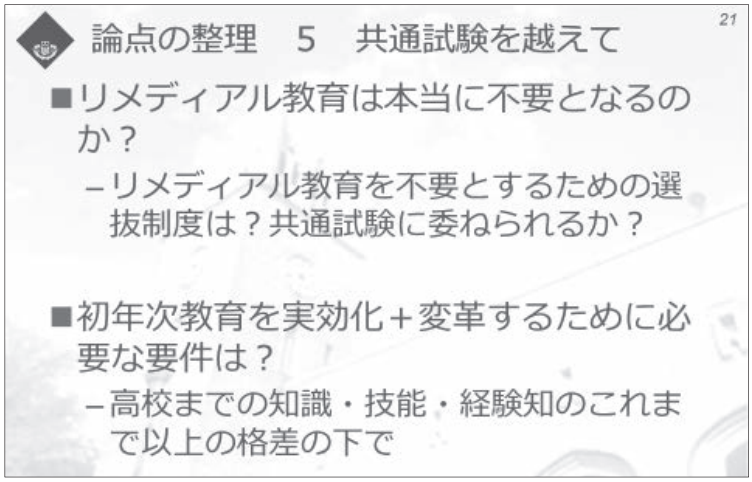
また，実務担当者として深刻な問題は，まずは試験日程の問題です。また首都圏の私立大学は，一方では定員を増やすなとか言われていて，さらに定員を厳格に守らないと補助金出ないよとか，いろいろなことを言われているわけです。非常に難しい問題を抱えています。また，障害を持っている生徒さんへの対応というのもなかなか難しそうだなと思います。



結局個別選抜がどうなるかということですが，いわゆる学力の 3 要素のうちの，三つ目，「自主性・多様性・協働性」をどのように測るかが依然としてまだ明確ではありません。

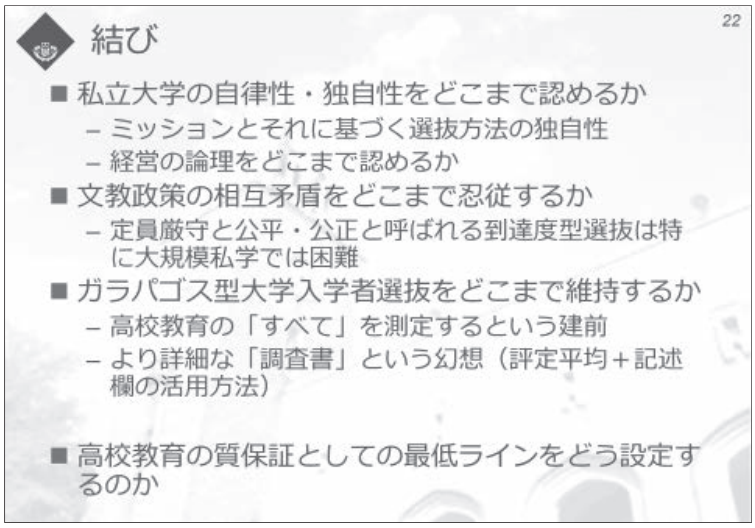
この問題は要するに，主体性や協調性がない，あるいは低いから，不合格にしていいのかということです。人間性と読み替えているような資料もあるわけですが，

あなたは人間性が低いから大学に入ってはいけませんなどとは口が裂けても言えないわけです。そうであるならば，その3要素をどう測るのかということは，そろそろ真面目に具体的に考えないといけない時期に来たなというふうに思います。



というようなことでありまして，何よりも最後に申し上げたいことは，もう既に申し上げましたことの確認です。高校段階で十分育っていないと思われていた学力が，今回の入試改革と，あと高校教育の改革でうまく改善していくかどうかということについて，まだ正直私は懐疑的であります。少なくとも3年間でいきなり高校教育が全面的に変わるとは思えない。一部の進学校は変わるのかもしれませんが，中堅やそれより下の進路多様校が全体として変わらないと，高校教育の改革という話は終わらないわけなので，このあたりはもう一度確認する必要があります。

もう一つ，それをさらに踏まえて高大連携や初年次教育をどのように実行していくかということですが，高校側と大学側が従来以上に協力する必要があるだろうなと思います。



私立大学はこれまで各大学独自のミッションを持って，ガラパゴス型の入試をや

り続けてきたという歴史があります。それを変えるのは容易ではありません。

一方で，やはり変えなくちゃいけないと思っている人たちは決してゼロではありません。今が改革のチャンスであることは間違いないので，それを踏まえて，きちんと議論ができて，こういう将来が見える，一方で現在の直面している課題をこういう形で解決できるんだという理屈をちゃんと示していくことができるかどうかというのは，私立大学で入試改革を進めるうえで非常に大きいかなと思います。

■定員について厳しい要請をされている限りは，多様な入試を行うことには相当苦労いたします。ルール違反はしちゃいけませんけど，厳格な定員管理と入試改革の両立はちょっと難しいよねっていう話は考えなければならないかなと思います。

その点で言いますと，先ほどの定員の話，川嶋先生がおっしゃられたことは，特に私学にとっては切実な問題であります。定員について厳しい要請をされている限りは，多様な入試を行うことには相当苦労いたします。ルール違反はしちゃいけませんけど，厳格な定員管理と入試改革の両立はちょっと難しいよねっていう話は考えなければならないかなと思います。やはりこの話，私が一番違和感を感じているのは，大学入試のときに高校教育の全てを測定しなければならないという議論の前提が，暗黙の了解としてここにあることです。そうするための資料がやはり調査書なんですけれども，ではそれが果たして全てきちんと正しく生徒の実態を示すように書かれているかどうかについては，今後その調査書の改善が図られたとしてもどのぐらい正しくしめすことができるのかについてはまだ懐疑的と言いますか，どう工夫していくのかということも一つの論点かなというふうに思っています。

いずれにしましても，今日私が申し上げたのは，エリート型学生をめぐる共通試験と個別選抜をめぐる課題は3年後に何とかなるでしょうし，そんなに心配していないんですけれども，マス型やユニバーサル段階の学生をめぐる課題は3年では解決せず，特に7年後に新学習指導要領で学んだ生徒さんたちが受験をするという段階までにきちんと対応策を検討しなければならないんじゃないかということです。

非常に雑ぱくな話で恐縮でありましたが，以上で私の問題提起とさせていただきます。御清聴ありがとうございました。

■指定討論 ①

宮本 久也（東京都立西高等学校長）

東京都立西高等学校長。筑波大学第一学群人文学類卒業後，都立高校教諭，東京都教育庁指導部指導主事，主任指導主事（高校改革担当），都立学校教育部入学選抜担当副参事，指導部高等学校教育指導課長，指導企画課長などを経て，2012 年 4 月より現職。全国高等学校長協会会長，全国普通科高等学校長協会理事長（2015 年より），中央教育審議会初等中等教育分科会臨時委員（2015 年度より），高大接続システム改革会議委員（2015 年）等多くの審議会委員を務めている。

ただ今御紹介いただきました宮本でございます。今までの御報告を受けて，高等学校の立場からお話をさせていただきます。

私は，大学入試とは，志願者が高校時代に身に付けた多様な能力を自分が進学を希望する大学に評価していただくということだと思っておりますし，今回の大学入試改革がそのような方向に向かっていくことについては歓迎しています。ただ，本当にその狙いのとおりになるのかどうか，依然として心配な点も多々ございます。

■学力の 3 要素を多面的・総合的に評価をするという改革の方向性についてですが，昨年に比べると「期待できるのではないか」という声が随分増えてきています。

全国高等学校長協会の大学入試対策委員会では，大学入試に関して全国の校長先生方の様々な御意見を調査して，まとめるということをしており，今年度も 7 月に

アンケート調査を行いました。各都道府県から，進学校 4 校，中堅校 4 校，そして専門高校 2 校，計 10 校を抽出し調査しました。今日はその調査結果の概略をお話したいと思います。

まずは，学力の 3 要素を多面的・総合的に評価をするという改革の方向性についてですが，昨年に比べると「期待できるのではないか」という声が随分増えてきています。共通テストの記述式問題の導入についても，半数以上の方が今までよりは思考力・判断力・表現力を評価できるのではないかと肯定的にとらえているようです。

もちろん不安だという意見もあります。まず一番大きな不安は，記述式問題の採点の公平性です。本当に短期間で公平な採点できるのか。7 割以上の方々が心配しています。そしてもう一つの不安は，自己採点についてです。これが実際にどれぐらいの精度で行えるのか。当然出願指導への影響が出てきますので，6 割以上の先生方が非常に不安を持っています。

■平成 36 年度以降も是非センター試験の英語も継続していただきたい。やはりこれが高等学校側の声だと思います。

ただし，もともとセンター試験に対する高等学校側の評価は高いものがありましたし，モデル問題も公表されましたので，全体的に共通テストに対しての理解は深まりつつあることは事実です。今後，試行調査（プレテスト）等を通じて，様々な課題を解決していただきたいと思っています。

今日のこれまでの報告では，大きく取り上げられていませんでしたが，英語 4 技能についての資格・検定試験の活用も注目されています。まず，センター試験の英語をやめることについてはほとんどの方が反対です。資格・検定試験とセンター試験の英語の併用でいいのはないかという回答が約 7 割，そして，共通テストの英語だけで十分だという回答も約 25%ありました。その理由は，一つには学習指導要領との整合性に対する不安です。そして家庭の経済力，授業への影響，地域間格差，つまり，当初から指摘されていた不安が依然として払拭されていないのです。本音としては，国が主導して新しい 4 技能試験を作ってもらいたいということだと思います。そして，平成 36 年度以降も是非センター試験の英語も継続していただきたい。やはりこれが高等学校側の声だと思います。

大学側の共通テストの活用についてですが，できれば全ての大学に参加をしてほしいという方が 35%ぐらいいました。また，もっと多くの大学が参加をすべきという方が 50%ぐらいいて，より多くの大学がこの試験を活用してもらいたいと考えているようです。AO・推薦入試の改革については内容，日程ともに 6 割以上が評価するという回答でした。ただし，選抜性の低い大学で本当にきちんとやれるのかという心配の声もございます。

各大学の個別選抜に関しては，まだ各大学から具体的な方向性が示されていないこともありまして，アンケートは採っていません。ただ，いろんな校長先生方から声を頂いております。高等学校側としては，個別選抜がどう変わるのかが今回の入試改革の最大のポイントだろうと考えているようです。国立大学の場合は各大学の改革の方向性は，恐らくは改革全体の方向性に沿うものになるだろうと思っています。私立大学については分かりませんが，私大受験生の大部分は，この共通テストを受験しないわけです。しかし，共通テストが変わろうとしている方向性と，私立大学の個別入試の改革の方向性が同じでなければ，今回の改革は全くうまくいかないと思います。今高等学校では，学習指導要領の改訂を踏まえて授業を変えていこうという動きが徐々に始まっています。新しい選抜が新しい学習指導要領で育まれた力を評価できるものになるのであれば，高等学校の授業改善も促進すると思いますが，個別選抜が今までと全く変わらないのであれば，多分これはうまくいかないだろうと思っています。

最初にも言いましたが，この入試改革については，全体の方向性としましては賛成ですけれども，今の流れで進んでいきますと高校には幾つかの大きな影響を与えるという不安があります。まず一つは，入試が早期化し長期化することです。つまり，民間の資格・検定試験を使うとなればその1回目の受験からが実質的な入試のスタートになります。また，入試が複雑になってきます。AO，推薦，一般，今の呼び方ですけども，こういうものについて各大学がそれぞれのアドミッション・ポリシーに基づき特色ある入試をすればするほど，高等学校側の進路指導は複雑になって，進路指導体制を見直さなければならなくなるわけです。

■子供たちの進路選択，進路決定に，学校外の力が今まで以上に大きな影響を及ぼすということになってはならないということです。

また，更に心配なのは，結局格差の拡大ということです。受験者の背景にある，経済的な格差や地域的な格差が，この高大接続改革によって，更に拡大するというようなことになっては困ります。つまり，子供たちの進路選択，進路決定に，学校外の力が今まで以上に大きな影響を及ぼすということになってはならないということです。これは我々だけの力ではどうすることもできないだけに，非常に心配をしています。

最後になりますが，川嶋先生のお話とも重なりますけれども，結局今の入試のスケジュールを変えないで，様々な改革を無理に実現しようとしているので，いろいろなところに矛盾が出てくるのだと思います。

明治以来の改革だというのであれば，選抜の日程も含めて根本的に見直さなければ，本当の改革にはならないと思います。以上です。

■指定討論 ②

木村 拓也（九州大学大学院 人間環境学研究院 准教授）

九州大学大学院　人間環境学研究院 教育社会計画学講座 准教授。2005 年 東京大学大学院教育学研究科 修士課程修了。2007 年東北大学大学院教育情報学教育部 博士後期課程中退。博士（教育学）。京都大学，長崎大学を経て，2016 年 8 月から現職。日本教育社会学会理事。専門は，教育社会学。

ただ今御紹介いただきました木村と申します。私は九州大学では教育学部に所属しておりまして，一連の入試改革がどのように部局に下りてくるのかというのをひたすら待っている立場ですが，以前は，長崎大学と九州大学で 10 年ほどアドミッション・センターの仕事をしておりましたので，そういった経験も踏まえて幾つかコメントを述べさせていただきます。

■私はアドミッション・センターの教員の大事な仕事の一つは，大学入試に関する訴訟案件を防ぐことだと思っています。

まず，第一の観点はテスト理論の重要性についてです。川嶋先生と沖先生の話の中で，志願先の大学で受験するというのは世界でも珍しい，という意味でのガラパゴス化が指摘されました。が，逆に，私は，こうした入試改革のときに，テスト理論を踏まえた議論があまり多く見られないことも，一つのガラパゴス化だと思います。

もちろん，今日の大津先生の御発表の中でも記述式テストの識別力について統計

的な分析が紹介されていましたが，アメリカなどでは，数多くのテスト理論的な概念に基づいての議論がきちんとなされているのではないかと思います。

かく言う私も，全面的にテスト理論の観点のみから入試改革の議論をすべきだとは思いません。もちろん，各先生方が取り上げた制度設計とかスケジュールの問題とか，いろんなものを総合して議論すべきだと思いますが，そこからテスト理論だけが抜けていることには少々違和感を感じます。

テスト理論は，テストというものには誤差があって，その誤差をなるべく最小化するという発想，思想に基づく考え方だと個人的には理解しています。それが議論されない試験制度では，悪くすると誤差だらけで選抜結果の科学性が担保されないテストが生まれてしまうのではないかと思います。

自己採点の一致度というお話もありました。やっぱり記述式テストは客観式テストに比べれば，信頼性，つまり，解答の再現性が低下するというのは当たり前だろうと思います。なぜこんな話をするのかというと，アメリカでは，大規模共通テストにおけるテスト理論的な検証結果が，入試をめぐる裁判の重要な証拠資料になったりもしているからです。

川嶋先生もアメリカの入試における文脈的要因というお話をされていましたが，たとえば SAT についても民族/人種ごとの正答率がどう変化するのかということを，これはもう何十年にわたって ETS が毎年報告書を出しています。

高校の先生方は意外に思われるかもしれませんが，私はアドミッション・センターの教員の重要な仕事の一つは，大学入試に関する訴訟案件を防ぐことだと思っています。AO 入試であれ，総合的な評価であれ，きちんとした基準に基づいて評価をしていて，科学的な検証も済んでいるというような状況をいかに作り出し訴訟を未然に防ぐことが，あまり表立ってはいませんが，テスト研究を専門にしている人たちが，大学入試の舞台裏で秘儀としてやっていることだろうと思います。

■思考力，探求心，主体性等々いろいろなものを測るのは結構ですが，それを測る試験問題が安定して作成できるのかが重要です。

次に，テストの継続性，いかに長いこと永続的に続けていけるかということも大切な観点だと思います。本日の報告にもありました，記述式問題や思考力，判断力，表現力を問う設問についても，どこまで安定的に出題できるのかが一番の鍵になると思います。

戦後直後に GHQ の要請で始まった進学適性検査は，昭和 23 年から 29 年まで計 7 回行われました。日本の大学入試は民主的ではないから，知能テストを大学入試に取り入れましょうという改革です。当時は戦争中に勉強していなかったので，教科科目の受験勉強をせずに受けられる，知能を測ってくれる素晴らしいテストだ

とも言われました。しかし，この検査では一定の難易度の問題を安定的に作ることができませんでした。平均点が乱高下するような状態になってはなかなか共通テストとして使うことは難しいと思います。

その意味では今後，大学入試センターに期待することは，共通テストの各設問ごとの詳細な分析結果を大学に提供していただきたいということです。大学の側としては，そういう結果をもとに，自分の大学でこの共通テストが使えるものなのか使えないものなのかを早く判断したいと思います。

生データを頂くことは難しいかもしれませんが，各大学がいろんな形で大学入試センターと共同研究できればありがたいと思います。実際，共通 1 次試験の頃には，国立大学協会の主導の下に研究グループを作ったり，入試情報の交流のシステムを作ったりという歴史がございます。これがあって初めて，大学が入試改革に主体的に関わることができるのではないかなと思います。

試行調査の実施に関しては，各大学の入試課が県内の高校に声を掛けたり，まとめたりしていますけど，そういう貢献もさることながら，やはり調査の結果を分析し，各大学の入試にどういう影響があるのか知ることが非常に大事だと思います。こうした情報開示は是非センターの方に重ねてお願いをしたいと思います。

作題が安定しないときに何が起こるかを考えてみます。例えば昨今センター試験を資格試験的な扱い，センター試験の特定の教科・科目で何点以上とれれば出願可とするというような AO・推薦入試も行われるようになってきておりますが，こういう入試設計の場合，共通テストの難易度が不安定では困るわけです。50 点のボーダーを設定しているのに，急に 10 点とか 20 点の平均点が出たのでは，受験生は集まりません。大学にとっては死活問題なのです。

思考力，探求心，主体性等々いろいろなものを測るのは結構ですが，それを測る試験問題が安定して作成できるのかが重要です。平均点等が安定しなければ，得点調整だとか換算点だとかいう議論が出てくるでしょう。しかし，調整点や換算点というのは，やはり受験生が自己採点しにくいとか，換算表を作ってもなぜそう換算されるのかが分からない。あるいは説明してもらってもそれが納得できない。試験というのはやっぱり社会の納得性というものが必要ですから，根本的には作題が安定していることが，一番の肝なんじゃないかなと思います。

最後の観点は，入試改革の主体は誰なのかということです。新テストに対する期待度は，大学の教員よりも高校の先生の方がなぜか非常に高いような気がしています。大学の教員は，まだ新テストがどういう類いのものであって，どういう入試設計をしなければいけないのか，それほど詳しく知っているとは思えない状況です。

この温度差を，我々はどう理解すべきでしょう。昭和 38 年から昭和 43 年まで行われた能研テストでは，能力開発研究所という財団法人が設立され，そこが実施主体となりました。これがどうやら失敗の一番の原因であったとも言われています。大学側の理解を得られず，このテストを入試に使ったのは国立大学では長崎大学教育学部だけでした。ある教育出版社が能研テストの実施日に敢えて模試をぶつけて

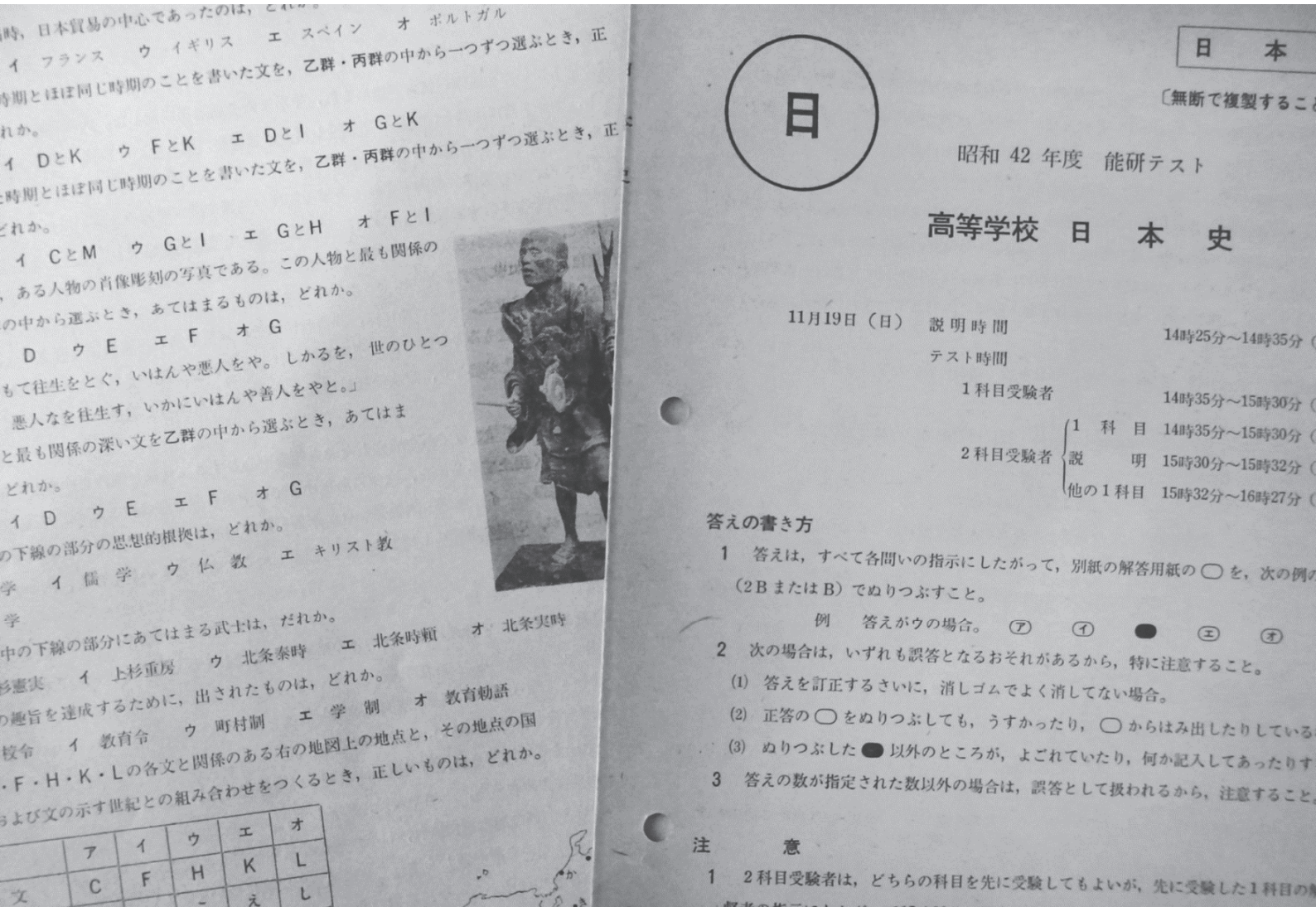
きたというようなこともありました。国際基督教大学では，1967 年度の入試に能研テストを利用しましたが，能研テストと大学の検定料が二重に発生するということで，学生の反対運動が起こり，長期の紛争となり学長が辞任するという事態になりました。

そういう歴史があったからこそ共通１次試験の導入に当たっては，国立大学協会を中心に慎重に議論して共通テストの枠組みを作っていったわけです。我々はこの歴史をやはりもう一度思い出すべきではないかと思います。

そうは言っても，一方で大学は改革に疲れています。入試改革は，スーパー・グローバルだとか指定国立大学制度だとかあまたある改革のなかの一つにすぎないとしか受け止められていないのではないかと思います。

今回の改革でも英語の４技能試験を民間の資格・検定試験に委託するようですが，経費を誰がどういう形で負担をするのか，それが適切なものなのかということが，制度設計する上で非常に重要になると思います。また，仮に，資格・検定試験を課すのは国立大学だけということになれば，それを課さない私立大学に大量に志願者を取られてしまうというようなことが起きるかもしれません。

大学入試制度改革という大きな改革を，意図せざる結果が起こり得るかもしれないということも意識して議論し，高校と大学が力を合わせて乗り切っていくことが期待されるのだろうと思います。以上です。



◎全体討論

【大塚/大学入試センター試験・研究統括官/司会】高校，大学，それぞれの視点で様々な論点が出てきました。各論点とも本来相当の時間をかけて議論しなければいけない内容なのですが，時間も限られておりますので，まず，御登壇の各先生方から，これまでの報告や指定討論から感ずるところを一言ずつ，御発言いただきたいと思います。川嶋先生からいかがでしょうか。

【川嶋/大阪大学高等教育・入試研究開発センター長】両先生，ありがとうございました。お二人の指定討論お聞きしていて，いくつか考えたところをお話ししたいと思います。まず，やはり経済的な背景や格差の問題は十分留意が必要だと思います。今回の高大接続改革の中でも，経済的な格差によって大学へ行く機会が損なわれるのではないかとか，英語の資格・検定試験の受験料負担がどうなのかとか，この格差については，いろいろなところで言われてはおりましたが，そういったことの解消が今回の高大接続改革の議論の大きな柱になっていたとは思えませんでした。

今回の高大接続改革は，今の高等学校教育と大学教育，そしてそれを取り結ぶ大学入試では，21 世紀後半を生きていく若者に必要な能力が身に付かないのではないかというところから議論が始まりました。それも確かに一つの重要

な政策の柱かもしれませんけれども，先ほどお話ししたように，例えば多くのアジア太平洋地域の国では，ソーシャル・インクルージョン，あるいは高等教育機会の拡大というところが高大接続改革の大きな柱の一つになっています。

韓国の入試改革が良い例です。塾，予備校，家庭教師などを認めてしまうと経済格差が教育格差につながってしまう，大学入試で評価するのはとにかく学校内での活動に限るということで，学校生活記録簿に書かれるのは学校内での活動の成果だけです。

■韓国の入試改革――大学入試で評価するのはとにかく学校内での活動に限るということで，学校生活記録簿に書かれるのは学校内での活動の成果だけです。――今日本では，逆に校内の活動だけではなく，課外の自主的な活動も，自主性や協働性を評価するための資料として活用しようと考えているわけです（川嶋）

今日本では，逆に校内の活動だけではなく，課外の自主的な活動も，自主性や協働性を評価するための資料として活用しようと考えているわけですが，高大接続改革において社会的な格差の問題や不平等をどう考えるかは重要な問題だと思います。

従来の機械的な平等の考え方ではなくて，いかに公正であるかが重要だという論も聞かれますが，やはり今日登壇された先生や，あるいはここのところ私が接してきた様々な方から格差のお話が出てくるところを見ると，非常に多くの方が懸念している重要な問題だろうと思います。

また，木村先生からは，共通テストの妥当性と信頼性をどう確保するのか。あるいはそういう議論をしているのかという御指摘がありました。これは何も共通テストの話だけではなくて，各大学の個別入試についても当然問われるわけですが，各大学ではそれに対応する人材がほとんどおりません。そういう点では今後，日本テスト学会や大学入試センターの研究開発部の御支援を是非お願いしたいと思っています。

【大塚】ありがとうございます。それでは，大杉さん，お願いします。

【大杉/大学入試センター審議役】宮本先生，木村先生，ありがとうございました。それでは，大きく４点についてお答えしたいと思います。

まず１点目は，宮本先生から御指摘いただいた，新テストの理念は大体浸透してきているが，具体的な課題をどう解決するのかという部分へのお答えになります。

幾つかございましたけれども，まず英語の成績提供システムあるいは自己採点についてです。大学入試センターが大学と受験生と民間団体をつなぐ成績提供システムを提供することになりますけれども，このシステムに民間団体が参入する場合の要件を 10 月中に明らかにします。

それと同時並行で，来年の 2 月の試行調査（プレテスト）で，センターが実施する英語の試験の在り方についても検証します。例えば，会話文で並び替えの問題が本当に必要なのかなど，いろいろな指摘がなされておりますので，改善しなければいけない点を明らかにしながら，大学による新テストの活用方法の議論とセットで情報提供をしていくということになろうかと思います。

また記述式問題の採点ですが，この採点自体は事前に条件を定めた類型採点ですので，それなりの時間と人数をかければできるわけですが，それを限られた短時間でやるためにはどうしたらいいかが課題です。これをまさに試行調査で検証するということになります。

また，一番御心配の自己採点です。正確な自己採点を行うためには，もちろん作問の工夫により正答の条件を明らかにしていくということ。それから，高校生や先生方に記述式の自己採点のやり方を周知するために，例えば，ホームページ上で方法を解説するなどということもしていかなければいけないなと思いました。

■過去の進学適性検査などを引き合いにだされた御意見も頂きました。確かにその当時のことも参考にしなければいけないと思いますが，――今の時代には何ができるのかということを最新の知恵を持ち寄って考えていくべきだろうと思います。（大杉）

2 点目ですが，テスト理論との関係についても御指摘いただきました。これは本当に御指摘のとおりで，11 月，2 月，それから来年度の試行調査に向けては，研究開発部と協力して結果の分析を手厚くやっていく予定です。

新テストの実施に当たっては，何を問いたいのかというねらいとともにテスト理論的な基礎を私たちはしっかりと持っていなければいけないと思います。テスト理論に基づいて新しいテストモデルが設計され，その成果がまた研究に反映されていくようなダイナミズムが常に視野になければいけないんだろうなと思います。ですから記述式の導入についても，テスト理論に基づく理論的な基盤について是非木村先生にも御協力をお願いしたいと思っています。

過去の進学適性検査などを引き合いにだされた御意見も頂きました。確かにその当時のことも参考にしなければいけないと思いますが，当時と現在を比較したとき，PISA の問題や学力テストの B 問題なども実施され，思考力に関する構造的な考え方が生まれてきていて，新しい作問のための方法も出てきてい

ます。そういう今の時代には何ができるのかということを最新の知恵を持ち寄って考えていくべきだろうと思います。

そして3点目は，新テストがどの層を主な対象とするのかということであります。大津先生からも記述式の導入で問題が難しくなるのではないかという分析もいただきましたが，新テストは，国立大学志望者だけをターゲットにしているわけではありません。今センター試験の受験者が国公立専願者と私立併願者と私立専願者とどこにも出願しない者でおおよそ4分の1ずつになっていますが，そういう状況は，恐らくそんなに大きくは変わらないと考えなければいけないと思います。

実は，今年11月の試行調査の試作問題は作問のねらいの試行を優先して難しい問題になることは予想されるわけですけれども，実際の試験に向けては，難易度の調整を図る必要があるだろうと思います。まさにそのためにこそ試行調査を行うわけです。

大学側からは，高校で育てた力を全部受け止めてくれと言われているように感ずるかもしれませんが，あくまで大学教育の基礎力として何が必要かを見るのが入試であることは変わりません。そこを考えると，大学教育の基礎力として共通に何が必要なのかを見極めることが必要になります。どんな分野に行くにしても言語の力や数学的な処理の力は必要なんじゃないかという声もあれば，どれでも1科目でいいよという入試もあります。あるいは古典，漢文の素養はもうなくていいというようなお考えもあるわけです。本当に大学の基礎力としてそれでいいのかどうかという観点からも議論が展開されていく必要があるのではないかなと思いました。

4点目として，沖先生から身体に障害のある受験者への配慮のお話もありました。2月には点字問題を含めいろいろな受験上の配慮についても検証をさせていただきます。今回理解や思考力を問うということで写真や図が多い問題に，視覚障害のある方がどういうふうにアプローチしていけるのかなども，検証したいと考えています。

【大塚】ありがとうございます。私は試験研究・統括官という立場でセンター試験の問題作成を統括していますが，センター試験の場合には共通1次試験からの40年という積み重ねの上にそれなりのレールができていますから，比較的毎年淡々とやってこれているんですけど，新テストについてはそのレールが全くありませんから，様々な立場の方々からいろいろな課題が突き付けられます。大杉さんの大変さは実感的に非常によく分かります。

それでは，次に大津さん，研究開発についても話題になりましたが，いかがですか。

【大津/大学入試センター研究開発部長】テスト理論というのは，基本的にはテス

トの品質管理のために開発された統計的なテクニックの体系であり，人間の思考のプロセスやファクターには特に踏み込みません。一定の難しさの問題を安定して供給するための手法として開発されたものです。

■実はセンター試験の品質管理は，専ら作題委員の先生方のある種職人芸のようなところに完全に依存していて，大学入試センターではテスト理論に基づく統計的なコントロールはほとんどやっていません。（大津）

実はセンター試験の品質管理は，専ら作題委員の先生方のある種職人芸のようなところに完全に依存していて，大学入試センターではテスト理論に基づく統計的なコントロールはほとんどやっていません。10 年に 1 度ぐらい科目平均点に大きな差が生じたときに，得点調整という統計的な操作を行いますが，これまでのセンター内の議論では，得点調整にはあまり積極的ではなく，できればやらない方がいいという意見が主流でした。しかし，私自身は将来的には，得点差の有無にかかわらず，素点を統計的に加工した指標を提供する方向に向かわざるを得ないのではないかと思っています。例えば TOEFL や TOEIC などの点数も，皆そのように加工された値です。

毎年の試験で，現場として非常に気にしているのも，まさにこの選択科目間の得点の差の問題です。何らかの形でシステマチックに安定した成績情報を提供できればなあと思っています。

それからもう一つは，共通 1 次試験が始まったのは 1979 年です。センター試験に代わったのは 1990 年です。当時の現役高校生，つまり高校 3 年生のセンター試験の受験率は 15%でした。今は高校 3 年生の 42～43%が受けていますから，この 20～30 年の間にセンター試験の位置付けが非常に変わっているわけです。しかしながら，問題がいくぶん平易になっているところはありますけれども，制度全体のスキームはほとんど変わっていない。科目は増えましたけど，年に 1 回一つの試験をやるというスタイルは変わらない。しかし，そういう制度の維持がだんだん難しくなってきているのかなとも思います。

高大接続の議論でも，当初は二つのテストの利用という議論がありましたが，結局は大学入試に使うのは大学入学共通テストだけのようなことになりつつありますが，近い将来はやっぱりもう一度考え直さなきゃいけない課題となることは確実だと思います。

【大塚】大学入試センターの研究開発部は現在十数人です。日本の中ではかなり優遇されているように見えますが，アメリカの ETS などのように 1,000 人規模の研究者でやっているところには太刀打ちできません。ですから日本の一つの

課題は，研究者の共同研究やコンソーシアムなどをいかに組織していくかという辺りにあるのかなと思います。現在センターは，全国大学入学者選抜研究連絡協議会という組織を運営し，年に 1 度大会を開いたりしていますが，そこを通じた連携の在り方についてもこれから探っていこうとしているところです。それでは沖先生，お願いいたします。

■大学入試センターの研究開発部は現在十数人です。日本の中ではかなり優遇されているように見えますが，アメリカの ETS などのように 1,000 人規模の研究者でやっているところには太刀打ちできません。（大塚）

【沖/早稲田大学入学センター副センター長】率直に申し上げれば，現時点で全ての私立大学が大学入学者選抜改革について非常に熱心に議論しているわけではありません。大学の中でも，入試業務に関っている先生方にとっては相当リアルな課題ですけれども，そうではない方にとっては他人ごとかもしれません。やはり，議論がメディアだけではなくて各大学の中で共有されていくことが大事だと思います。

その上で，私から申し上げたいのは，先ほどの宮本先生から，提出書類が非常に増えて高校現場が混乱するというお話がありましたが，我々も本当にまずいことだなと思っています。特に本学は 13 学部あって併願も多い。同じ大学を受けているのに，同じ書類を，学部ごとに異なるバージョンで出させるということになりかねません。高校側に過剰な負担をかけないように全学的な書類の統一を考えなければいけないと思っています。正にこの 1〜2 年できちんと議論して提示しなければいけないことだと思います。

格差の問題は本当にリアルな問題だと思います。一私大はもとより，私学団体であったとしても，何かすぐに手が打てるわけではありませんけれども，重要な問題だと思います。

また，障害を持っている方に対する配慮については，現在のセンター試験は相当進んでいますし，ある意味一つの基準になっていると思います。私立大学もセンター試験で行われているような配慮をしないと，受験生側からクレームが来るという状況です。今後資格・検定試験が入ってきますので，どういう対応ができるのかが課題かなと思います。

最後に，先ほど得点調整の話も出てきましたが，恐らく多くの私立大学は今もう既に当たり前のように，センター試験については選択科目間に難易度差があっても得点調整はしないこととしています。一方で本学でも一般入試の日の夕方以降，2〜3 週間はクレーム電話の対応に追われています。問題の納得性ということについて，非常に注意を払わなくちゃいけないことだと理解してお

りますが，そうすると，本学では毎年 13 学部分の誰もが納得するような問題を作らなければならないわけです。そういう状況に私立大学はどこまで耐えられるのか。ガラパゴス的な入試はいずれ何十年もたてば自然に終わってしまうのでしょうが，難しいのはそれまでの何年間をどうするのかです。

ただ，繰り返しになりますけれども，現在，共通テストで想定されているレベルで，本当に全ての高卒者に対応できるかについては，私は相当懐疑的です。高校段階の学力を担保する何らかの工夫が必要だと思います。イギリスの GCSE や GCE のように，選抜ではなく学力段階をサーティフィケートするような仕組みが必要かもしれません。今は全く消えていますけれども，当初はこの新テストの議論においても学力を段階別で評価するなどということが言われていたと思います。

現実には，1 点刻みの点数が出ないと志願者の多い大学では選抜ができないということがあるので，そんなに簡単に素点評価をなくするのは難しいと思いますが，将来は，段階別評価で，ある段階に達していれば出願できるというような方法も，一つのモデルなのではないかなと思います。

■往々にして共通試験の方のみで全ての課題を解決しようという傾向を感じたりもしますので，共通試験と個別試験の役割分担などもきちんと考えられればなと思います（大塚）

【大塚】本当に的確に今の高大接続の論点を整理していただきました。特に共通試験と個別試験の組合せをどう考えていくかということは，重要な観点だと思います。往々にして共通試験の方のみで全ての課題を解決しようという傾向を感じたりもしますので，共通試験と個別試験の役割分担などもきちんと考えられればなと思いますし。

それからまた受験者層の多様化にどう対応するのかは必ず大きな課題になっていくのだろうと思います。

思考力を問う問題，考えさせる問題となりますと，今の 60 分という時間でどこまで測れるのかという課題が出てくるわけです。それを試験問題の内容だけでクリアしようというのは相当難しいことで，60 分という枠組みが変わればかなり柔軟に対応できると思います。

川嶋先生からは，もっと大きな話で，秋入学という案も出ていましたが，記述式の採点などを考えると，秋まではいかなくても，ゴールデン・ウイーク明けの 5 月入学にしたらどうかと，私などは思ったりもします。川島先生そのあたりはどうですか。

【川嶋】5 月か 9 月かは別として，宮本先生からも御指摘がありましたけど，今の

カレンダーを固定したままで新しいことをやるのはやっぱり無理があります。100年に一度の大改革ということであれば，本来は高大接続特別部会で，ゼロベースで日本の学校教育や入試を見直すぐらいの議論が欲しかったなと思います。

入試全体の話になると，御承知のように18歳人口が急激に減ってきて，中教審のシミュレーションによると，今のまま定員が変わらず，進学率も変わらなければ，20年後，30年後にはどの都道府県でも定員充足率は80%になってしまうようです。となると，「選抜」などと言ってられないですよね。文字どおり「アドミッション」ということで，うちの大学はこういう学生を求めています。こういう条件でよければ来てくださいという話にならざるを得ません。

ですから先ほどお話しした学力の資格という話も，そういう意味では必要な考え方になってくるんだろうと思います。今回の改革はあくまでも日本の教育改革の第一歩だというぐらいの大きくかつ長期的な観点で，入学者選抜も変えていくというようなことが必要かなと思います。

【大塚】ありがとうございます。入学者選抜から資格試験的に，これも一つの制度改革ですけれども，そうなるとまた段階表示などの意味も出てくるということかもしれません。今の時点では段階表示と言われても，沖先生おっしゃられたように苦しいところがあるんだろうなと思います。宮本先生，4名の方の発言を受けて，何かお気付きの点はありますか。

【宮本/東京都立西高等学校長】大学入学共通テストについては，試行調査を通じて改善できる点については，すみやかに改善をお願いしたいと思います。

■今般の入学者選抜改革の主体は――大学が主体だということであれば，共通テストと大学というのはある意味緊張関係にならざるを得ないという気がします。（木村）

【大塚】木村さん，どうですか。

【木村/九州大学大学院人間環境学研究院准教授】やはり，私は今般の入学者選抜改革の主体は誰なのかということが気になります。大学が主体だということであれば，共通テストと大学というのはある意味緊張関係にならざるを得ないという気がします。志願者の全てが大学入学共通テストを受験しなければいけないという理由はどこにもないわけで，それをどうやって担保するかについての議論をどこかでするべきなのだろうと思います。

【大塚】ありがとうございます。「大学入学共通テスト」になりましても，「大学が共同して実施する」試験という性格については今のセンター試験と同じ文言が使われておりますので，大学が実施主体であるように読めますけれども，そのように書かれていることと実際がどう対応しているのかというあたりは検証する必要があるだろうと思います。

【木村】大学側がどのように大学入学共通テストの結果を使うのかというボールだけが投げられている状況で，やっぱり，いろんなパターンが出てくるのではないかなと思います

【大塚】さて，フロアから質問票がたくさん来ていますけれども，山地さん，どうですか。

■大学入学共通テストの実施主体はあくまでも参加大学であり，——どういう科目についての試験をするのかは，センターが決めることではありません。（山地）

【山地/大学入試センター試験・研究副統括官/司会】フロアの皆さん。たくさんの質問をありがとうございました。

大学入試センターに対する質問も多いのですが，実はその多くはセンターの立場ではお答えできない質問のようです。例えば，平成 36 年度以降の新学習指導要領対応の共通試験はどのような科目を出題するのか。「歴史総合」などという新しい科目はどうするのか。高大接続システム改革会議の最終答申では出題科目を減らすんだということが書かれているが，本当にそういうことができるのかというような質問を何件かいただきました。

こういう質問がセンターではお答えできない質問です。大学入学共通テストの実施主体はあくまでも参加大学であり，センターは実施に関する業務のうちの試験問題の作成等の業務をやるというふうな規定になっていますので，どういう科目についての試験をするのかは，センターが決めることではありません。

そういうお断りの上で，質問は大きく 3 種類に分かれていまして，一つは記述式の問題を巡るもの。二つ目は英語の資格・検定試験の活用に関わるもの。それから，三つ目は多面的・総合的評価ということについて，特にアドミッション・ポリシーとの関係でどういうふうにそれを解釈するんだということです。

まず宮本先生にお聞きしたいのですが，新テストで導入される記述式問題は，高等学校の授業内容によい影響を与えるでしょうか。

【宮本】公表された記述式問題について言えば，国語の問題でこういうことも問え

るんだ，こういう問い方があるんだというメッセージになっていて，国語科の教員の国語という教科についての認識を振り返るよい機会にはなったのかなと思います。もちろん，いろんな制約の中で出題しているわけですから，記述式の問題としてあれが完璧かといえばそうではないでしょう。本来はもっと時間をかけて，もっと長い字数でやればもっと問えると思うんですけれども，限られた条件の中であれば，今よりは半歩前進じゃないのかなと思います。

【山地】半歩前進だとお感じだということです。それでは，記述式問題の自己採点の問題です。やはり，本番に向けてかなり細かく，自己採点の基準や方法を説明する必要があるのか思いますが。特に国語については，どの程度細かい採点基準を出せば自己採点との一致率が高まるのか，これは大杉さんからお答えいただきましょう。

【大杉】採点基準というのがいろんなレベルがあるんですけれども，今回のこの類型採点ということを前提にして言えば，正答の条件は形式的な条件と，内容的な条件の二つに分かれます。

形式的な方は，例えば文字数，あるいはその文章の数で，内容的な条件はその問いに応じたものが複数あるということになってきます。自己採点の一致率も含めていろんな検証を今度の試行調査でやるわけですけれども，それを通じて正答の条件の数の在り方などもある程度決めていかなければいけないなと思います。

正答の条件が10も20もあるようでは，それは採点の視点が定まりませんし，自己採点も難しくなりますので，形式的条件，内容的条件，それぞれ幾つくらいが適当か，それは翻って作問の在り方にも反映されます。

試験は，正答の条件を隠して行われるわけではなくて，問いの中に正答の条件が埋め込まれているわけです。こういう条件で言語活動をしてくださいと。それに沿ってチェックするという意味では，正答の条件の設定と，作問とは表裏一体のものになってきます。作問をちゃんと構造化していけば正答の条件になるんですけれども，問いから正答の条件を見極めることを受験生に任せるというのもちょっと難しいと思いますので，恐らくは，テストの実施後に正答条件を示して，幾つ当てはまっていましたかということで自己採点してもらう，なるべくシンプルにできるように分かりやすい解説をしていきたいなと思います。

それとは別に，大学入試センターの方ではこの正答条件による採点のマニュアルを作っていくことになると思います。いずれにしてもそういう採点がどういうプロセスで行われるのか，まだ見えてこないところもありますので，11月の試行調査を通じて検討していくことになると思っています。

【山地】ありがとうございます。続けて大杉さんへの質問です。試行調査の結果はどういう形で公表されるのかというお尋ねです。各大学に通知されるのでしょうか。

【大杉】結果は大学だけではなく広く一般に公表します。恐らく記者会見をさせていただきますので，新聞等で取り上げていただければありがたいなと思います。大学入試センターのホームページにも当然掲載します。御協力をいただいた高校には個々の採点結果をお返しをしたいと思います。

恐らくこういう情報提供は順次になると思います。まずはどういう問題を出しましたということです。その際には速報値の正答率ぐらいは付けたいなと思っていますけれども，全ての最終値は難しいと思うんですが，なるべく速やかに発表させていただき，そのあとで，研究開発部や科目の専門チームによる様々な分析を公表させていただく。そして，そこからいろんな関係団体と調整をしながら，恐らく文部科学省として決めなければいけないこと，センターとして決めなければいけないことの公表が続くという流れかなと思っております。

【山地】ありがとうございます。さてここからは英語の話です。利用する資格・検定試験の決定はいつ頃になるのかという質問です。

【大杉】あくまで見込みですけれども，先ほど申し上げたように 10 月中にそのシステムに参加するための要件を発表します。なるべく全ての地域でやってくださいですとか，あまり高額な受験料にならないようにというような幾つかの基準を，できれば 10 月いっぱいにはお示ししたいと思います。それから募集を始めまして，審査をして，特に指導要領との整合性ですとか，CEFR との整合性などのチェックも経て，できれば年度内には資格・検定試験の認定結果を公表できたらいいなと思っております。

【山地】ありがとうございます。英語についてちょっと突っ込んだ質問が来ています。川嶋先生，資格・認定試験の成績は，今のところ CEFR によってランク分けをするという方向です。そうすると，志願者の成績は下のつまり A1，A2，B1 あたりに集中することが考えられますが，どういうふうに使えるだろうかという質問です。あるいは，何か具体的に大学の方で計画されている使い方があるのかというようなことですけれども，いかがでしょうか。

【川嶋】まだ，どういう試験団体が参加するのかなど，判断材料が非常に限られている状況ですので，今後どうやって使っていくのかということについてはここではあはまり言えないんですけれども，既に活用されている大学は幾つかあり

ます。それを見ますと出願資格として使うという例もありますし， CEFR の段階に応じて加点に使ったり，あるいは B2 以上だと英語の試験はみなし満点にしますというように，いろいろな使い方がされておりますので，実際にはそういう使い方になるんだろうなと思います。ただ，おっしゃるとおり受験者の成績は，A2，B1 あたりに集中しそうですから，選抜材料にするというのはなかなか難しいのかなというのが，今のところの感想です。

【山地】沖先生，早稲田大学では，何か具体的に計画があるとか，現在こういうふうに使われているということはありますでしょうか。

【沖】今年の春の入試から文学部と文化構想学部で，幾つかの資格・検定試験の成績を出願資格にした入試をやっています。この方式の味噌は，一般入試と併願ができるということです。資格・検定試験利用の「一般入試（英語 4 技能テスト利用型）」で不合格になっても，一般入試の英語も受験していれば，一般入試にもエントリーできるということです。また，国際教養学部では，一般入試の英語の 100 点のうちの 15 点を資格･検定試験分に充当し，その成績により，5 点，10 点，15 点という段階で加点するという方法も導入しています。

実は，この方法で，文学部，文化構想学部に入学した学生は，非常に優秀で，他の 2 教科も相当できました。逆に，我々が提供している，入学後の教育プログラムのレベルがもうちょっと高くないと彼らに対応しきれないということが判明し，至急カリキュラム改革が必要になっているような状況です。

ただ，いずれにしましても，今のところは個別大学でやっている方法が，他大学でも通用するのかということについては，また次元が違う議論なのかなと，思っています。

■今回の改革の趣旨を考えると，３要素をどのぐらいの割合で配分するかについての大学の裁量は当然認められるべきだろうとも思います。（沖）

【山地】ありがとうございます。次に，多面的・総合的評価に関わるんですが，これも沖先生に質問が集中していまして，これは恐らく沖先生が講演の中で，「共通テストのみ」という入試はもうできないんだ，学力の 3 要素全部を測っていないじゃないかということをおっしゃったからだろうと思います。つまり，そういうみなし方は早稲田大学の解釈なのか，あるいは 2016 年 3 月に出た 3 ポリシーのガイドラインで全ての選抜類型で学力の 3 要素全てを測ることを求めているのか，この辺はいかがでしょうか。

【沖】実は，その解釈はずっと文部科学省にもお尋ねしてるんですが，なかなか返事が返ってきません。ただ，ガイドラインの記述を行政文書として読む限りは，本来どの入試であっても 3 要素を見るものと言っているように思えます。しかし，今回の改革の趣旨を考えると，3 要素をどのぐらいの割合で配分するかについての大学の裁量は当然認められるべきだろうとも思います。

ただし，その割合がどのぐらいであるのかが問題です。先ほど川嶋先生と雑談めいたお話をしたんですが，あるいはこういう考え方はできるのかということです。つまり，アドミッション・ポリシーに明記すれば，主体性や協調性は問わない入試もできるのではないかということです。

そのポリシーをなんら表明せずに黙ってそれをやるのは論外でしょう。それでは単に，その大学は今回の改革に背をむけますよということになってしまいます。しかし，逆に公然とアドミッション・ポリシーの中にそれを書き込める自信のある大学は，あえて学力のみで選抜をするということもあり得るんだろうと思います。

その結果として，一時的には受験者が集中するかもしれませんけれども，そういう層が集まった場合の，教育上のリスクは当然ありますので，そのリスクを負える大学だけがやればよいという話だろうと思います。以上です。

【山地】これまでの歴史を振り返っても調査書を活用すべきだという議論は何度も繰り返されてきたわけですけれども，一般選抜で学力の 3 要素を見なければならないとなると，調査書はどう活用できるのかという質問です。何千人，何万人という調査書を具体的にどうすれば活用できるのか。何か方法はありますか。

【木村】例えば私の所属する教育学部は 50 人が定員なので，調査書の数という点で言えば，見ることができない数ではありません。実際にどう見てますよ，見てませんよという話はここではできませんが，やはり調査書というのは，それを基に面接をしたりする重要な資料ですし，志望理由書とともに，その学生がどういうふうな観点で高校生活を過ごしてきたかが，AO 入試や推薦入試では特に問われてきています。大学によっても差があるとおもいますが，アドミッション・オフィサーが多数配属されている大学は，きちんとやっていると思います。

ただし，一般入試の方になると，国立の場合特に後期は欠席する学生もたくさんいますし，やっぱり AO 入試や推薦入試の方が調査書をしっかり見ているのではないかと思います。

【山地】沖先生，私立大学ではどうですか。

【沖】率直に申し上げて，内申書を，事前に読むのは現在はほとんど不可能です。

高校の先生方に申し訳ないことですが，我々のところでは，どちらかというと合格した後に使わせていただいているのが現状です。今後どうするかについても，非常に悩んでいます。

実は今出願締切りから一般入試の受験票発送までには数日しかないという極めてタイトな状況で，なおかつ試験まで２週間もありません。一部の大学は志願者が１万人を超えてますので，限られた人数できちんと事前に調査書を見て，場合によってはそれこそ主体性や協調性を見るような評価ができるかというと，率直に言うと相当難しいというより無理だと思います。

今後は書類の共通化などを考えないと，この話は埒が明かないと思います。主体性，協調性を測るものとして，調査書を使うというのであれば，どこかできちんと提出の時期や方法についても検討しなければいけないと思います。私は，デジタル化が進まないとこの手の話は全然進まないだろうし，その上で何ができるかが，課題になると思っています。

■限られた人数できちんと事前に調査書を見て，場合によってはそれこそ主体性や協調性を見るような評価ができるかというと，率直に言うと相当難しいというより無理だと思います。（沖）

【山地】最後に，フロアとのやりとりをと思っていたのですが，時間がなくなってしまいました。フロアに，今回御後援をいただいております文部科学省の三浦大学振興課長と日本テスト学会の南風原副理事がいらしているので，よろしければ何かこれまでの議論について，コメントをお願いしたいと思います。無茶振りは承知ですが，三浦課長いかがでしょうか。

【三浦】今日は特に今回の入試改革についての関係者の皆様の御懸念ですとか課題が，またあらためて浮き彫りになったいいシンポジウムだったと，私自身強く感じました。行政としては，壇上の先生方をはじめ関係者の方々の御協力を得ながらそういった御懸念がゼロになるように努め，良い制度にしていきたいと考えています。

【山地】南風原先生，いかがでしょうか。

【南風原】いろんな課題が浮かびますが，まず，沖先生の入試において学力の３要素を見ることに苦慮されているというお話を聞いて非常に真面目だなと思いました。学力の３要素などということは，これまで大学側からは一言も提言していないんです。特に，三つ目の主体的に学習に取り組む態度まで測ろうと四苦八苦されているようですが，もとより，アドミッション・ポリシーについて

は，もっと我々大学が主体的に考えていいんだろうと思うんです。大学の入試なのですから，大学がもっと主体性を持って高等学校と話し合って，必要があれば文部科学省とも話し合って進めていくべきだろうというのが一番の感想です。

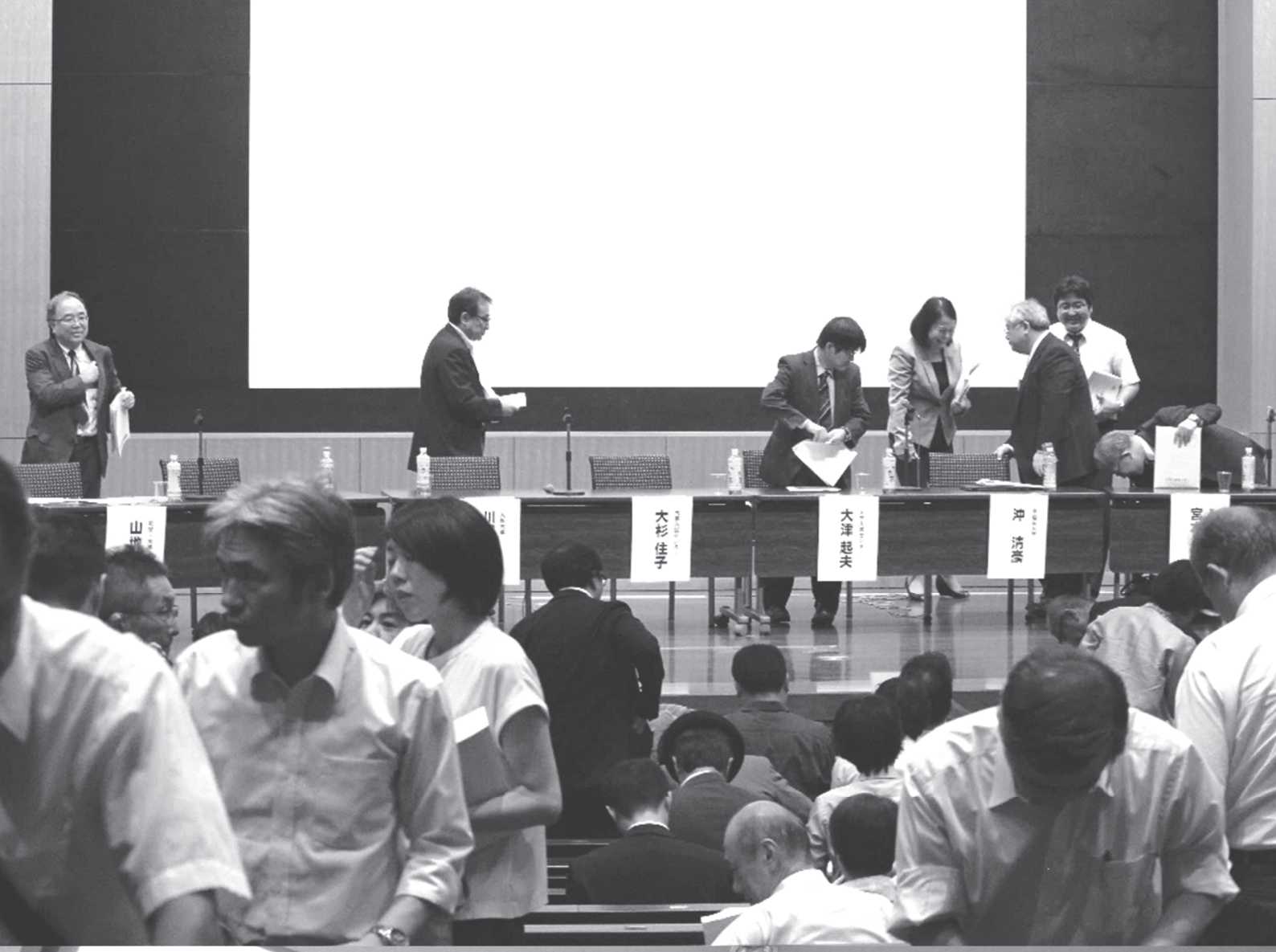
私の周辺でも，いろんなことをいったい誰が決めているんだろうという声がボソボソっとつぶやかれています。例えば数年後にセンター試験の英語がなくなるという話。校長会会長の宮本先生はなくさないでほしいとおっしゃる。大学も結構重宝しているらしい。しかしどうやら，やめる方向で進んでいる。皆さん，そういうことは，本来はどこの誰が決めることなんでしょうか。どうにも，はっきりしません。その辺の仕組み，非常に大事なことがどうやって決まっていくのか，ウオッチしていきたいなと思います。以上です。テスト学会としてではなく私個人の見解です。

【山地】ありがとうございます。最後に大学入試センター理事の浅田和伸より閉会の御挨拶を申し上げます。

【浅田/大学入試センター理事】御登壇いただいた先生方，会場の皆様方，本日は本当にありがとうございました。壇上での発表や討論をお聞きし，また，会場の皆様から頂いた御質問にも全て目を通させていただきましたが，幅広い視点から議論を深めるよい機会になったのではないかと思いました。

様々な課題はございますが，大学入試センターといたしましては今日の成果も生かして，高大接続改革の大きな狙いの実現に向けて，関係者の御協力を得ながら取り組んでまいりたいと思います。今後とも是非御協力をくださいますようによろしくお願いいたします。以上をもちまして，今回のシンポジウムを閉会いたします。

沖 清豪
宮本 久也
木村 祐也


大杉 住子
大津 起夫

アンケート
に御協力ください。

質問票
回收箱
質問票
回收箱
質問票
回收箱

大学入試センター・シンポジウム◉ 2017

プ ロ グ ラ ム

○ テーマ：大学入学者選抜の新展開 ── 新共通テストの課題と個別選抜改革の方向性
○ 日　時：平成 29 年 9 月 24 日（日）13:00～17:45　（開場 12:30）
○ 場　所：一橋大学一橋講堂（東京都千代田区）
○ 主　催：独立行政法人大学入試センター
○ 後　援：文部科学省，日本テスト学会

〔総合司会〕山地 弘起（大学入試センター試験・研究副統括官）

13:00～13:10	開会挨拶	山本 廣基（大学入試センター理事長）
13:10～14:10	基調講演	**◎入試改革の世界的状況と日本の課題** 川嶋 太津夫 （大阪大学高等教育・入試研究開発センター長）
14:10～14:20	質疑応答	
14:20～14:30	〔休 憩〕	
14:30～15:00	報告 **1**	**◎新共通テストの概要と課題** 大杉 住子（大学入試センター審議役）
15:00～15:30	報告 **2**	**◎モニター調査の内容と結果** 大津 起夫（大学入試センター研究開発部長）
15:30～16:00	報告 **3**	**◎共通試験の役割と個別選抜改革** 沖　清豪（早稲田大学入学センター副センター長）
16:00～16:10	〔休 憩〕	
16:10～16:20	指定討論①	宮本 久也（東京都立西高等学校長）
16:20～16:30	指定討論②	木村 拓也（九州大学大学院人間環境学研究院准教授）
16:30～17:40	全体討論	川嶋 太津夫・大杉 住子・大津 起夫・沖 清豪・宮本 久也・木村 拓也・大塚 雄作（司会/大学入試センター試験・研究統括官）
17:40～17:45	閉会挨拶	浅田 和伸（大学入試センター理事）

参加者集計結果

大学入試センター・シンポジウム 2017 の参加者の集計結果は以下のとおり。（大学入試センター教職員を除く。）

○参加者数　　427 人（昨年 200 人）

○内　訳

		教員・研究員	事務職員	その他（注 2）	計	（昨年度）
大　　学		103 人	164 人	5 人	272 人 (64%)	107 人 (54%)
	国立	48 人	34 人	2 人	84 人	52 人
	公立	16 人	22 人	2 人	40 人	18 人
	私立	39 人	108 人	1 人	148 人	37 人
高等学校		64 人	2 人	2 人	68 人 (16%)	7 人 (4%)
その他（注 1）		14 人	18 人	55 人	87 人 (20%)	86 人 (43%)
計		181 人 (42%)	184 人 (43%)	62 人 (15%)	427 人 (100%)	200 人 (100%)
（昨年度）		101 人 (50.5%)	86 人 (43%)	13 人 (6.5%)	200 人 (100%)	

（注１）　教育情報産業，マスコミ，無所属の個人等
（注２）　役員，無所属の個人等

アンケート集計結果

大学入試センター・シンポジウム 2017 について実施したアンケート調査の集計結果は以下のとおり。

○　シンポジウム出席者　427 人　アンケート回答者　　122 人（回収率　29%）

1 あなたのお立場についてお答えください。

① 性別

男	女	未記入	計
93 人 76.3%	22 人 18.0%	7 人 5.7%	122 人 100.0%

② 年齢

～29 歳	30～39 歳	40～49 歳	50～59 歳	60 歳～	未記入	計
3 人 2.5%	9 人 7.4%	20 人 16.4%	42 人 34.4%	38 人 31.1%	10 人 8.2%	122 人 100.0%

③ 所属　④ 職種

	教員・研究員	事務職員	その他	未記入	計
1　国公立大学	16 人	13 人	1 人	0 人	30 人
2　私立大学	8 人	36 人	0 人	1 人	45 人
3　国公立高校	23 人	0 人	0 人	0 人	23 人
4　私立高校	1 人	0 人	0 人	0 人	1 人
5　塾・予備校関係	1 人	2 人	0 人	0 人	3 人
6　民間企業	0 人	1 人	5 人	1 人	7 人
7　マスコミ関係	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人
8　省庁・役所等	2 人	1 人	0 人	0 人	3 人
9　その他	2 人	0 人	1 人	0 人	3 人
10　（未記入）	0 人	0 人	1 人	6 人	7 人
計	53 人	53 人	8 人	8 人	122 人

2 本シンポジウムが開催されることについて，何を見て知りましたか。（複数回答可）

センターから大学等に配布したチラシ	センターから大学等へのメール	センターホームページ	その他	未記入
43 人	45 人	26 人	15 人	6 人

3 本シンポジウムについての感想を 4 段階で評定してください。　※括弧は昨年度の調査結果

	4 当てはまる	3 やや当てはまる	2 あまり当てはまらない	1 当てはまらない	未記入	計
①　分かりやすかった	44 人 36.1% (24.1%)	61 人 50.0% (65.2%)	11 人 9.0% (9.8%)	0 人 0.0% (0.0%)	6 人 4.9% (0.9%)	122 人 100.0% (100%)
② 新たな発見があった	45 人 36.9% (59.9%)	56 人 45.9% (36.6%)	13 人 10.7% (2.7%)	2 人 1.6% (0.0%)	6 人 4.9% (0.9%)	122 人 100.0% (100.0%)
③ 興味深かった	52 人 42.6% (58.9%)	53 人 43.5% (34.8%)	10 人 8.2% (5.4%)	0 人 0.0% (0.0%)	7 人 5.7% (1.8%)	122 人 100.0% (100.0%)
④ 構成は適切であった	38 人 31.1% (36.6%)	59 人 48.4% (45.5%)	15 人 12.3% (16.1%)	3 人 2.5% (0.0%)	7 人 5.7% (1.8%)	122 人 100.0% (100.0%)
⑤ 有益であると思った	49 人 40.2% (44.6%)	60 人 49.2% (43.8%)	5 人 4.1% (9.8%)	0 人 0.0% (0.0%)	8 人 6.5% (1.8%)	122 人 100.0% (100.0%)
⑥ 集中して参加できた	40 人 32.9% (31.3%)	67 人 54.9% (53.6%)	7 人 5.7% (13.4%)	2 人 1.6% (0.0%)	6 人 4.9% (1.8%)	122 人 100.0% (100.0%)
⑦ 時間の長さは適当であった	32 人 26.2% (29.5%)	60 人 49.2% (47.3%)	19 人 15.6% (20.5%)	5 人 4.1% (1.8%)	6 人 4.9% (0.9%)	122 人 100.0% (100.0%)
⑧ 開催日時は適切であった	37 人 30.4% (42.9%)	53 人 43.4% (51.8%)	21 人 17.2% (4.5%)	5 人 4.1% (0.0%)	6 人 4.9% (0.9%)	122 人 100.0% (100.0%)
⑨ テーマはよかった	67 人 54.9% (60.7%)	43 人 35.3% (32.1%)	3 人 2.5% (5.4%)	2 人 1.6% (0.9%)	7 人 5.7% (0.9%)	122 人 100.0% (100.0%)

⑩ シンポジウム会場はよかった	49 人 40.2% (49.1%)	41 人 33.6% (39.3%)	19 人 15.6% (10.7%)	5 人 4.1% (0.0%)	8 人 6.5% (0.9%)	122 人 100.0% (100.0%)
⑪ 受付・案内など運営面は適切であった	67 人 54.9%	42 人 34.5%	5 人 4.1%	1 人 0.8%	7 人 5.7%	122 人 100.0%
⑫ 総合的に満足できた	46 人 37.8% (46.4%)	57 人 46.7% (47.3%)	11 人 9.0% (4.5%)	1 人 0.8% (0.0%)	7 人 5.7% (1.8%)	122 人 100.0% (100.0%)

4 本シンポジウムについての御意見・御要望，特に印象に残った点・疑問に感じた点，大学入試改革についてのお考えなどがございましたら，御自由に御記入ください。
（注：以下は自由記述の主な意見等を事項別に分類したもの。）

【高大接続改革について】

○今後のプレテスト等で完成度を高めていければと感じました。（省庁・役所等，教員・研究員）

○大学入試改革の進捗状況について，こまめに発信してほしい。（誰が主体となるかわからないが。）（国公立高校，教員・研究員）

○高校の校長です。いち早く情報を手に入れ，来る改革に備えようと思いますが，現実的に未確定の部分が多く，困っています。中学 3 年生保護者からは，強い関心が寄せられ，心配の声が上がっています。改革の理念，もともとの改革のねらいから，徐々にそれているような気もしています。私立大学を含め，協力しながら検討していかないと，失敗するのではないかと思っています。（国公立高校，教員・研究員）

○共通テストを含め，要求される学力の難易度が高くなっていると思う。学力の二極化は今後加速していくのでは？　かつては，センター試験に代わるものは到達度テストで良いのではという議論があったかと思うが，選抜テストに特化していく気がする。（民間企業，未記入）

○現在の大学入試センター試験実施のために様々な改良に取り組んでこられた大学入試センターですが，高大教育接続改革進展のための一ツールとしての全国テスト，つまり大学入学共通テストの実施についてご苦労されていることを実感します。中教審の答申の一部として大学入試センター試験にリスニングテストが導入され，現在の実施が維持されているのですが，また同じような取り組みが新たに始まるのであろうと感じています。

　ただ，早稲田大学の沖先生も言っておられましたが，学習到達度が多様化する中

での大学入学者の受入の現状があり，高大教育接続改革を含めた教育改革において，どれほど大学入学者選抜の改革が重要視されるのかが整理できない状況です。かつて大学入試センター試験でリスニングテストを実施すれば，中等教育課程の英語教育が大きく変化し，英語運用能力の抜本的な改革ができると言われていました。この内容はどうだったのでしょうか。何か検証が行われましたでしょうか。大学入試センターとしては，とにかく文科省高等教育局大学振興課等から指示・委託を受けられて，その具体的な実施の実現にご尽力されるものとは思いますが，シンポジウムに参加する高校，大学およびその他関係機関は，全体的な教育改革の政策内容を意識してしまうものと思います。今後はそんな視点も組み入れていただければとは思いました。（私立大学，事務職員）

○各大学での公表期限が迫っているのに対し，決定事項の不明瞭さが気になった。全体と個別との関係性もあいまいなままとなっている。全体像を改善せず，今の枠組みに詰め込もうとしているという話は，参考にもなった。（国公立大学，教員・研究員）

○国公立のみでなく，私学がしっかりと参加可能なスケジュール感はやはり必要と感じました。大学の一部の参画では，本来の高大接続の趣旨からはずれます。また，参加者のターゲットをより絞ることも必要だと思われます。（国公立高校，教員・研究員）

○複数回実施し，記述も含め，1 点刻みではなく段階で評価。また，IRT などテスト理論に基づく統計的な合理性を備えるといった構想がだんだん削ぎ落され，ここに至る。現実的になった反面，中途半端とも感じられる。入試が変わらないから教育が変わらないと言われたが，どれだけのインパクトを与えることになるのだろう。（民間企業，その他）

○理想と現実の溝は，本当に埋まるのかが疑問。大学入試を高等学校教育改革の手段とするのは，いかがなものか。（私立大学，事務職員）

○入試改革はうまくいっているとはいえない。今まで通り，センター→2 次テストでよいと思う。今回の改革は結局マイナーチェンジにしかなっていない。また，変える必要もないと思う。日本の教育制度はすばらしいと思っていて米国は破たんしていると言っている人もいる中で，中途ハンパな改革は必要なし。（国公立高校，教員・研究員）

○途中のアンケート結果から，キーワードは「記述式」「英語 4 技能（外部検定）」「主体性の評価」かと思う。いずれの件についても課題山積み，さらには議論の進展もほとんどナシ，となるとうまくいく気が全然しない。やってみて，やっぱりダメだった場合「やっぱりや～めた」という方向修正はありうるのか？　個人的にはあっても良いと思うが……（民間企業，未記入）

○新共通テストに私大が参加できるのか不安です。できない場合，新共通テストは成り立つのでしょうか。（国公立大学・事務職員）

○競争率の高い大学では共通試験の効果は期待できるとは思うが，中堅より下の高い倍率が出ていない大学にとっては，センター試験より共通試験にすることで志願者が減るとしか思えない。そもそも大学入試改革が改革されていないので高校は受験のための勉強がメイン。多様な高校は年明けは就職メインで専念したいので，進学希望者への指導は年内入試＝ＡＯ・推薦がメイン。もう少し倍率の低い大学の視点に立っての説明，もしくは共通試験は国立のみ利用可能で私学は利用不可にしてしまう，のどちらかにして欲しい。（私立大学，事務職員）

○新テストについて高校と大学ではかなり温度差があること。現状では殆ど具体的なことが決まっておらず，本当に実施できるのかとまた不安になった。（国公立高校，教員・研究員）

○改革そのものですが，ずいぶんと温度差がある事実を改めて実感しました。高等学校教員の個人レベルでの温度差は体感しておりましたが，大学の先生から「改革の主体はどこか？」という問いがあの場で出てきたことに驚きを隠せませんでした。周知徹底が難しい時代となったのでしょうか。（国公立高校，教員・研究員）

○今年度より特別支援学校の校長に着任した（昨年度までは教育センター）。沖先生が話題にしていたが，障害を持つ生徒への対応を課題としながらも，今回のシンポジウムでは特別支援関係者はほとんど参加していない。今回の参加者の中に特別支援学校の参加者がどれくらいいたか概数で結構ですので可能ならば教えていただきたい。校長会等で特別支援（特に盲学校，聾学校）の校長の意識啓発に活用させていただきたい。

　高等学校までの教育の質の向上につなげていけるかは，私立大学がどの程度，この改革を意識するかによって大きな影響を受ける。これは文科省の管轄かも知れないが，ぜひとも，私立大学を巻き込むことを期待する。本日はありがとうございました。（国公立高校・教員・研究員）

○今の児童生徒を見ていると，やること一杯でしんどそう。益々ハードルが高くなる大学入試を見て益々詰め込むことになる。大学入試のハードルを低くして，卒業要件を厳しくする方向は検討できないのか？　小・中・高・大の長期的なスパンでの学びができるような方向は検討できないのか。理屈では今までもそういう方針だとは掲げられているが，お題目だけで終わっている。（民間企業，未記入）

○高大接続改革によって高校の教育が変わると論じられるが，現在の高校の教育の課題（例えば授業のあり方）が何なのか，本当に現在の高校の教育は課題だらけなのか，ずっと釈然としないまま改革の議論の動向を見守っている。（国公立大学，教員・研究員）

○調査書の用意について，学部・学科ごとに記載事項を変えて用意（何パターンも）作らなければならないのか。前期　法　　後期　経済　など。（私立高校，教員・研究員）

○もう「秋入学」が良いですね。そうすれば，実現しうることも増すと思われます。（その他，その他）

【記述式問題について】

○共通テストの記述式の採点や自己採点の基準をどのようにクリアーするのかが課題となっていますが，今後のシンポジウム等で取り上げていただけたら幸いです。（国公立高校，教員・研究員）

○自己採点結果に，実際の得点とのずれが生じると，私立大学の受験に影響があると感じました。（国立大，第１志望の場合に）（私立大学，未記入）

○記述式を導入するにあたり，試験時間は試行調査通り国語 130 分，数学 70 分でいくのか。数学は短いように感じます。（国公立高校，教員・研究員）

○共通テストに記述問題を導入することによって高校の授業が変わるという短絡的な図式で，改革の柱が論じられるのであれば「大改革」とはそういうことなのか？という疑問が残る。センター主催のシンポジウムに対する感想としては，ズレていることを承知で書かせていただいた。（国公立高校，教員・研究員）

【民間の資格・検定試験活用による英語の４技能評価について】

○英語の試験において民間業者の活用を進めているが，障害を持った生徒への配慮がされるのか心配である。これまでのセンター試験における障害者への対応は，本県においても一つの判断基準としてとても参考になるものであり合理的配慮の面からも素晴らしいと感じていた。このような点からも一校長としては，都立西高校の校長が言っていたように，民間活用ありきの方向性にはデメリットも多いことを感じている。（国公立高校・教員・研究員）

○英語の民間試験について，新テストとして使用する場合は，受験したものの中からこれを新テストとして使用しますと申告するのか，それとも，受験する前にこの試験を新テストとして使用しますと事前申告するのか，どちらでしょうか。以前他のセミナーで文科省大学入試室長の方が，後者の予定とお話しになっていました。（国公立高校，教員・研究員）

○英語４技能評価について，特に問題になっているスピーキングテストについて，文科省もしくは大学入試センターが自ら評価できるよう独自のテストを開発すべきである。文科省は早い段階で自力開発を諦めてしまい，民間検定試験活用という方針

を打ち出してしまったが，やはり問題は多い。宮本先生もおっしゃられたように民間検定試験は学習指導要領との齟齬があり，また現在模索中の成績データ送付のシステム開発には莫大な費用がかかるとのこと。実は昨今スピーキングの採点に関する技術革新が進み AI でも精度の高い判定が可能になっている。この辺りをよく調査され方針を見直すべきと思います。（塾・予備校関係，事務職員）

○入試改革における大学入学共通テストへの移行については，前向きな改革ととらえていますが，入試は絶対的な公平性の基に実施されなければならないと考えます。その面では，英語の 4 技能の外部試験の利用は，実施方針にも記載されていますが，センターでの実施が不可能だから，外部検定試験を利用するという考えが，根本的に間違っていると考えます。本当に英語の 4 技能が必要ならば，あくまでも，大学入試センターと大学の相互努力の上で，試験問題を作成し，公平性を担保した上で実施すべきではないかと考えます。（国公立大学，教員・研究員）

【試行調査（プレテスト）について】

○自己採点の精度を上げるための一例として，動画配信をあげていたので，是非とも実現に向けて検討していただきたいと思います。可能であれば，今年 11 月のプレテストの自己採点において，記述のところだけでも，自己採点動画作成に向けた試行ということで配信していただけると，現場としてもより生徒の実情をお伝えしやすいし，本格実施に向けて役立てていただけると思います。よろしくお願いいたします。（国公立高校，教員・研究員）

○プレテスト（試行調査）の実施について，平成 30 年 11 月は多くの私立大学が推薦入試を実施しております。私の大学でも当日は推薦入試日に当たっておりまして，プレテストに協力することができない状況です。プレテストの 11 月の実施を他の月に変更していただくことを検討していただきたく存じます。もっと私立大学のスケジュールを考えた上でプレテストの実施日を決定していただきたかった。（私立大学，事務職員）

【モニター調査について】

○モニター調査の内容と結果について，グラフや箱ひげ図，検定結果について，もう少し詳しく説明していただけるとよかったです，私自身の統計的な知識の欠如もありますが。高校の先生のお話を聞くことができてよかったです。（国公立大学，教員・研究員）

○モニター調査の結果共有に関しては，何を確認する為に調査したのかの調査設計部分のご説明がなかったため，ご説明くださったほうが良かったと感じます。（民間企業，その他）

【シンポジウム全般への肯定的な感想】

○大学入試改革に向けて，さまざまな立場の方の意見や考え方を聞くことが出来て，参考になりました。本学では，どのような改革や選択が出来るかをしっかり考えていきたいと思います。ぜひ，これからもこのようなシンポジウムを開催してください。（私立大学，事務職員）

○国立大学，大学入試センター，私立大学それぞれの観点からの説明や講演がありとても参考になった。（私立大学，事務職員）

○普段直接伺うことの少ない国公立大学や高等学校の考えなどを聞けたことは有意義だったと思います。（私立大学，事務職員）

○大学入試センター，高等学校，大学，それぞれの立場を再確認できたことが収穫でした。特に早稲田大学の沖先生のご報告は，頷くことばかりで，規模は違えど，問題点は私立大学としては一致しており，これから着手しなければならないことがよりクリアになって大変良かったと思います。新テストについては，問題はどうしても生じますが，学習指導要領で学んできた高校生（受験生）に不利益が生じるテストにならないことが第一と考えます。（私立大学・事務職員）

○自由な意見が聞けて良かった。（私立大学，事務職員）

○大学入試の改革についての現状が少し分かった。（私立大学，事務職員）

○早稲田大学入試センター副センター長，沖先生の論点には考えさせるものがありました。特に中堅校や進路多様校の生徒全体の基礎学力を根付かせるためのテストを実施の上，現在の AO，推薦へとつなげていく必要があることを再認識しました。（未記入，その他）

○沖先生の話が非常に良かった。たしかに基礎テストは，どーなっている？という点に改めて気づきがあった。（私立大学，事務職員）

○沖先生がいらっしゃり，私大の課題が上がり良かったと思います。（私立大学，事務職員）

○全体的に具体的なお話を伺えてたいへん参考になりました。私学に所属しておりますので，特に沖先生のお話を興味深く聞かせていただきました。国立大学の役割は非常に重要ですが，一方で日本の社会を支える人材の大半は私学出身者であることも決して見過ごすことはできません。特に中位以下の私学はそのような人材を社会で貢献できるように教育を行い送り出す使命があると思っております。沖先生のご所属である早稲田大学は私学のトップ校ですが，日本の私学の使命をふまえてお話しくださり大変共感させていただきました。実際に日本の高校生の私学への進学率を考えますと，自助努力は重要ですが今回の入試改革に対して私学の対応が非常に

難しいことと，国立大とはまた違う意味で社会的責任が重大であると改めて認識いたしました。（私立大学，教員・研究員）

○私立大学でもセンター試験利用がこれだけ進んでいるにもかかわらず，共通テスト等では私立大学の立場からの視点が欠けているという，沖先生の指摘は全くその通りだと思います。高校が外部業者の試験に反対し，私立大学が CEFR の段階評価では使いにくいといっている英語についても，予定のスケジュールで実施するのはまだまだ課題が多いと感じました。（私立大学，事務職員）

○早大・沖先生，西高・宮本先生の話は理路整然で論旨明快でわかりやすかった。「新共通テスト」と「高大接続改革」が混在して議論されていた印象をうけた。「新共通テスト」は国立大学の為のテストと思われる。（私立大学，事務職員）

○川嶋先生の私見で，定員管理と秋入学については，私も以前から議論するべきだと考えていたので，我が意を得たりの思いであった。（国公立大学，教員・研究員）

○登壇者いずれも素晴らしく，多くを学ばせていただきました。とりわけ大杉住子審議役のお話（「創造性」と「持続可能性」等）が印象的でした。25 分間あっと言う間で試行調査について等，さらにうかがいたいと存じました。ありがとうございました。（国公立高校，教員・研究員）

○作問の苦心を感じました。テスト学会について知らなかったので，よく調べてみたいと思います。（その他，教員・研究員）

【シンポジウムに関しての注文等】

○大学入試改革に関して不透明な点が多いことから情報収集を目的として参加をしたが，学内での議論に活かせるような情報を得ることができなかった。（私立大学・事務職員）

○大学入試センターの事情や現在の検討状況や今後の検討計画について初めて聞いたことが多かったので，これからはもっと頻繁に発信して頂けると有難いと思いました。新共通テストを入試にどのように使って行くかは，高校と大学の両方に重要と考えています。（国公立大学，その他）

○課題共有の場としては有益でしたが，その課題の解決の方向性まで討論が及ばず，また，解決に向けてどう動くのか明確なアウトプットがなかったので，未消化な感覚で終わったのが残念でした。（民間企業，その他）

○多くの課題，問題を含むテーマなので，報告や討論の内容をもう少し絞るか，今回に限って 2 回に分けて開催するか（これは無理ですかね）できればとも思いました。（国公立高校，教員・研究員）

○大変勉強になりました。もう少しコンパクトにポイントを絞ったものにすればさらに良いと思います。（国公立大学，事務職員）

○シンポジウムのテーマのうちの１つ「個別選抜改革の方向性」については，ほとんど触れられず，示唆となるようなものを得られなかったのは，大変残念でした。時間の問題もあったかもしれませんが，分かりづらい内容のものもありましたので，聴衆がシンポジウムのテーマと結果的に結びつけて考えられるような報告の仕方にしていただけると良かったのではないかと考えます。全体討論は，せっかく全員が登壇しているので，もっと討論していただけると良かったのではないでしょうか。司会者との一問一答のようになってしまって，残念でした。（私立大学，事務職員）

○私大や高校からの視点があってもよかった。（私立大学，教員・研究員）

○登壇者の人選には充分な配慮を感じました。文科省関係者がいてもよかったか，と思います。東北大フォーラムや入研協シンポでも感じますが，なるべく最後のディスカッションに多くの時間を割きたいところですが，やはり難しいでしょうか。自身も小さな勉強会の運営に携わっていますが，予定調和的でない話が今はいちばん必要ではないでしょうか。その意味では，南風原先生に振った進行はおみごとだったと思います。（国公立高校，教員・研究員）

○高大接続改革がテーマになる以上，文部科学省に問うことが適切な質問が多くを占めると思います。どこに質問すべき内容か分からない参加者が多いことには驚きましたが，それが現状であることを認識することができました。今後もしばらくは高大接続，入試制度改革がテーマになると思われますので，文部科学省の担当者には客席ではなく，登壇していただくのが妥当ではないでしょうか。（国公立大学，事務職員）

○質問用紙に対する回答やそれについての討論の時間を，もう少し取っていただきたかった。選抜性の高い大学や，難関大への進学実績が高い高校だけではないということも十分に配慮いただいた上での高大接続改革と新共通テストによる入試改革であって欲しい。（私立大学，事務職員）

○基調講演…高大接続改革実施前夜であり，世界的状況中心の講演になってしまったので，今次改革の内容をほりさげる内容を期待していた。来年度は是非，掘り下げてほしい。報告１…大杉審議役の説明はもっと時間があった方がよかったと思う。報告２…モニター調査よりも報告１にボリュームがほしかった。報告３…私大のスタンスがよくわかった。基礎学力テストが AO，推薦入試に不可欠だと感じた。指定討論・全体討論…本日のポイント，とても有意義でした。今後の対応に有効活用を期待しています。（省庁・役所，事務職員）

○現実的な変革のタイムテーブルをより詳細に知りたかった。（私立大学，教員・研究

員）

○国立大学の方向性は理解できたが私立大学の個別選抜の方向性が分かりにくい。沖先生の共通試験（のみの判定 2 月×）で（のみ判定 3 月△），のみ判定は×なのかが分からなかった。（私立大学，事務職員）

○指定討論者のご意見について，主な論点はレジュメが欲しかった。後回でよいので，まとめたものを参加者にメールで配信してほしい。（討論内容について）　また現場の一職員として聞いていた限り，討論の Q と A がかみ合っていない場面が少なくなかった気がする。（私立大学，事務職員）

○特に指定討論，全体討論において多くの視点を得ることができ，大変勉強になりました。（国公立高校，教員・研究員）

【運営面について】

○内容はともかく，以下の 2 点はシンポジウム開催の資格がないとされてもおかしくない，運営上の重大なミスだと思う。①席について　満席では隣の方が気になる。最低でも 1 人おきを目安に，会場 or 定員を決めるべき。　②お手洗いについて　建物 1 F は工事中，3F は施錠されていてともに使用不可。しかも変更後の所定時刻に戻れない方が一定数いる中で，プログラムを再開するのは主催者側のマナー違反だと思う。話を集中して聞く必要がある側にとっては最低の環境だった。（私立大学，事務職員）

○トイレが足りず，かつ，他の階も使用禁止というのは，厳しいと思います。進行の面からも，影響があるのではないでしょうか。（私立大学，事務職員）

○席指定でもよかったのではないか。アンケートには回答しなくてよい項目（性別など）を明記したほうがよい。（国公立大学，教員・研究員）

○会場は休憩時に離席しやすい会場が良い。（国公立大学，事務職員）

○平日開催を希望（私立大学，事務職員）

以　　上

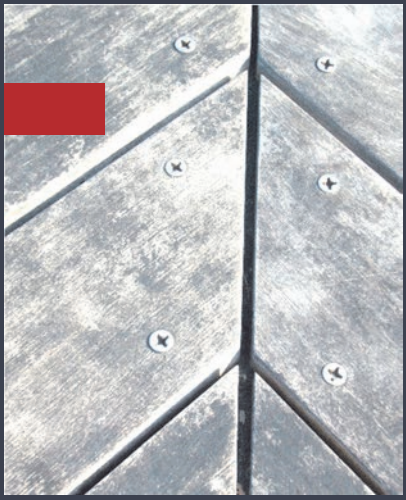
〔入学者選抜研究に関する調査室報告書 4〕

大学入試センター・シンポジウム◉2017

大学入学者選抜の新展開

新共通テストの課題と個別選抜改革の方向性

発行日/平成 30 年 3 月
発行/独立行政法人大学入試センター
〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23
☎03-3468-3311
編集・文責/総務企画部入試研究推進課



http://www.dnc.ac.jp/